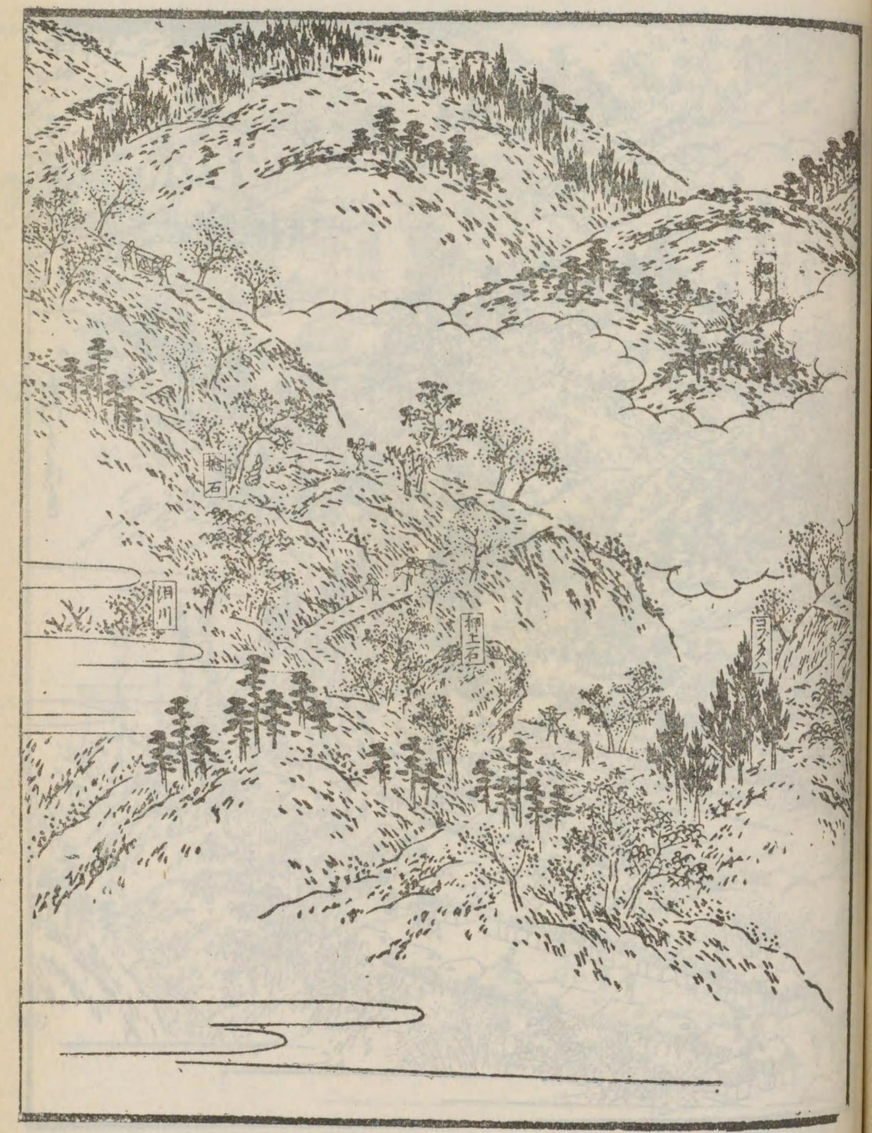
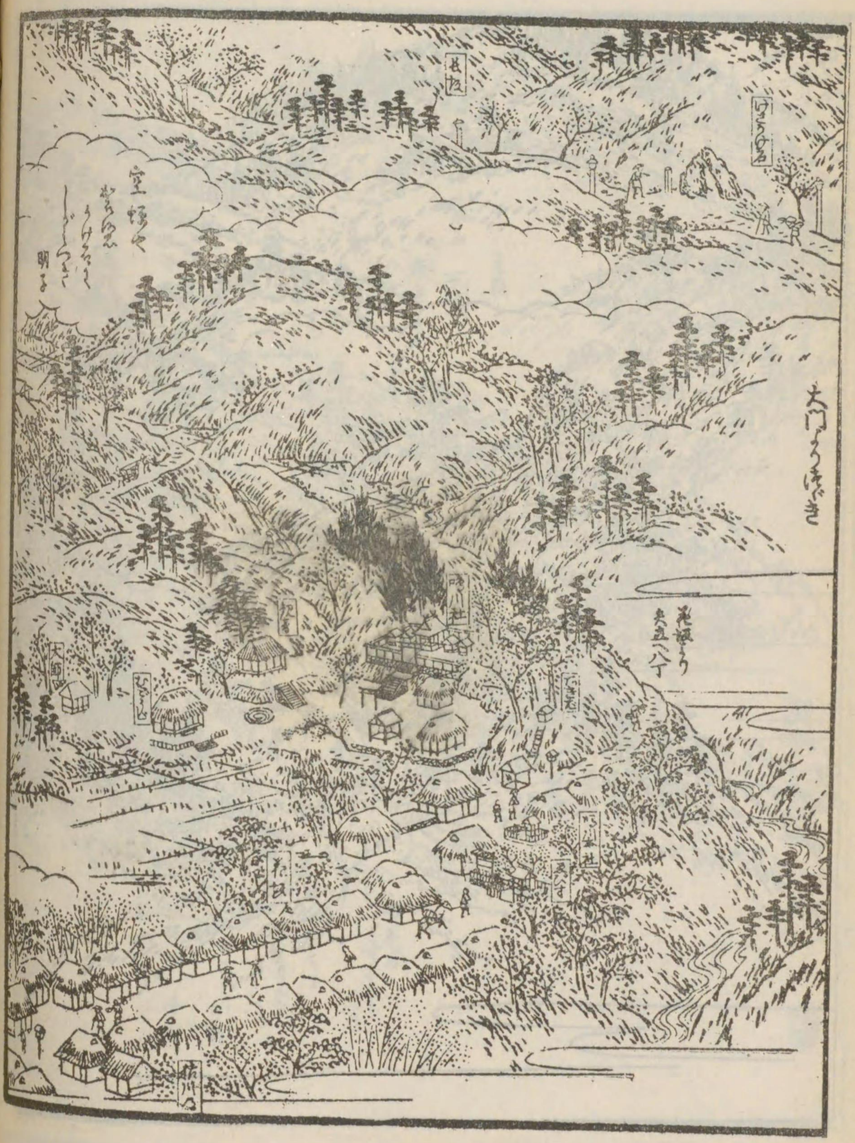
泥田坊
陽やや今の
あけまる
仏供岩
若角

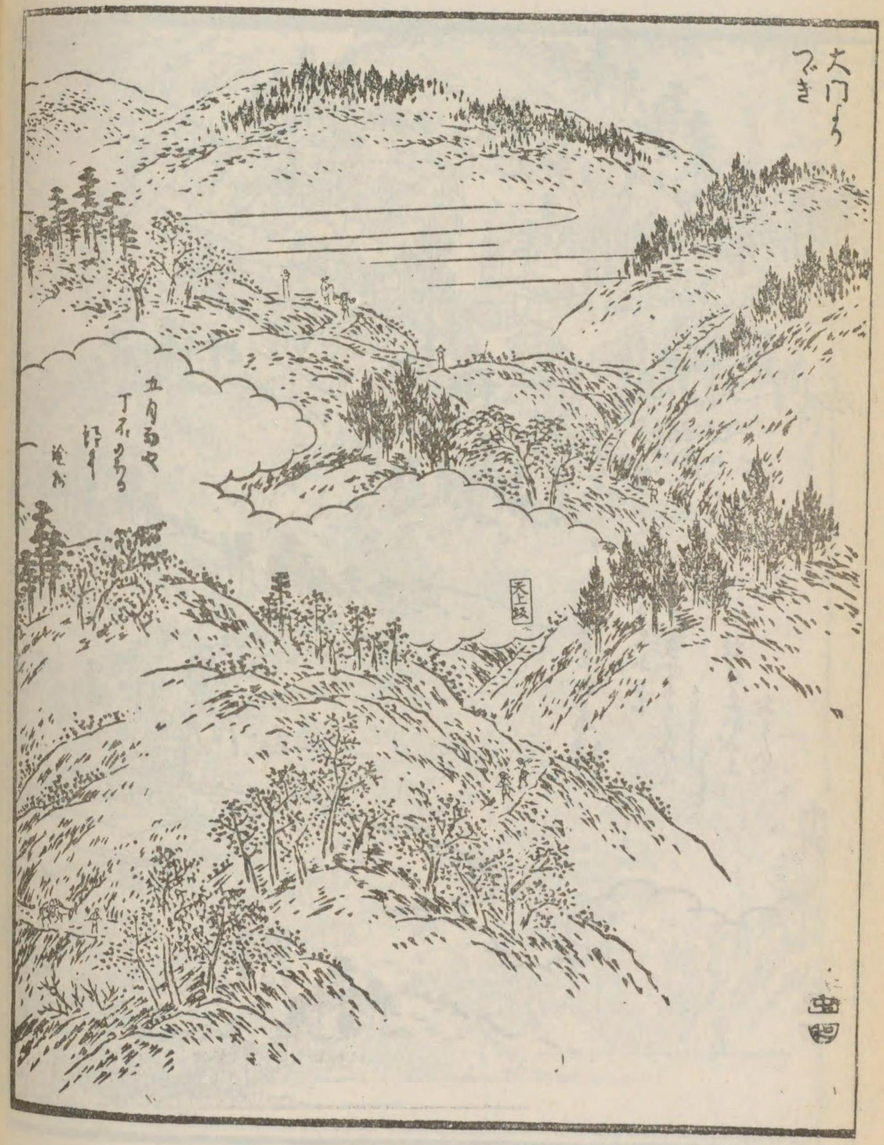
千山
長福寺山


橋石
川
柳土石
ヨシノタ(ヘ

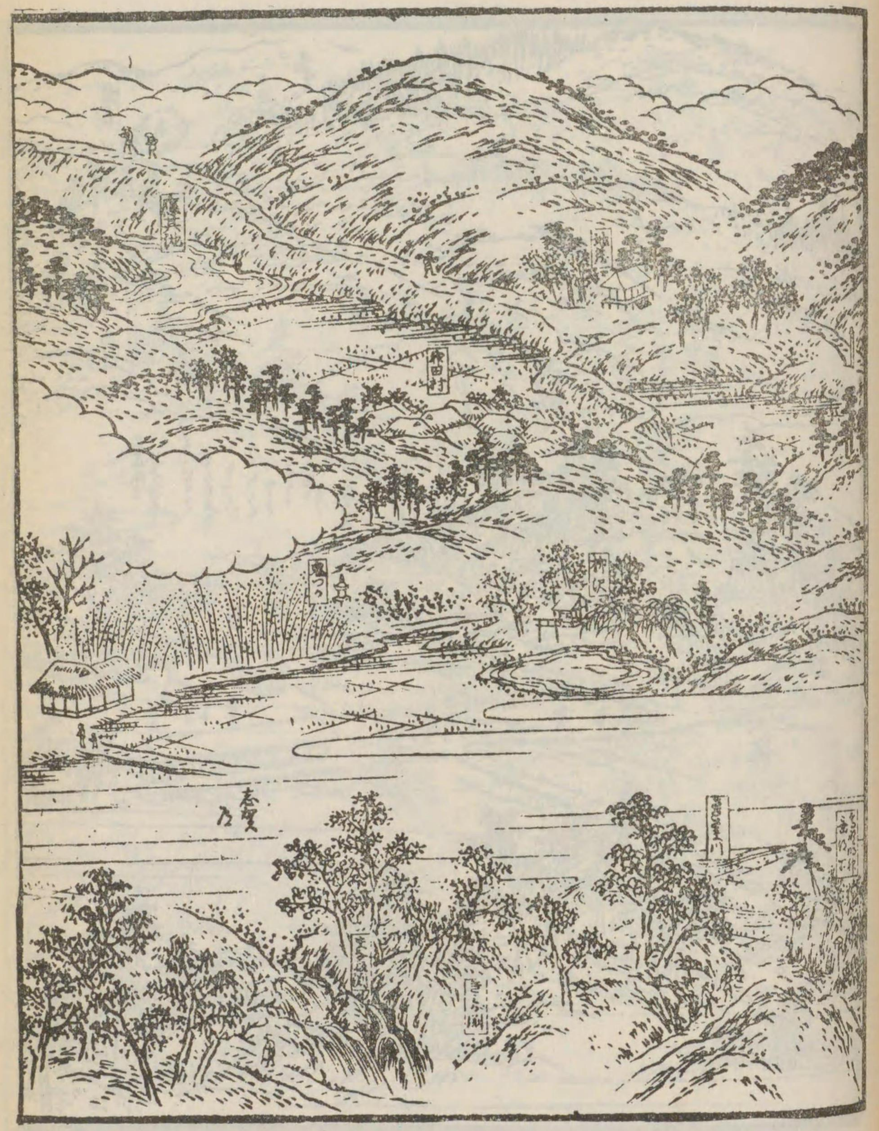
船石
土色木
日蔭
角石
住流
角石
廣場

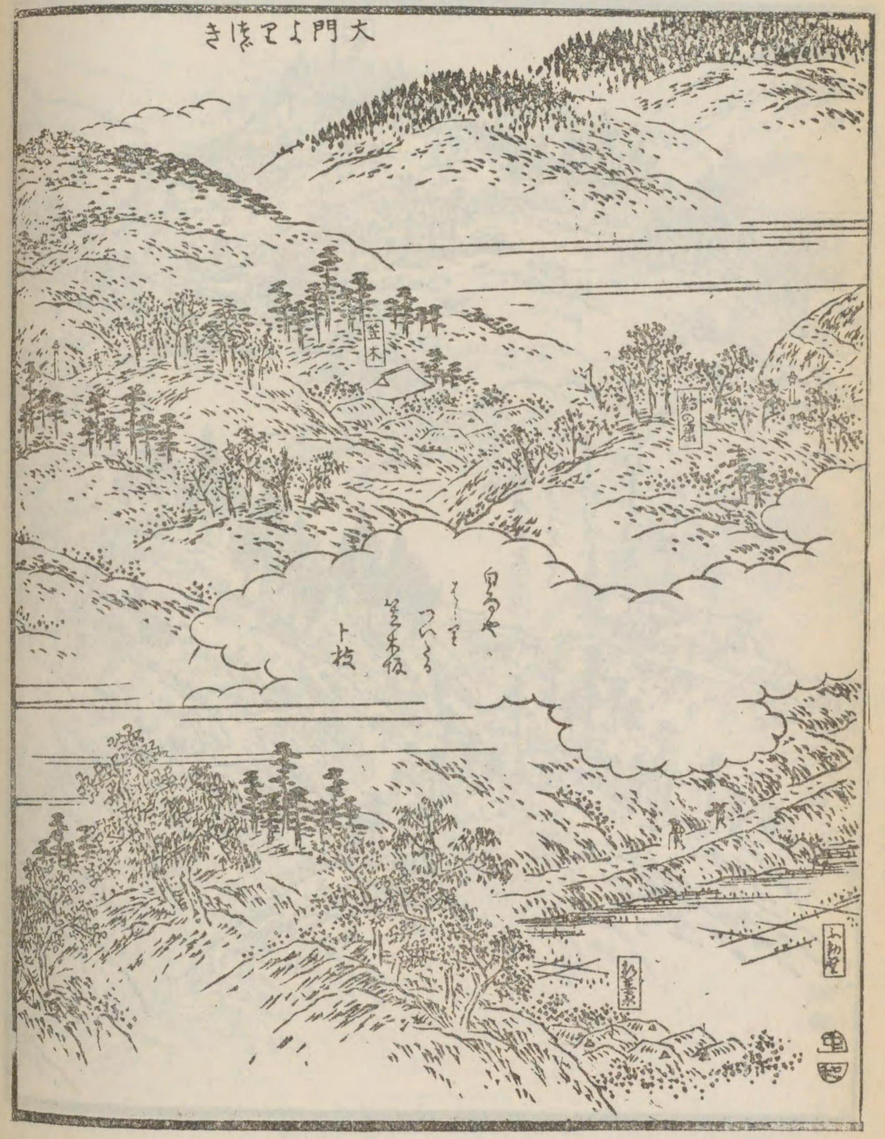


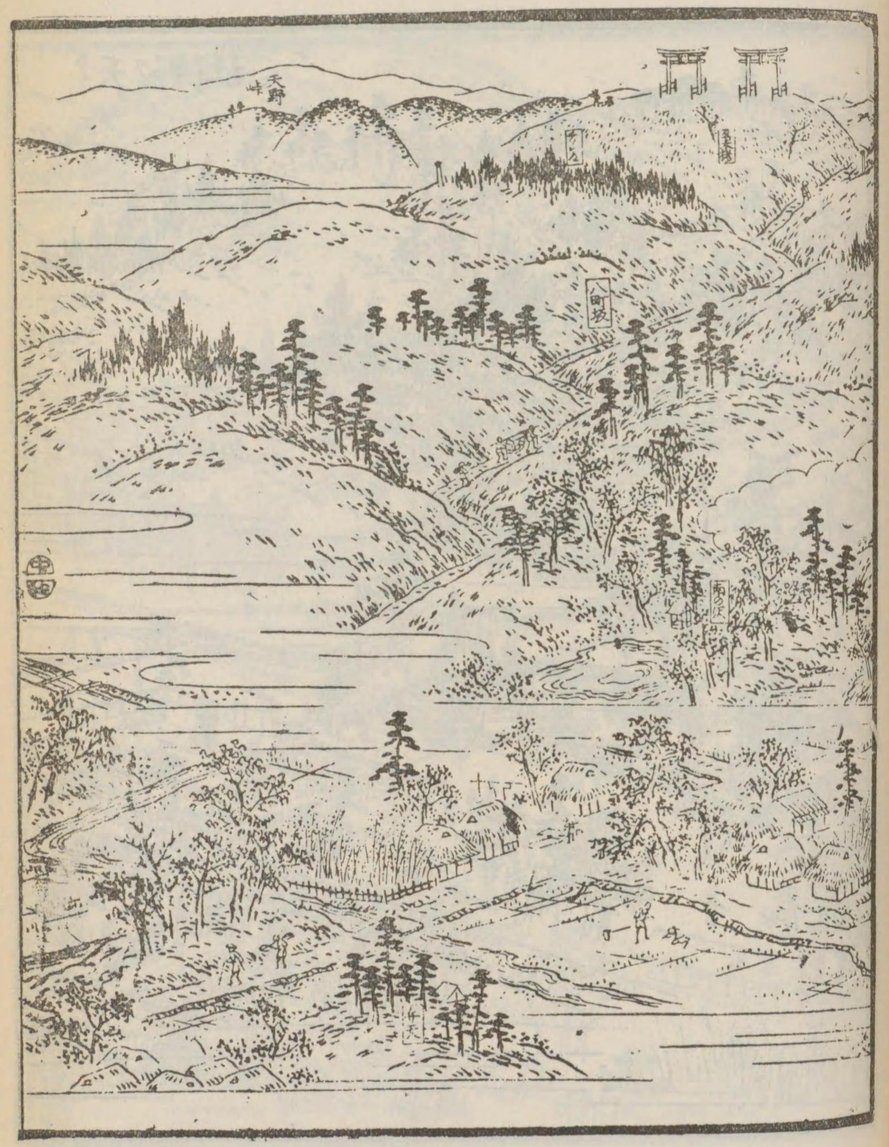
大門ゟつゞき



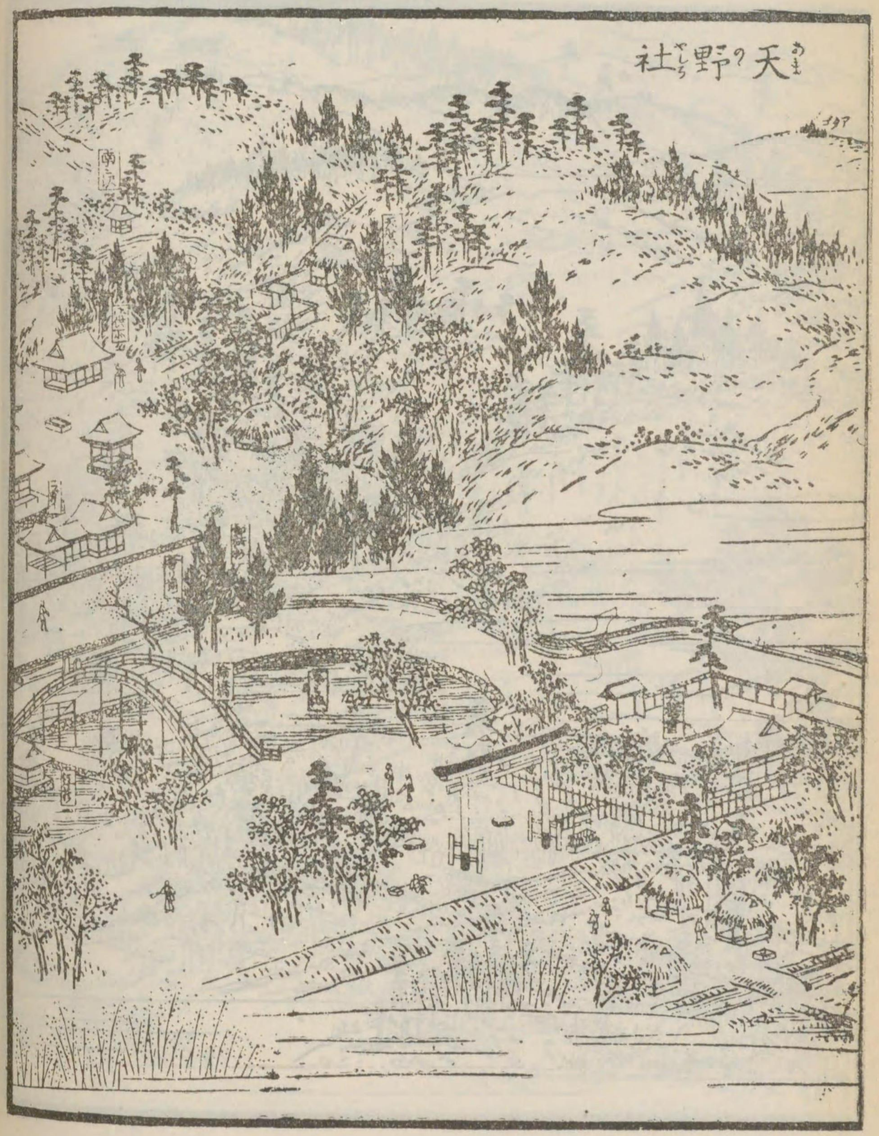
信雄




大門よりきた
笠木
笠の滝
卜板

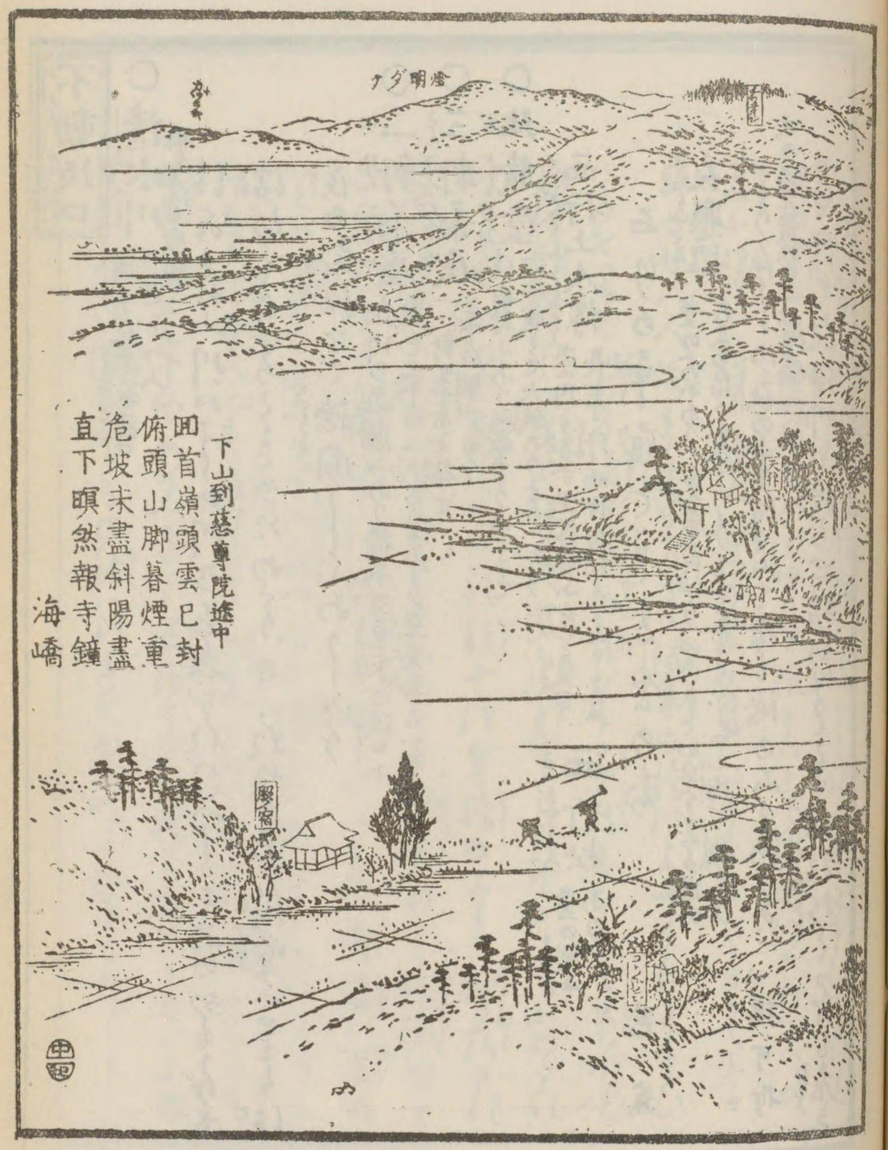

天野峠
八町坂

天野
秋田


天の野社

床几

天野ぶき
金剛山


下山到慈尊院遙中
回首嶺頭雲已封
俯頭山脚暮煙重
危坡未盡斜陽盡
直下暝然報寺鐘
海嶠

不動坂口

○清水川　橋本及東家渡口の辺をいふ

稱名院右府記

清しといふ川ハよしの川の末なれバいつしかその名もうげも
浮びくるゝもとゝめかれわかり日られぬまで信濃にとまり後
夜の念仏など聴聞しくおもしろかり

○二軒茶屋　紀川の南岸にあり橋本及東家の渡口に對ひ茶店二戸あり是より学文路まで一里

○三軒茶屋　二軒茶屋を接す茶店數戸あり

○地藏堂　清水村にあり此堂より山上まで六地藏とて六躰ありその一なり

西行上人像　堂内に安ずる坐像背に包を負へり長七寸許西行此地にすみしといふ　西行松　堂の側にあり

西行の草履もかゝれ松の花　芭蕉

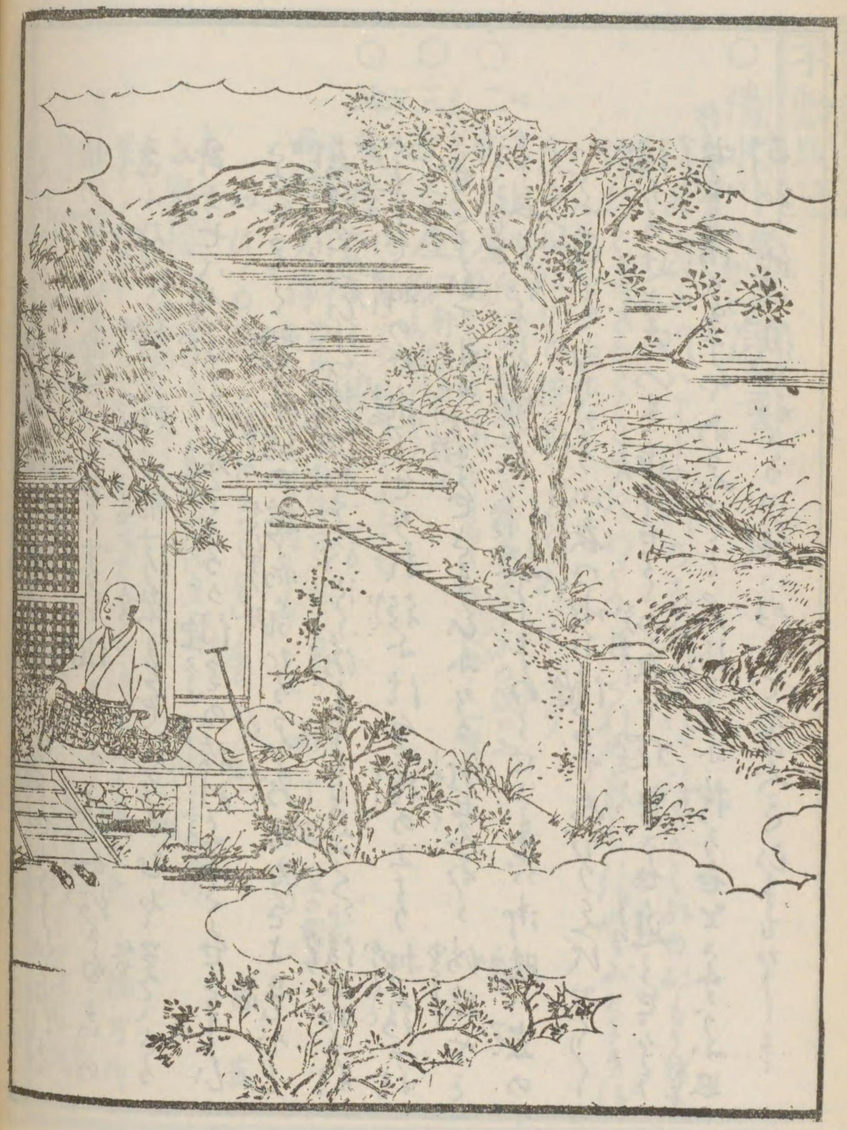
衣懸櫻　堂のまへにあり　光嚴院法皇の御衣をかけさせ玉ひし櫻の古木の枯たるあとなりとて今さらに小櫻を植たり

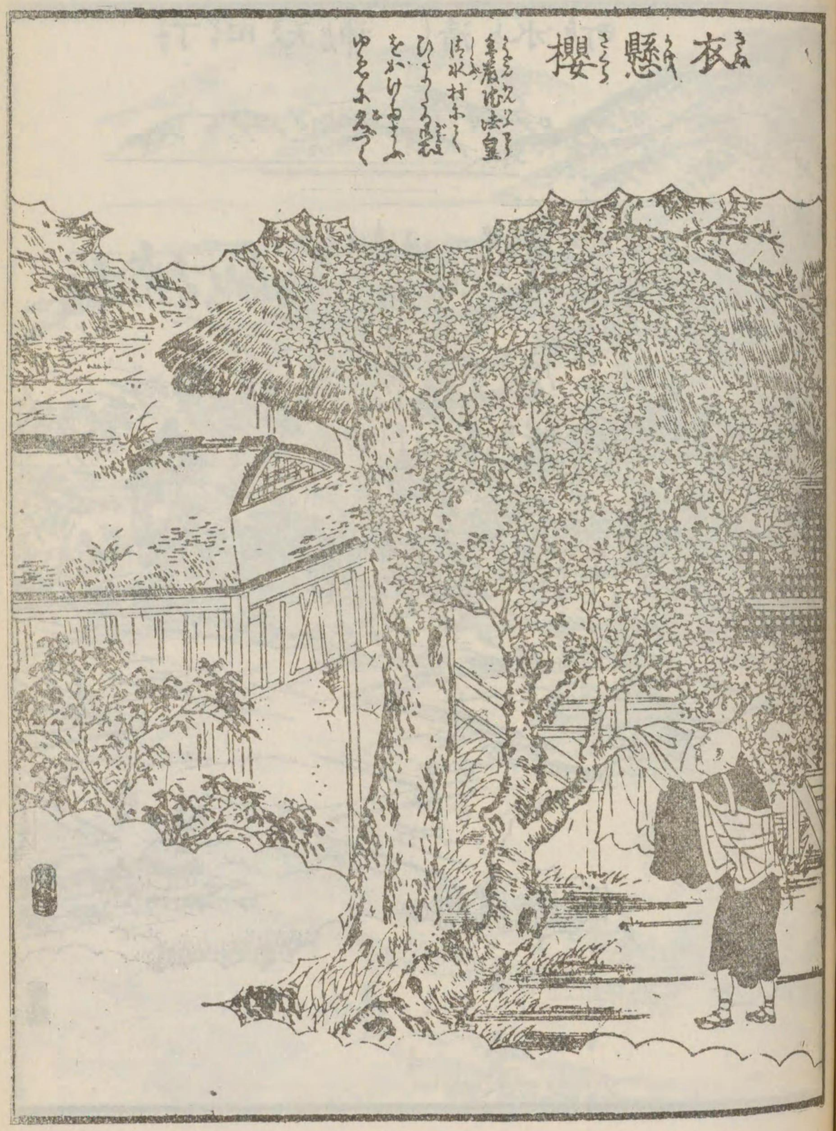
とりけし御衣の袖からみて今も添のちる櫻かな　橘可折

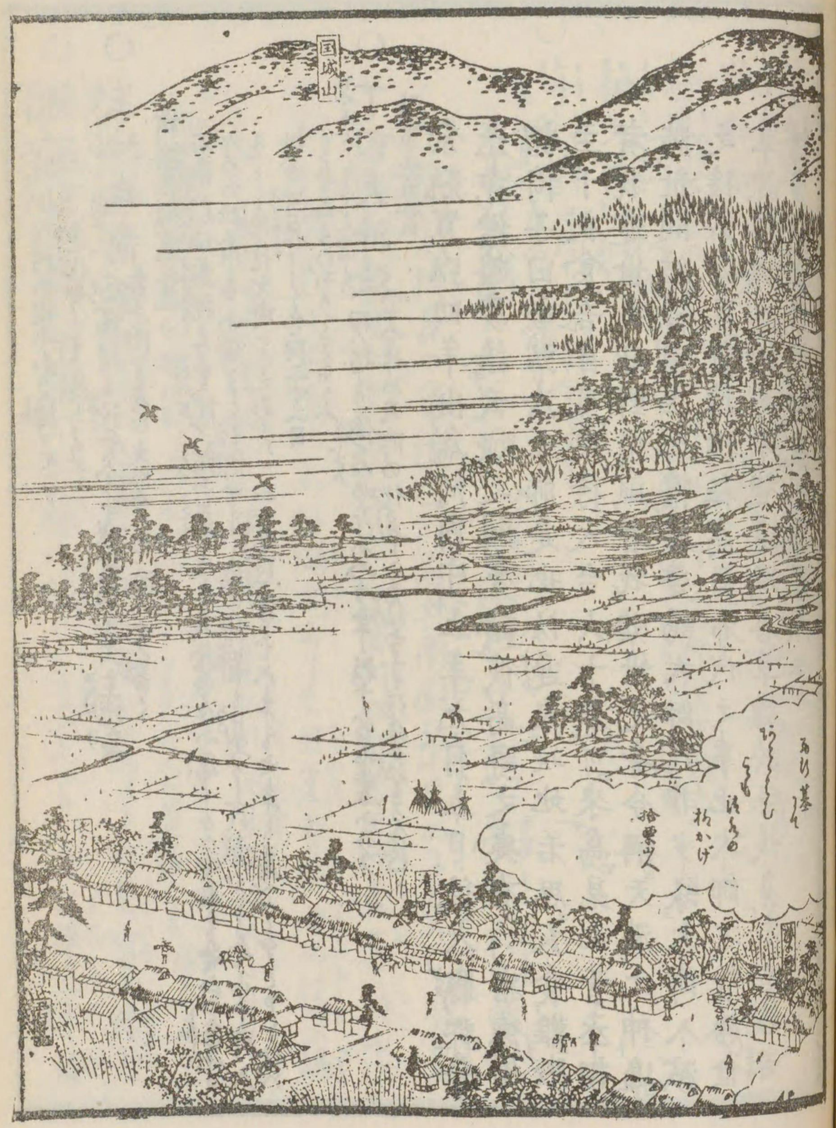
太平記光嚴法皇御臨幸の條

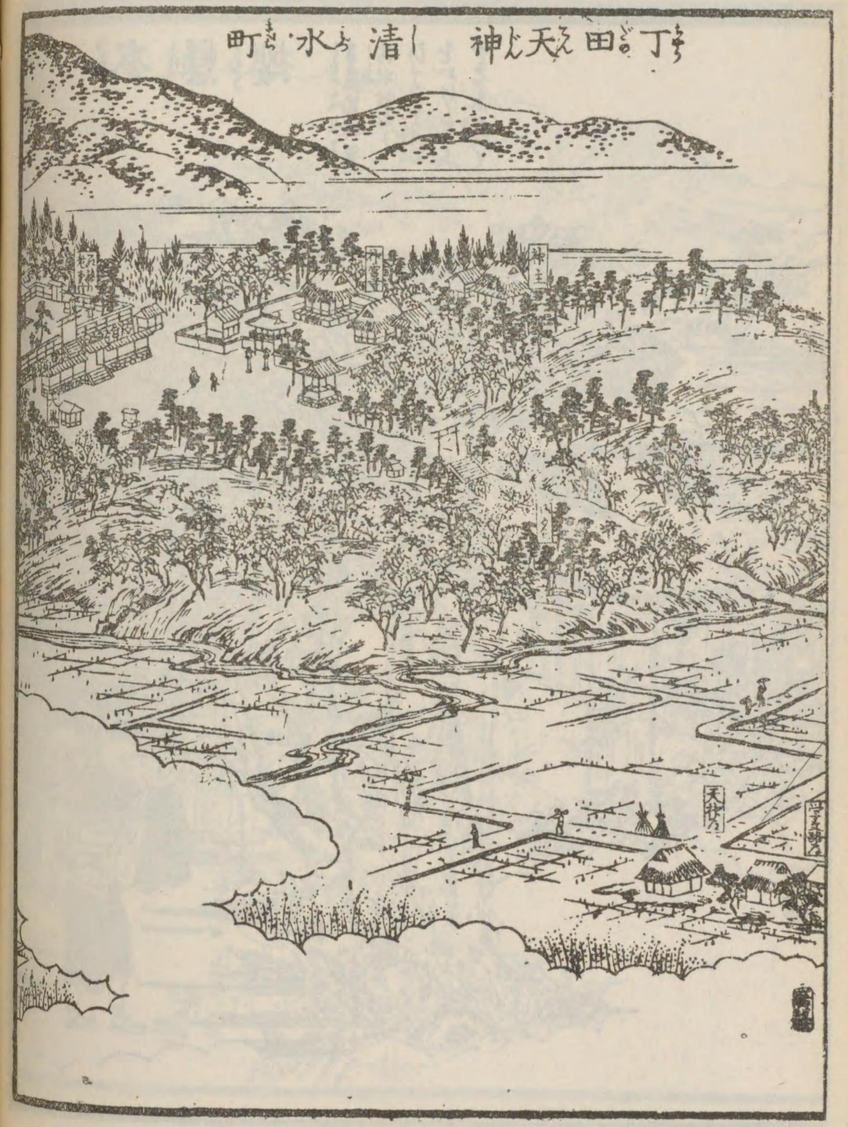
日を経て紀伊川を渡らせ給ひけるとき橋杭朽て橋板も危き

棧道あり御足冷く御肝消て渡りかねさせ給ひければ
橋の半にたち迷ひておはしますを催しもあへず如何なる者の
道に僧を張て眼すさまじきぞなむやおそしと
武士七八人跡より来るが法皇の橋にたゝせ給ふを
さるを見て此なる僧の臆病気なる見苦しさよ是かと
急ぎ其のひとつ橋をわたらバ疾くわたれ後にわたれ
かしとて押のけ進らせければ法皇橋の上より押落され
させ玉ひて水に沈ませ給ふ見る人あら浅猿やと
く衣装ながら飛入て引起しまゐらせたれバ御膝ハ岩の
かどに当りて血になり御衣ハ水に濡て云がひなく
傍なる辻堂へ入進らせて御衣を絞らせ進らせけり
古き法の事やおもへバ君ほどに捨る世をさすがに思
ひ出る御涙ハ浅のかゝる御袖ハぬれまでかわくべきひまもなしまこと



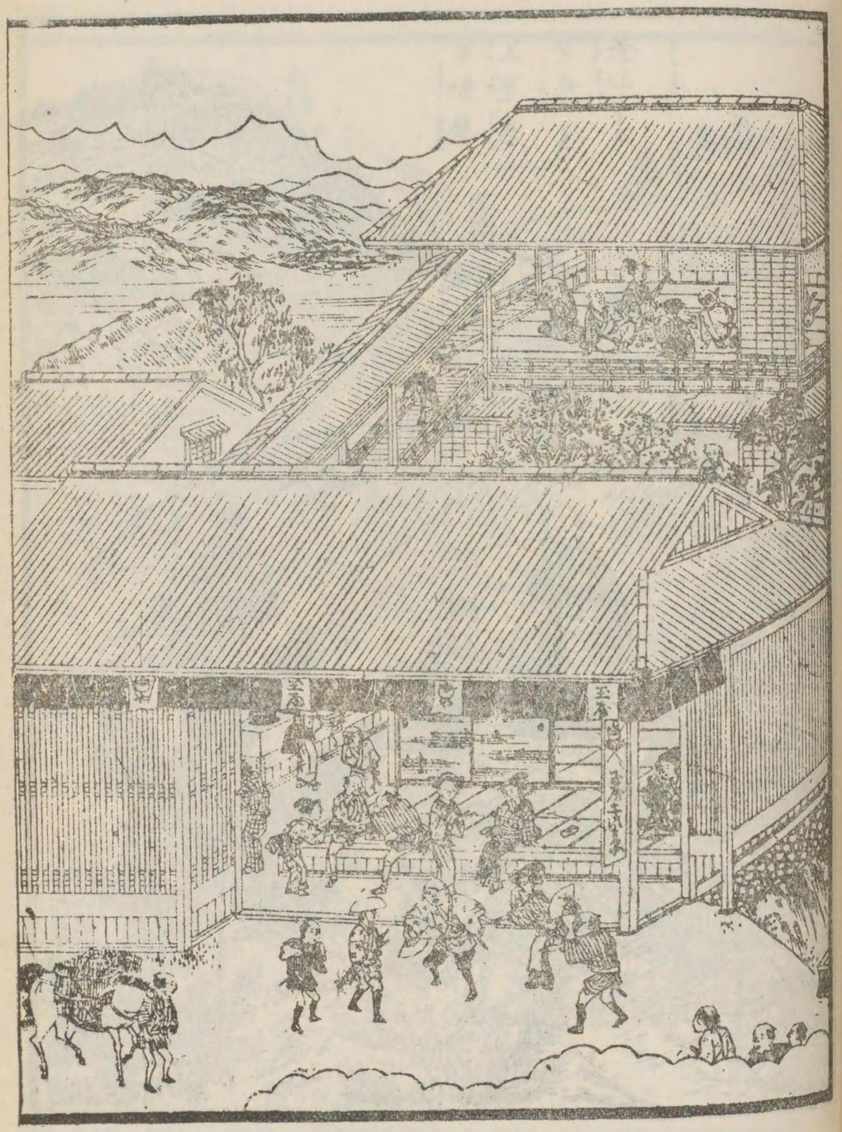


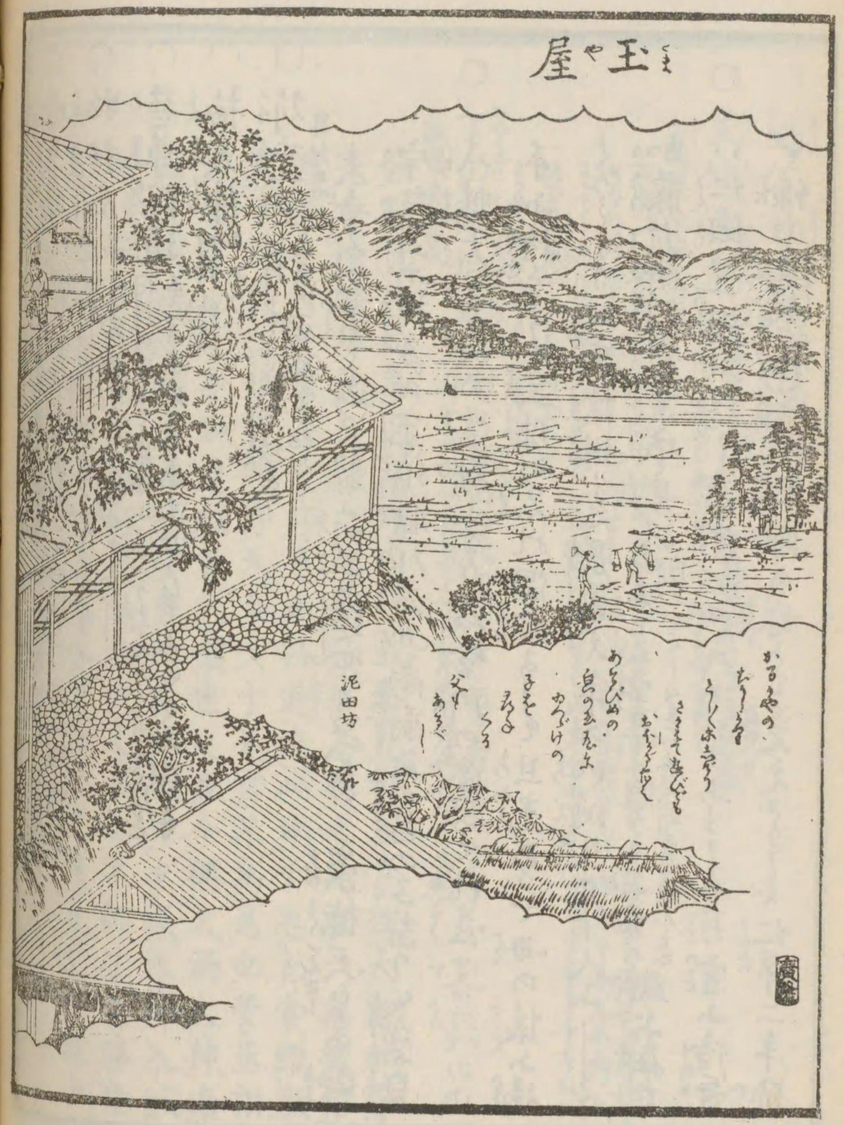

国城山


清水町
天神

○鎌不動　日村の内にあり　縁起あり
○生地氏爾　右京圀生地村より住す今も此氏多し
新撰姓氏録寛正記
右衛門佐義純もと此地に住せしかば…
…
○丁田天神社　日村にあり
政事要畧云
余勘寛弘四年出爲河内守五年九月九日往大縣郡普光寺僧幡慶語云嫉之間夢詣彼高野之處有一宿徳僧謂倚子曰吾弘法大師是也汝遲來此地若思衣食難歟至于衣食吾自可供持天台六十卷可來爲見也菅丞相者我遣世之身野道風者我順世之身今稱天満大神遍滿世間結縁衆生也幡慶夢謁大師已非少縁大師入滅之後其身不亂壞猶在高野希代之事也大師才智勝世草隷得功丞相足才智道風善草隷於称後身尤有感者幡慶頻數修學仍有此示現歟云々

○学文路　日村縁起多一軍屋敷あり
因縁あり家々もそもそも河根村
学文路村内なり
○物狂石　昔を思ひ物狂となり徘徊せし石
○慈尊院道　日村の内にて東西を通ず北より南へむかふ
○梅天神　日村にあり
○苅萱堂　日村にあり
縁起異本
昔、老人の普く志ある示の苅萱道心と云ふ
宇榮榮博多の宇護職加ふ
八幡大菩薩の霊夢ふよりて
手ふ持ち宝珠のごとき石堂川の邊あそ地蔵菩薩のれ
を縁ど飛苍落葉を出離の媒ともえざりしが仁平二年弥




玉屋
泥田坊

石動磨父重氏を尋ね登山するところ

生の来園生ふ酒宴の杯うら花の含み孟中ふ落つをつく
老少不定の理を明く刹の扇ふ

ゆらなく涙ふのわくをふ但果くあまねくうやと女ときくまし
と書置く夜ふまぎ城を出く都より黒谷慶空上
人のみりくふいう上人のくけ尊阿法師と名く生國箱崎の神れ郷告を学つて法然
上人う念佛三昧の奥義を授つを晝夜称名怠ら永
万元年の春上人のみもとを出く高野山ふ登つく陰家
を営こ此菴を世人朝夕弘法大師の禪窟ふ詣でく往生浄
土の素懐を行を法然上人う賜くつ弘法大師御筆
の十遍名号を本尊とつて念佛修行の功ふよぬるとさ昔
の妻千里の前繁氏の母う傳へ持つるふを懐中しく夫
繁氏の行へをも挙て播磨の國ふまもる明石の大山まで

出産ふつこ男子の弘名を与へて名ら堂九く名ら十四
紫のく母端ともふ父繁氏のもくへを尋ひて此里ふきくう
昔楽紫ふく玉田典義とつへる浪人の今ハ此里ふを住
典次とつへる者の家ふて病の床ふ卧し給ふ永万元年丙三
月廿四日の朝九齢と消去つつを建春妙尊大姉と戒名
を授て葬るとなむ其墳墓ハ播境内ふうつを石堂丸ハ
其翌年の娘れ比ふいうまで夜ら母の墓所ふ供給し
昼ハ父の行方を尋てう高野ふ登つく仁安元年の秋
る此山ふく父筆阿法師ふ尋ふ遠ひしう筆阿法師
ハ我父なりといふ弘ども父繁氏入道ふ成つうう出離
の要を説く曰らくびう二度そのくづれを結ひ給へんやさと尋ふ遠ろく
ふ定く名をも名のらまゝび父れの恩愛を慕ひ憤ら

遇孝養の志を運ばむとおぼし給ふ
浄土ふ往生〜蓮座を
まみへ是こそ真實の孝ふなるめと
等阿法師の弟子となり信生法師と号して西師偕とも
ふ会佛修行ありて〜登る此里ふ下りて母の墓ふ詣で
夜い高野ふ在〜観会の月をまもり師弟共ふ一カ三
禮ふ地蔵菩薩の尊像を刻みたてまつり今當寺の親子地
蔵菩薩なり

風ふらるゝや堂のけ〜れ

○大師硯水　重ね村の傍ふあり大師
きけゆと聞いまろうち
○河根村　谷間にて茶所の名ありと〜
親長記　文明十二年三月二十二日立高野宿坊終夜と云所、詠歌ス
わとともまついとけばちふきの風やかひてかをるさとのも

玉川舎

○産土神両社　日村の入口〜大智山日輪寺　別當　什物　菊之面　康治二年五月十五日高野御影ゑ〜今ふ及ぶ古き面ふあり両ヶいのうふ
○産物傘紙　日村にて製す傘ふも紙と〜り二十枚を一帖とす
○鹽竈古跡　日村の傍ふあり
○河根川　河根村の境を流る
○千石掘　河根川ふ架る長十八間幅二間深千石掘と云寛永年中掘り明る所を再造
秘名院右府記
三月三日ふ〜くぶりはをそ
ふりふりも掘ふくきろわふくきろ
艶桃嬌奪晩霞ふのくらう
さくらきよびつゞくおのく
○作水　西御の土村ふて民家數戸あり作水ふ二町ばかり辺櫻多し
○櫻茶屋　を乙眼ゑ

○ 寛延四年春

○ 平都婆未詳

○ 四ツ岩 或ハ蟻関ともいふ

岩四ツ〳〵連ぬる中ふもと四つの足跡

似たるもの一所あり、往来の人隻脚を彫ふみぐればあゆむ

かたち〳〵紀の足跡と踏むとらひおほせうまの通ふ馬道ありもの

戸部尚書宗

寂

静

摩崖あり文字難解なり又櫻樹多し

称名院右府記

おのく〳〵ゆびのようひ山を眺日も山中外大ぶ

そ〳〵今見ゆまでなだ谷いけとうとう生まえ

ほあるをも山たを谷いけとうとう生まえ

おるかをかもの谷ふ避雨の陵をすもの絶も

くもえんより云

咲花もえんくもつむ山路うふ　卓池

○ 不動搗 不動坂の谷川を挙を

是より山上までを不動

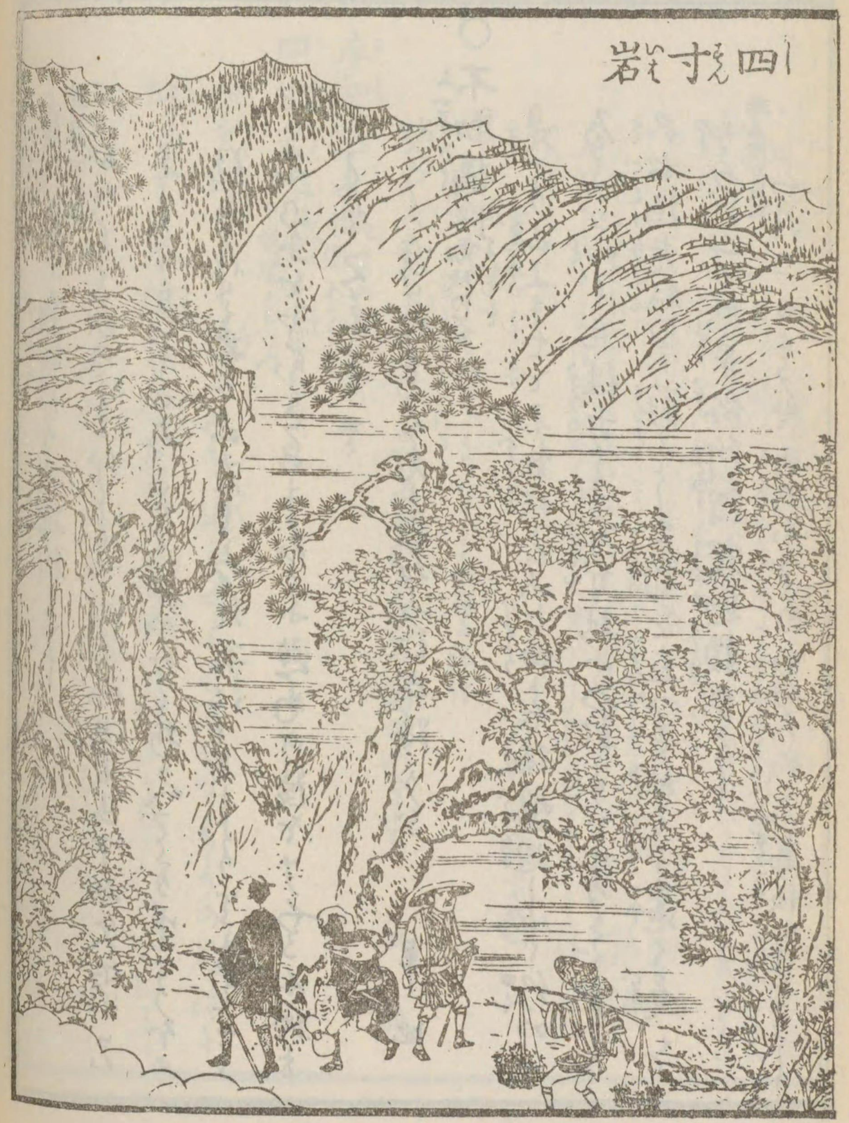
あるこのめ〳〵旦往古より今行基ふ入ぬ七曲とて路盤廻し〳〵約いる

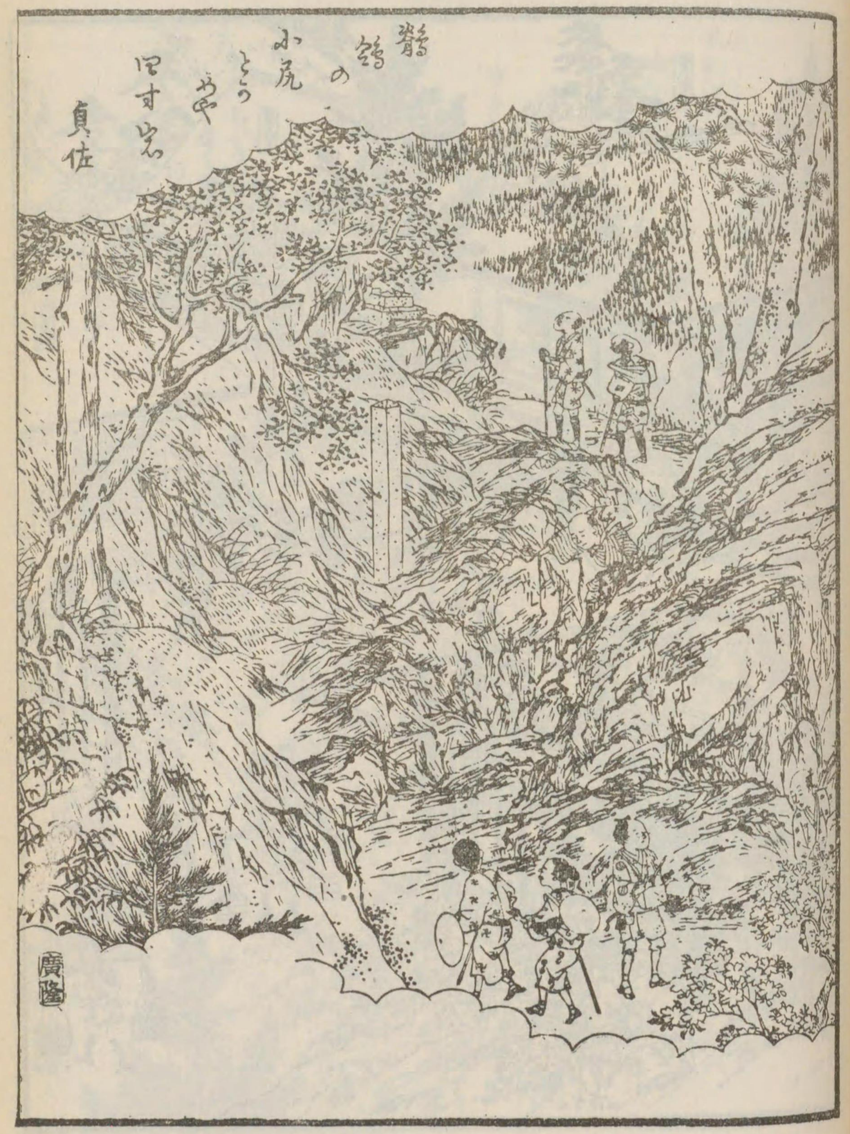
只古拍老杉のこ蔚〳〵として雖を立ざる地なく遠く望を

称名院右府記

二月二日ふ妙ふ

四寸岩（いすんいわ）





女人堂
不動堂

ふどうさかぐち
不動坂口
にょにんどう
女人堂
ゆるやうや
ゆるれわ
女人堂
境内

ようもさうくひあ
ろぐうぬ
不知牧そ山人の栄
山縋さくようおろ

○萬丈轉 外のふ動ようし下一所繩ゐり

此谷より谷間を窺ふ其深さいくくといふ事をしらず
雪中ふか人の径て
本草枝をさし交つ
おちつもれるそのうへ備ふとそ檻をまうくるも
萬丈轉と名ばかりくと山内くまで頼の杖を執へまじ手
をもちふ結分くに追放する所なりとそ益法衆の刑典害を
用ふるべからずんども罪人ふ於てそ遣責の急厳なるをえべし

○外の不動 堂中ふ安置ゐり多堂劍
金剛庄野寺家久
入道ら再建す

○岩不動 路傍の岩ふ不動の
大師の御形繪
なり
種子あり

○兒瀧 花折坂の下ふあり

むし一児の捨身せし所と傳へ一帯の清泉積翠萬疊の
中より流出ちふ至くま直下千尺珠砕け玉踊る天工言
語の及ぶ所ふあらず

○花折 女人堂より

參詣の諸客此所ふて花を折くま大師ふ捧るもいひ又そ
れでもてふさふざるなどそなどいふ也

○女人堂 諸国より參詣の女人を此堂ふ宿する所なり七口
各堂ありといへども當山の内院ふ女人を禁ずる事古詳論あり今男ふ陳ずるふ及ず
ずくこんどもいくう女児の為ふ一端と述む惟ふ大師豈婦女
を忌ざらんやを詰記ふて女いまを万姓の本氏族を廣め
家門を繼とのたまへどを是と親近する時を互ふ視

聽の慈ふ誘ふて貞良如法の弟子といへどと意外の
過なこと多くをつゞど故ふ是を親む出と雖ども諸悪の
根元嗷々の本なりと守ることも旦弘仁聖主の
勅ふも
男の尼寺ふ入を尼の僧院ふ赴くことを制〳〵人迷源と
塞ぐ慈根を断つ聖慮祖意の深さ所を察知す
寸〳〵若有信の女子一度登詣〳〵去の堂ふ宿〳〵通ふ
伽藍を拜禮〳〵合掌塵の微貨ふ抱〳〵次随分の功
徳を修せざる良縁ふ因〳〵忽長夜の迷室を出〳〵永く
一真の覺殿ふ入む事〳〵

手首　山女即花

白河七百首　野真子女即花

麓む千〳〵多地の秋のをく〳〵も女帝も嵯こえと咲

狂平の集

百今をその

師兼

融覺

唐衣橋洲

麥林

日南の猿れ女人を

妹よりなみさるえぞ女人を

桂子

原松

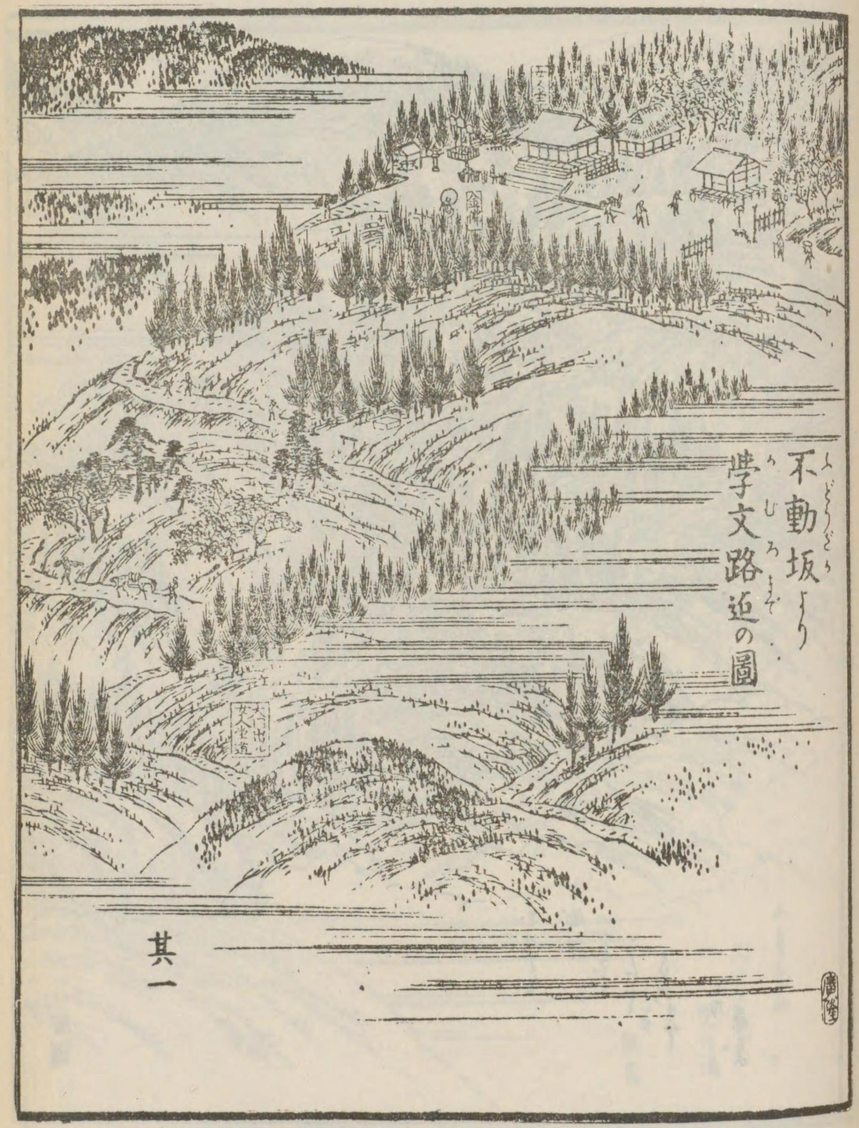
○不動堂（内の不動とも大師の製とも大格まで凡十町許是より南の方）

保延六年密嚴院覺鍐上人大師ふ擬して入定ら
ゝを大乘大師の德を奪ふ
鍐師を襲ふ鍐師飛出〳〵庭前の池ふ入と即ち本形
韋都婆となる大乘〳〵
〳〵全身變〳〵不動明王
ふ明王一躰あら〳〵權實
上〳〵擇む鍐師の變身血出
血迸と出づ因〳〵錐擇不動
根嶺山根る

（印刻のごとくあらずその不動仮と
ろ〳〵よろしく考）

藤原千廣

高野山 山をうしろみ岩が根の凝數みちとかく
くよみつゝゆみを茂まる 揃のまれ 間の 棚雲の
雲のうゆを 揃すまくぶみしつゝこの山の
林をうみ 今もうを雪う 詠まう 山の 揃をる
と時くふうかく 杜雪雪かくい風ぞはらともむ雪
なくび照日ぞけるむ照日ぞいよ 輝と風のむくあやふ
笠くくぐーくとそうくみくーかの吉野
り山。古おうを真正の少も瑞くし 寄植 ろうり
霍公鳥 初音 時ぐくなづくく 夢を夏草 ふぶと
いやしくをとみくなくなくやくまくくる山
事くふく春うくり 山山
○山人部屋 投宿の婦女を接待し或ハ不良奇怪の者を
追捕いるものを山人と号く 中巻ふくくに
○一心院谷



不動坂より
学文路近の圖

其一

其二

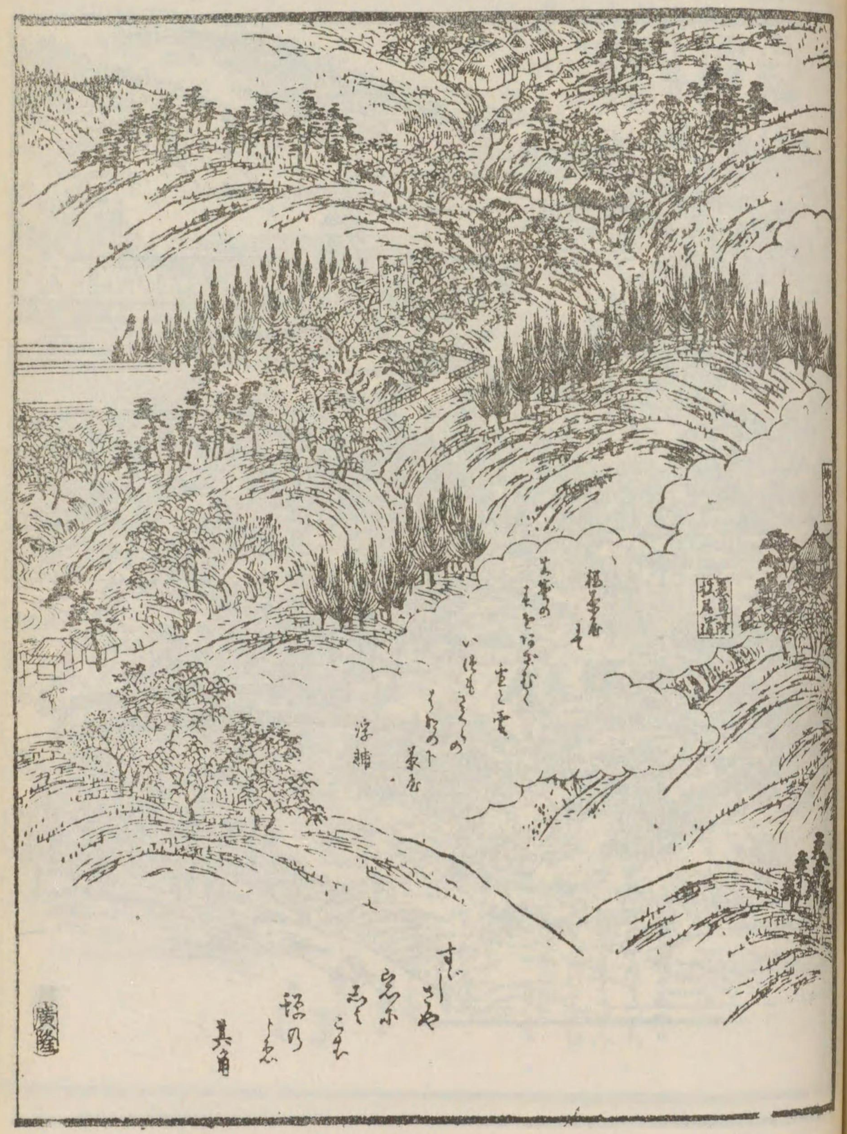
蒼折（そうせつ）
兒滝（ちごのたき）

其三

外の不動
万丈轉
不動橋

四寸岩
本都邊本

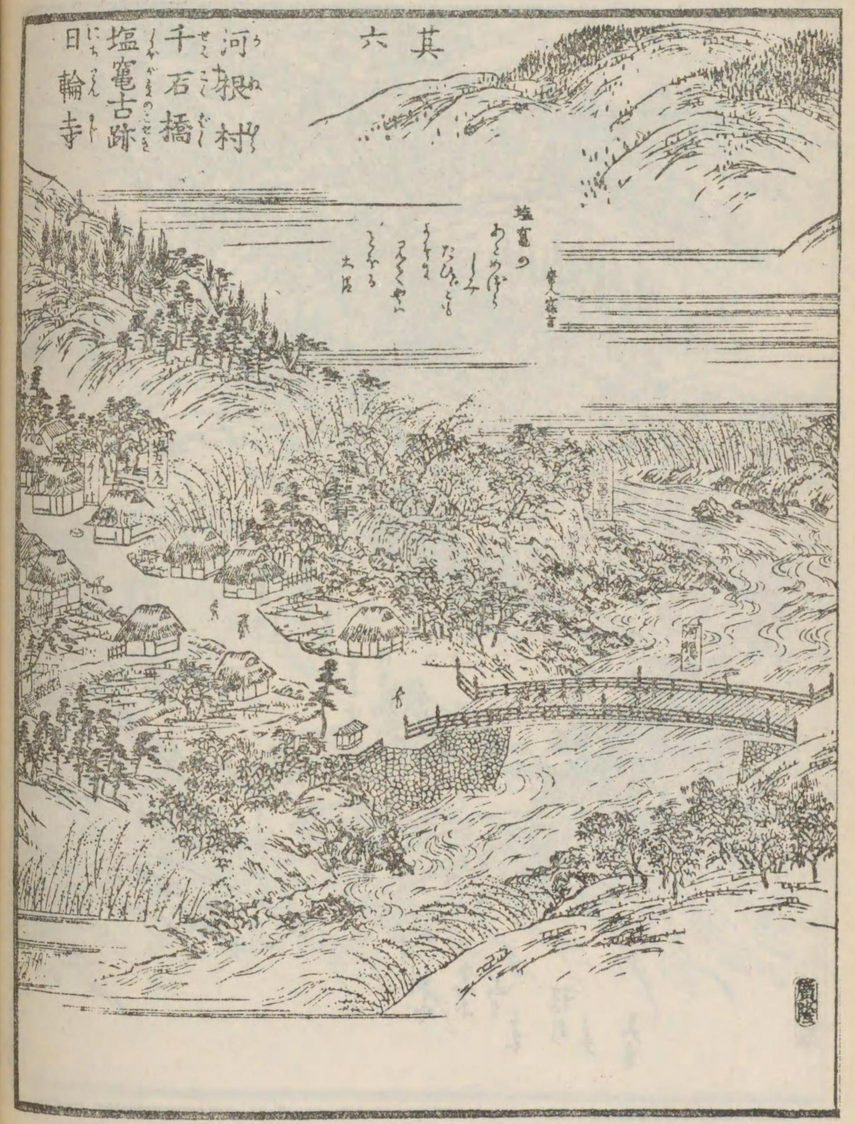
其四

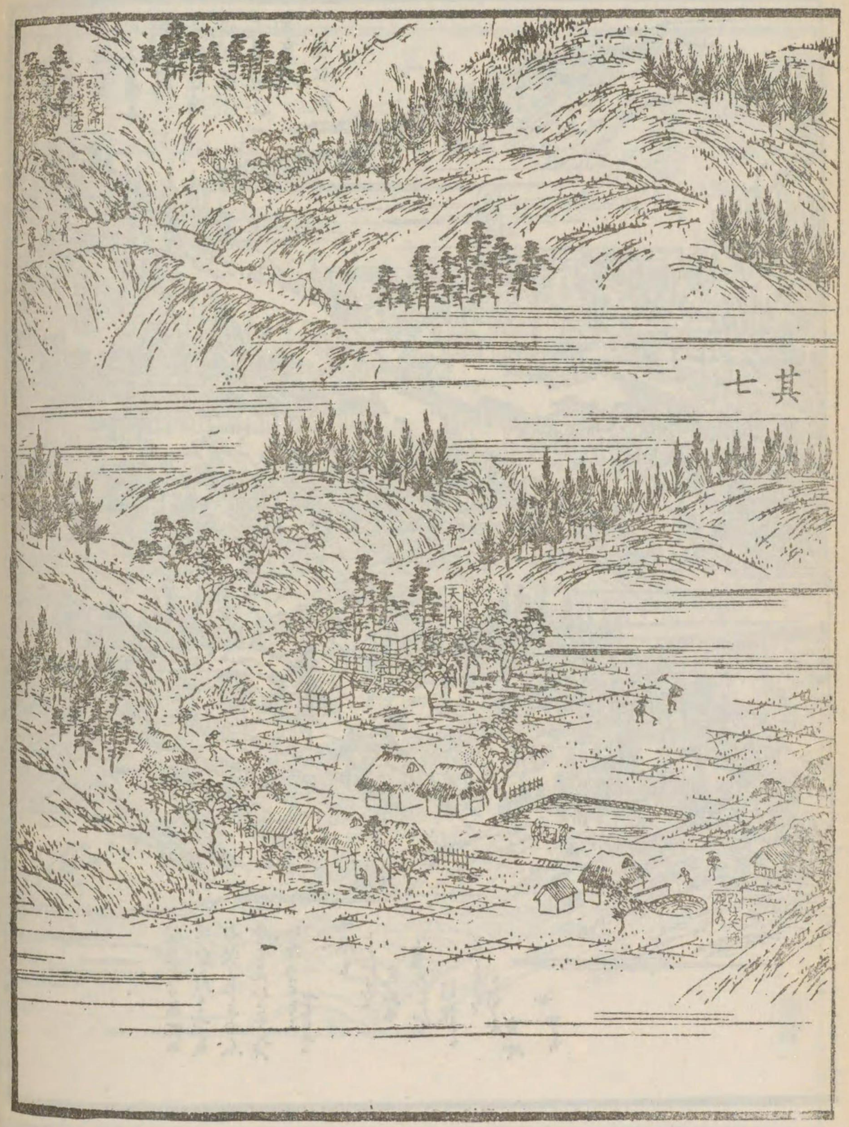


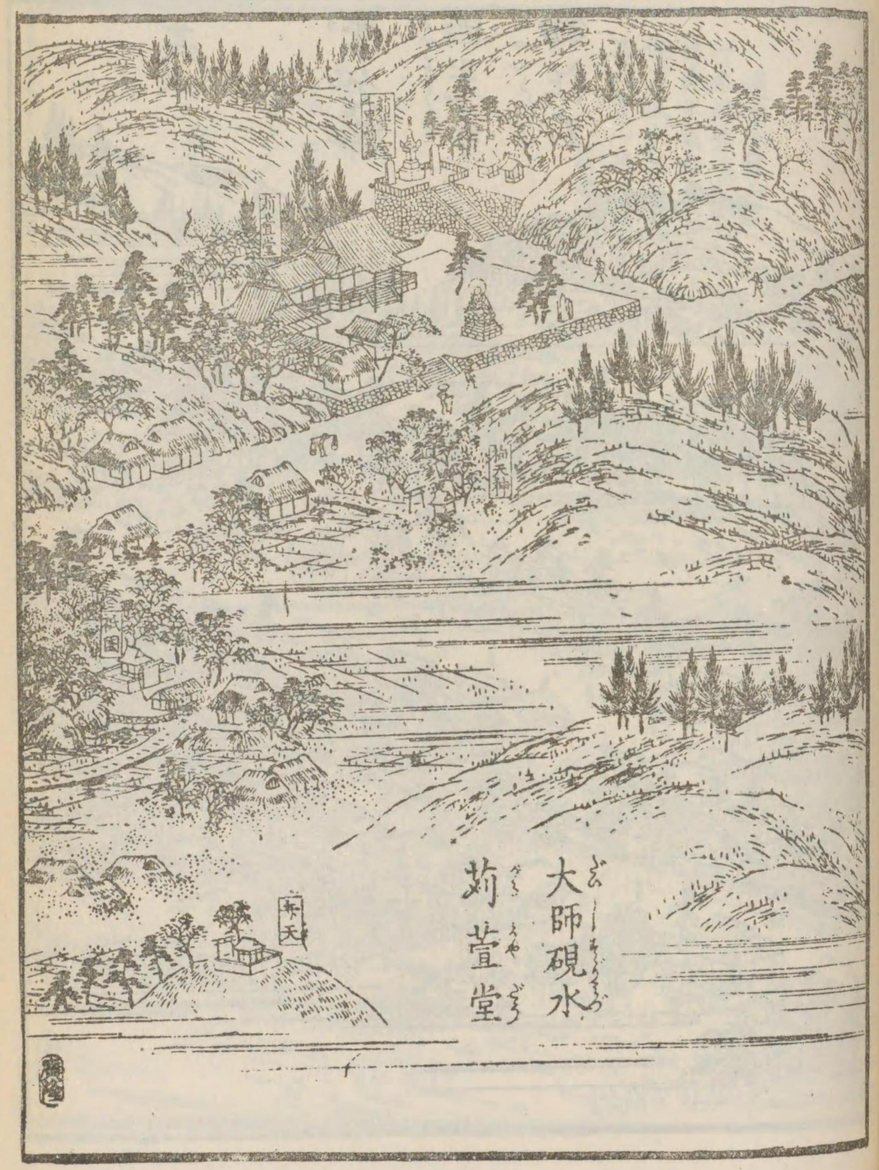
其五

其六

河根村　千石橋　塩竈古跡　日輪寺







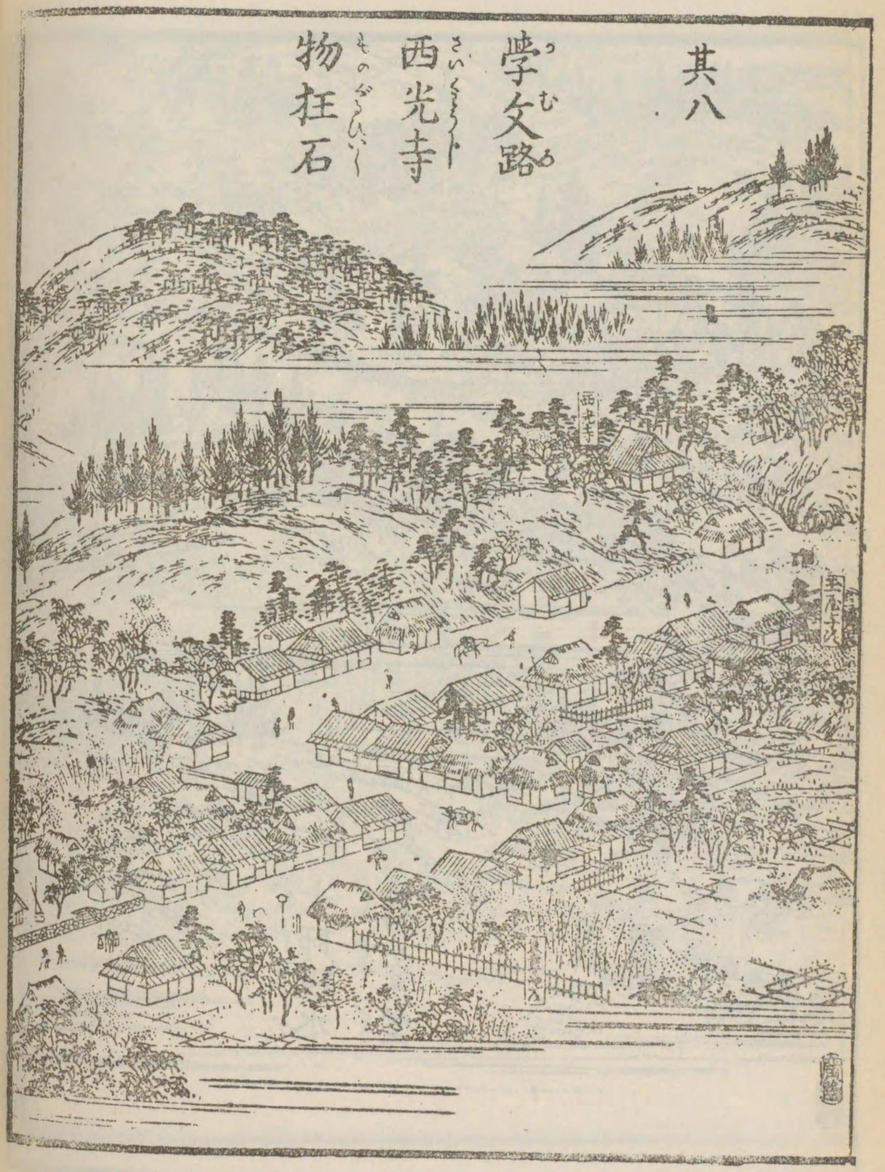
大師硯水
筠萱堂

其八

學文路

西光寺

物狂石



過學文路村

行路嶮嵯水危
筍輿不穩而肩羸
偃源恨未探春興
正是芳山花發時

海嶼

高野山のぞめといへる歌ふく

武里ふるめる長綱　脚長盆唐

さゝづる傘紙の名ふかす高野の山を歩行ぐ

時雨の都ぞ恋しき剛を苦荒雄もまじ

同ふもゝり粘る物うねをかくねを登人もつゝみぞ

のぶるとその粘もの刷毛尊ふと行めぐる眼をやる

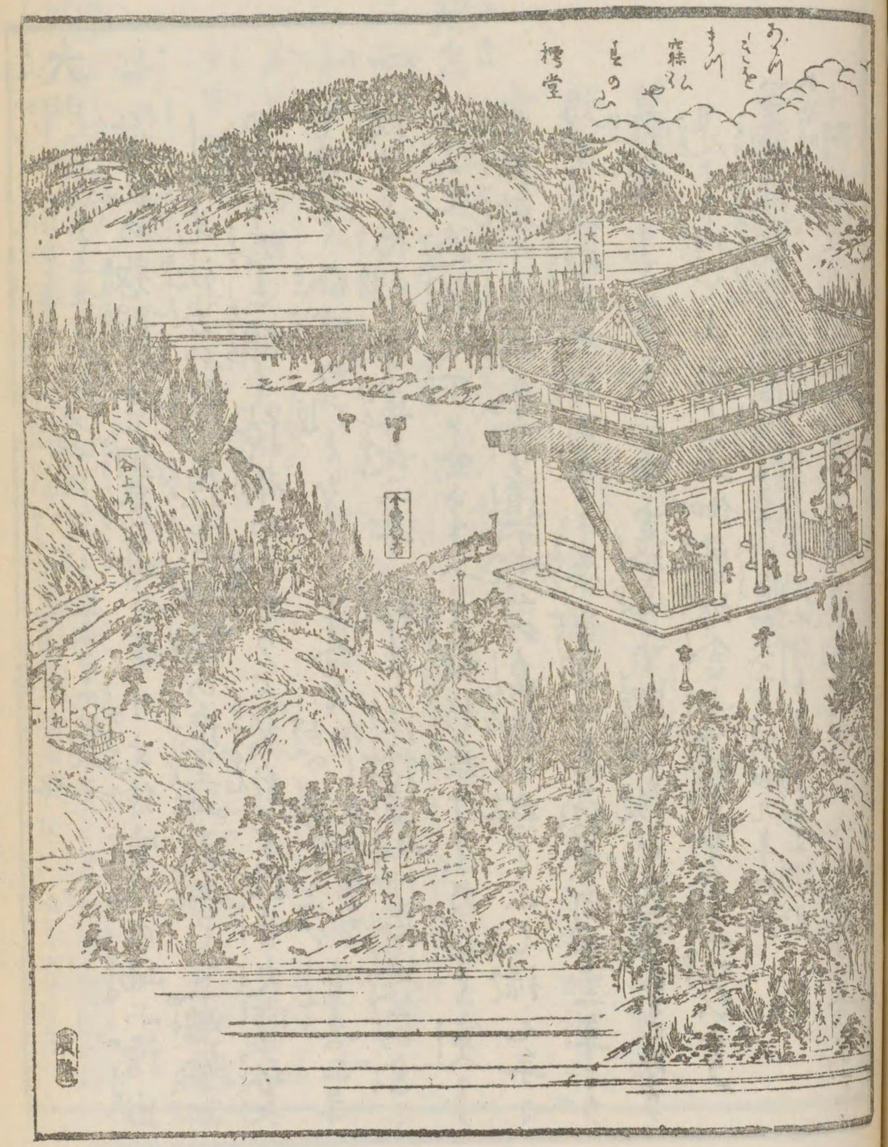
しく〳〵鬱の宝の八峯をうつ経を跡高く騰をつぶ行く

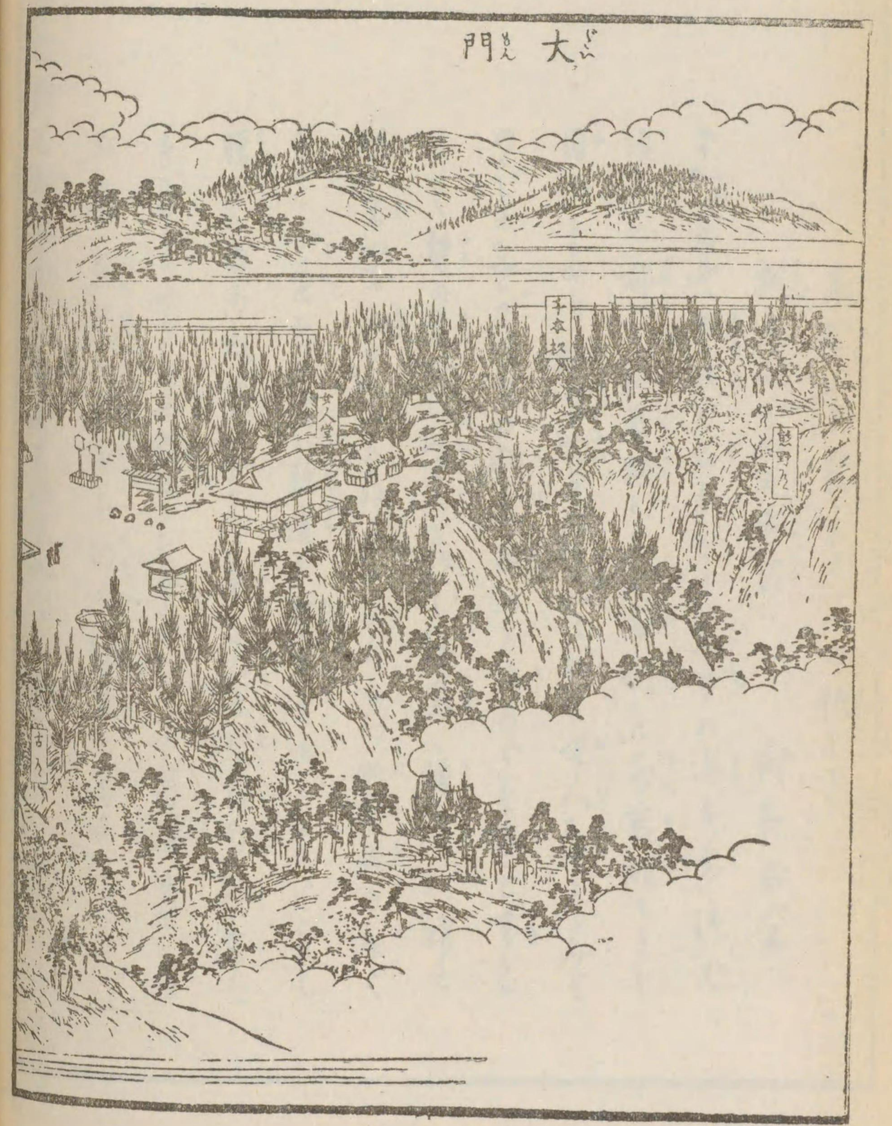
時まつる酒さゝめぬ急やもめうつ伏を渇の在く

らを谷をこゑ経ば弥遠ふ曾を。を物さやひこみし

腰さゝ事かぬうくなとうり尊を山も空編り物事を

もゞかしせり〳〵ふ寒くもをぬめり表光る玉屑ふ約く伽直をもゝ


大門
森もや
もの
御堂


大門

大門 西の方にそ建つ 大塔まで十五丁 ○金剛力士 運慶康意の作 寛永二年供養す

當山の惣門ふして銅甍高く丈餘雲外の岫小澗出
〳〵先法界の莊嚴を視て恭詣の振生此に至つて漸攀躋
の疲を忘る始〳〵結構の大なるを驚歎す往昔大師花表
を建〳〵西方の門と改めく樓門とす建長二年 古の門地の今の所 寛喜二年
〳〵て遍額を下さる 跋に三条殿 勅して法性寺殿下忠道公ふ書さ
九條殿下光明峯寺道家公の真翰を懸〳〵ふ元禄元年
〳〵う祝融氏の災あり〳〵悉く焦土せるを以〳〵同十三年
經始〳〵寶永二年に落慶す即今存せる所なり
是より内と山上とに分る
○銅像觀音 大門の傍 祝融氏の災に焼失 ○伽藍坊舎遺構もなく五双びよう
終南師遺稿 阿遮磴道幾盤回客子躋攀遠近衆二十八峰秀二十

千飛棟玉樓閣洞中龍臥雲烟黒〳中上仙遊氷雪堆欲照
蒼顏窺石鏡枕黎時復倚高臺

木村晴孝

翠壁丹崖自嶮巇攀來平坦最堪奇靈區宜與高野密
教儀然開大基二犬導祥芝叢日三鈷示瑞栴松時儻非
世帝歸依筠那得布金長若斯

地名

西院谷 板川 檀場奥院の外手院ある地 湯屋谷 平地にて溪澗あり〳〵その
小田原谷 西光院谷 屋谷 向壇 上の壇
南谷 照聞 實相院谷 谷上 本中院谷 湯 宝幢院谷 往生院谷 往生峯 西谷 北谷 蓮華谷
清淨心院谷 谷折谷 一心院谷 五之室 光臺院谷 千手院谷 六坊小路
内外八葉峰 大塔の四方四隅に遠〳〵る峯を内の八葉とし檀場奥院の外ふ擧ありて外の八葉とす其中ふ置ありて不二の

姑射山　摩尼山　楊柳山　轉軸山　小塔峯　金剛峰
山王峰　遍照峯　已上内の
虎峰　叡峰　小塔峰　神應峰　山王峰　今來峯　遍
照峰　業峰　已上外の
皇窩集
○禁女人　神山ありこの内へ八の女人を不入
堂の東に紀せり
○禁管絃　御廟高祖御記文管絃不應當山琵琶箏依背制可停止之而剩
鳳笙龍笛之聲動聞于壇上是則妨修學之魔障乱閑寂之蠹害也誡
寄事於鼓髮何不遠眞慈乎永可禁斷之事
○禁紅鞋　紅鞋を以て佛と會ず時宗のごとき
○禁博戯圍碁雙六等　すべて修行の
○禁畜諸禽獸　大例行事鈔云同二十年官符の中に當山八葉
峯の内の奥院の白狐ありて仏像の如く
○禁殺生　但狐の奥院の白狐ありて仏像の如く
○禁入牛　河内国より牛を引入れ山内を
○禁不淨　高野結界啓白文
沙門遍照金剛敬白十方諸佛兩部大曼荼羅海會衆五
類諸天及以國中天神地祇并此山中地水火風空諸鬼
等云々幸賴諸佛加持力幽明機熟之力以去延暦二十

三年入彼大唐奉請大悲胎蔵及金剛界會西部大曼荼羅法並一百餘部金剛乘平歸本朝云々一依金剛乘秘密教敎建立両部大曼荼羅仰願諸佛歡喜諸天擁護善神誓願證誠此度所有東西南北四維上下七里之中一切悪鬼神等皆出去我結界所有一切善神鬼等有利益者隨意而住

蓋狗種々の故事あること

今その大略を記す

山上諸の禽獣を畜ふ古えより厳禁なるを狗をもて鋼となす源

も因縁ありてそも〳〵大ろ上古 應神天皇の御宇或ハ崇神天皇の御

宇とも別ち辨あり紀伊國の黒犬一伴淡路國三原郡白犬一伴ふその

口代の田及犬飼人と添へて結守明神ふ寄附なまし〳〵

より明神の使隷と称し大師請来の律あり為防守故随意

養狗とそそうり弘仁七年孟夏の比鳳祖大師嶺外より径

歴し時大和國宇知郡にて一人の獵者ふ遇ふ小

狗青衣を着し身長八尺許にて骨逞しく弓箭を帯し

大小二つの黒犬を随送せり獵者大師と問答あり

當山ふ前道せしとす普く志ある所なり又建長三年明神

の御託宣記しと種々の表示ある事を載せり後世そも

織田古府當山を攻伐んとせし時黒白二犬彼陣中ふ走入

静治せしと今霊犬の助ふるとう山徒の軍威熾盛にして終ふ敵陣ふ変ありく山家

當山ふ擾三石あり上古の神祠の畔を遊履しく他處ふ行うず此外山上ふ多く當つて

但北狗ハ結束ふつる事をもむ若偶あるもあまだをく山

下ふ放ちしむ

山上十楽 明恵上人傳畧記ふ載を

聞法結縁如意楽　道路清浄廣大楽　沐浴身軀随意楽
上水下水自在楽　焼火不断常住楽　遠離俗家不知楽
女人結界不俗楽　官家不雑無畏楽　香華不退供艱楽
出家所住無上楽

時候

山上稍凹ふしてかの八葉の峰四方に周りて木立いと暗く生茂
りてさ霧濛朧しく満渡りて晴るゝとも曇るとも四のときさ定まれ
る事なしされど正月二月も冬にかはらず冴わたりやうやう三月の
末四月のはじめにいたりて梅櫻の類一時に咲そろひ真涼
きが中に櫻は土地に應じけりや吉野初瀬の色にかはらねど
極楽浄土の七重の寶樹眼のあたりなり、ゆく人の鉢に
花まで花をかくる此山うき世の春をのぞまで咲ける
人まさに山にはいれども外の春に後に咲花かげに袖くしぬ

さるかの五月の時を違へずなきしもかゝり蜘く五月雨晴
る様の雫にきらひつて黄泉路よりの言傳をなにかに似たり
これぞまや千鳥の落し文といへるものならし
行さき夜、初秋よりも待かるの高野の山は暁の夢
さる此山佛寶僧の三寶をとこそ訪べきなれにおいて郭公
しげやの民部卿為家や後の入内大臣実隆公の歌ならぞ三の
寶をよみならはしてかくなん土さへさける六月七月も是非なくいと寒く
麻衣を着る事なく老僧などは綿入の衣を重ねて着るも
ありタづけとも蚊の声なく絶て聞えず雪ならぬ明り月をも
もそぞろ身にしむ心地して甚安くして暑を避け
高より来り秋は風涼男も寒くなり八月ともなれば霜ふりさやかにて
谷の底の音は悲しく一夜宿る旅人もうき世の夢を覚え
しく暁の神を汲む山紅葉いと深くましく墨染の袖に又

ざれ雲八社の雫も澤をもる〳〵十月の濕も動もすれば道で
埋む十一月より後は常ふこと絶の山〳〵おのおの
やうろよつゝそうかゞきやうのものゝみなく〳〵さ殿子を着き
雪浴衣とらつゝものそらるゝ着〳〵師さらのわかみるかづき着
らる處女ゝと田舎人ゝそれ白玉鬼とらつゝく仙境物こゝ白〳〵と涌する博士も
ゐう飛鳥井栄雅卿へ
降雪のつもりまでいくそ重のふとん
ゝそ佳地を賞しまひかゝれ大雪なんどゐさ
冷そも破〳〵れと為さ〳〵ふ大伽藍銅包まこゝる
梵度をのく昔さゝう覚い日〳〵ふ熱湯を盛そ氷を砕さ
檜盞ゝ夜〳〵排油をさゝて陰内を熱〳〵と陽気を迎ふる祝
い大塔層樓ゝ積雪のゐ〳〵の願〳〵恰盤石の願ゝむ

うゝい玉室ゝ〳〵海上ものゝ綺せゝゝ隙〳〵の室ゝ
大なる炉と切を火鉢と仏ゝ〳〵畑を通ずる間を土室と称揩
を焚ゝを寒威を避ゝ〳〵そゝ〳〵ゝ大地衝よ開けて堂閣
厳〳〵寺門街ゝなゝ〳〵法の都ゝゐゞ〳〵造づゝ〳〵ふさ
中ゝを春いゝふ賑ゝ〳〵〳〵夏牧も統ゝ〳〵雪ゝ〳〵の
ゝ頃ゝやゝかゝ〳〵ふなゝ〳〵ゝまゝ〳〵の児童奴僕ゝを〳〵〳〵
暖ゝ氷豆腐ゝを裂ゝ〳〵佳侶の冬ごゝろの伽ゝと〳〵〳〵年月
ふゝ〳〵ゝ裂ゝ〳〵ゝ味ゝ〳〵ゝを〳〵擅撰ゝも〳〵ゝ
ぐゝ〳〵ゝ〳〵ゝ庭ゝ〳〵ゝふゝ〳〵ゝ〳〵ゝ精菜の
一種ゝゝゝ

春宮大夫藤原師房

高岸寺参隔ゝ俗裳攀躋一
蹈ゝ大権入ゝ定山ゝ月破無明
覚位謝ゝ花望ゝ心外ゝ縛身王者宦

續千載　寂蓮法師

新勅撰　參議成頼

續後撰　源具親朝臣

玉葉　俊成

新續古　僧正栄縁

拾遺愚草　後京極摂政

夫木抄北　中納言定家

千首　皈高院入輔

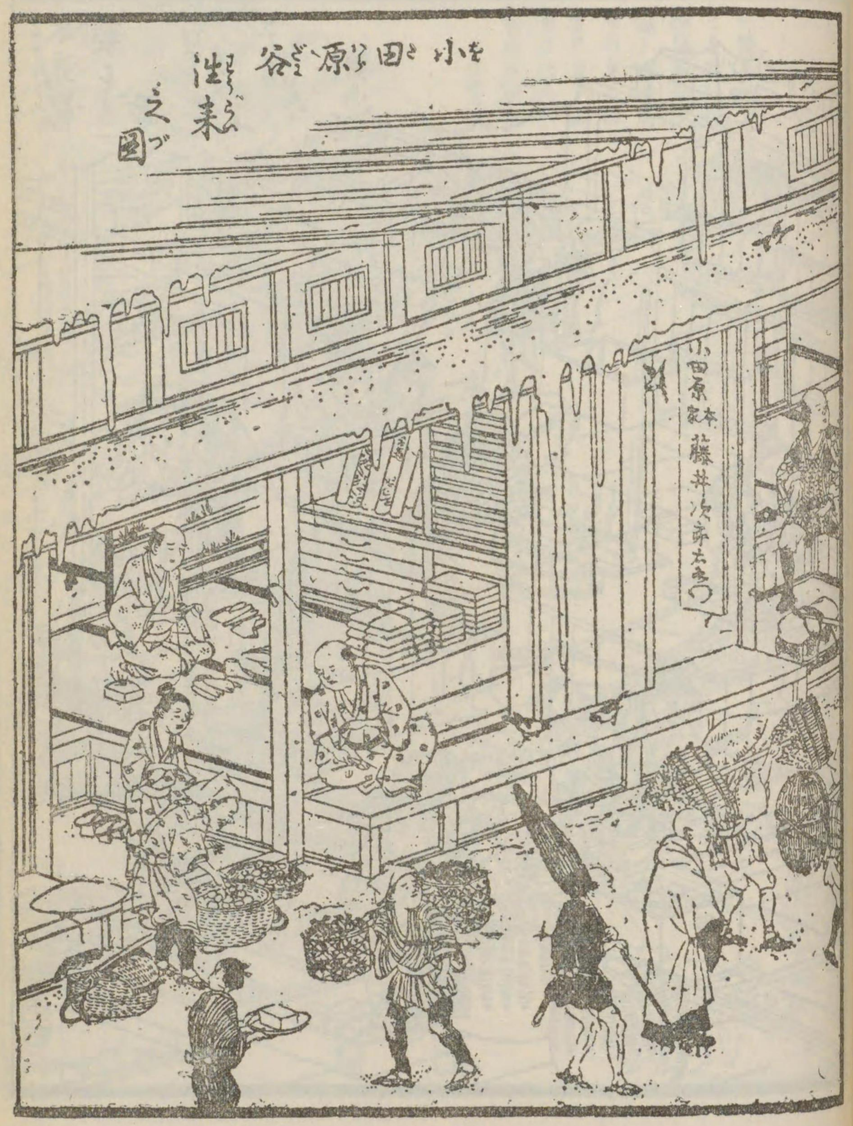
建仁元年八月十五夜歌合　古寺月　師茂

家集　草菴　守覚法親王

雪玉　頓阿法師

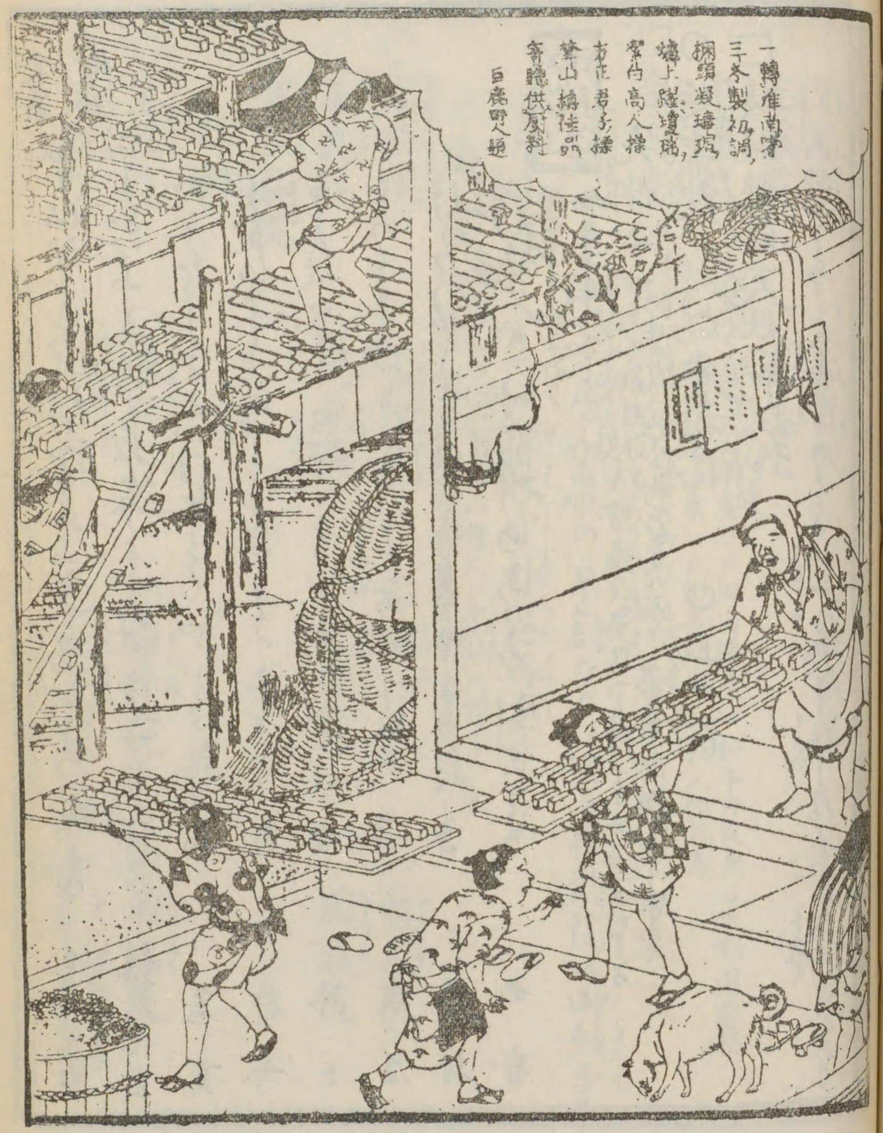
逍遥院内府

小田原家
本
藤井次右衛門
本家
小粒丸
ふち井


小田原谷
製薬之図
小田原家
本家
藤井次右衛門

氷豆腐製ゑる圖

對山



一轉作商業三才冬製初調桐箱凝塊瑰燒上躍壇蔵室内高人操市庄君子操禁山精法即等聽供厨料巨庵野人題

拍玉

もゝしきやふるき軒ばのやま桜　烏丸光廣

おもふこゝろもさそはれてとふ　後普賢院歸製

おもかげしさぐれや鞍馬山　鬼貫

うぐひすもうつりゆくらんせゝらぎの　許六

ふかれ笹原ときわたるこゑ　洛々

そのまゝさらりまつこと結のまつの月　宋屋

ほろ〳〵と山鳥やあれそむ　蕪村

妻や坐禅のうしろ向　也有

西院谷

○延壽院

○實相院

□桂河辨財天社　大師の御勅請と云

大門並ぶ不動坂　壇場　西あり

左側

大門並ぶ不動坂と云壇場及奥院へ登る街道ふかまる

谷ぞひのまゝ院ならく街道の北をなす

○三光院

○觀音院

○宝嚴院

○千等院

□來迎堂　又平等心院とも云大師の西三丁ばかりあり今廢す

保延四年平等房永嚴の草創なり後宣秋門院の御願寺靜遍再興すと云

又まゝ後禪林寺

○庵室　山役人の飛脚の詰所境を守護す谷くの奥ふかき竈室あり

○光勝院

○善集院

○智莊嚴院

右側

○宝幢院

○宝珠院

○城就院

○源龍院

○戸田因幡侯○松平丹波侯○牧野備前侯

○戸田長門侯○秋元但馬侯

○奥城院　○不動院

○常安院

○清光院

○瑞相院

○大覺院

○龍花院

○圓藏院

○禪那院

○西南院

○圓福院

○遍照心院

○西方院

檀契　中川修理太夫侯　吉木美濃侯

○五智院　○西禪院
○愛染院　○吉祥院
○如意輪寺　檀契　足利家
○正覺院　檀契　土州侯　西尾侯
○密門院　○大光院
○善福院　○智性院
○修學院　○蓮明院
○無量光院　○花藏院
○影現院　○蓮上院
○聖善院　○大聖院
西院谷古側奥
□太湯屋　湯屋谷
古ゝ大門の傍ふるゝ光德の忌日ふく大衆及諸人ゝゝ沐浴

○彌勒院　○金照院
○梅雲院　○淨生院
○報恩院
○源光院　○阿弥陀院
○宝藏院　○增長院
○地藏院　○正塔院
○功德聚院　○宝龍院
○清集院　○阿舍院
○櫻池院　檀契　喜連川家
○自性院

せゝし人ゝゝ此事ゝ屢ゝ見ゆ

□辨財天祠　湯屋の谷奥ふ
ありゝゝ

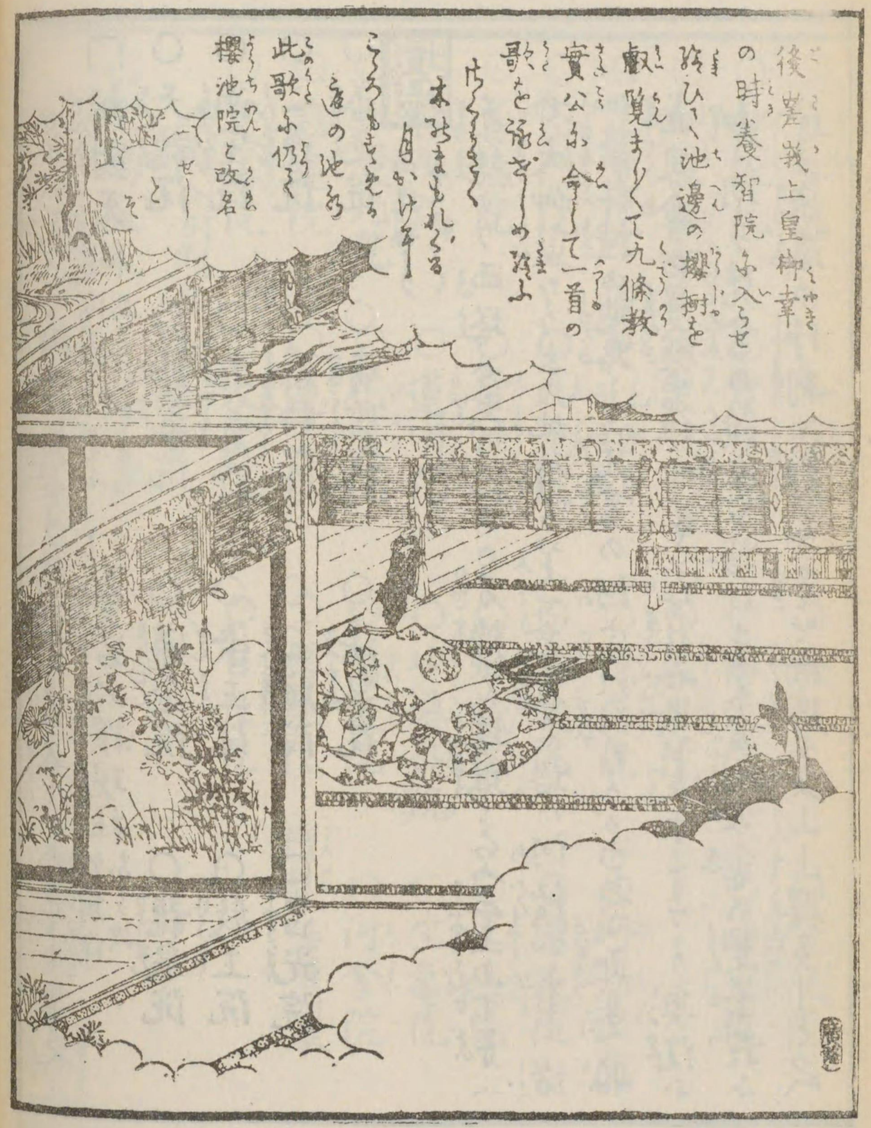
○天龍院　○延壽院
○南室院　○九品院
○心蓮院　○殊勝院
○善光院　○青雲院
西院谷ゝ

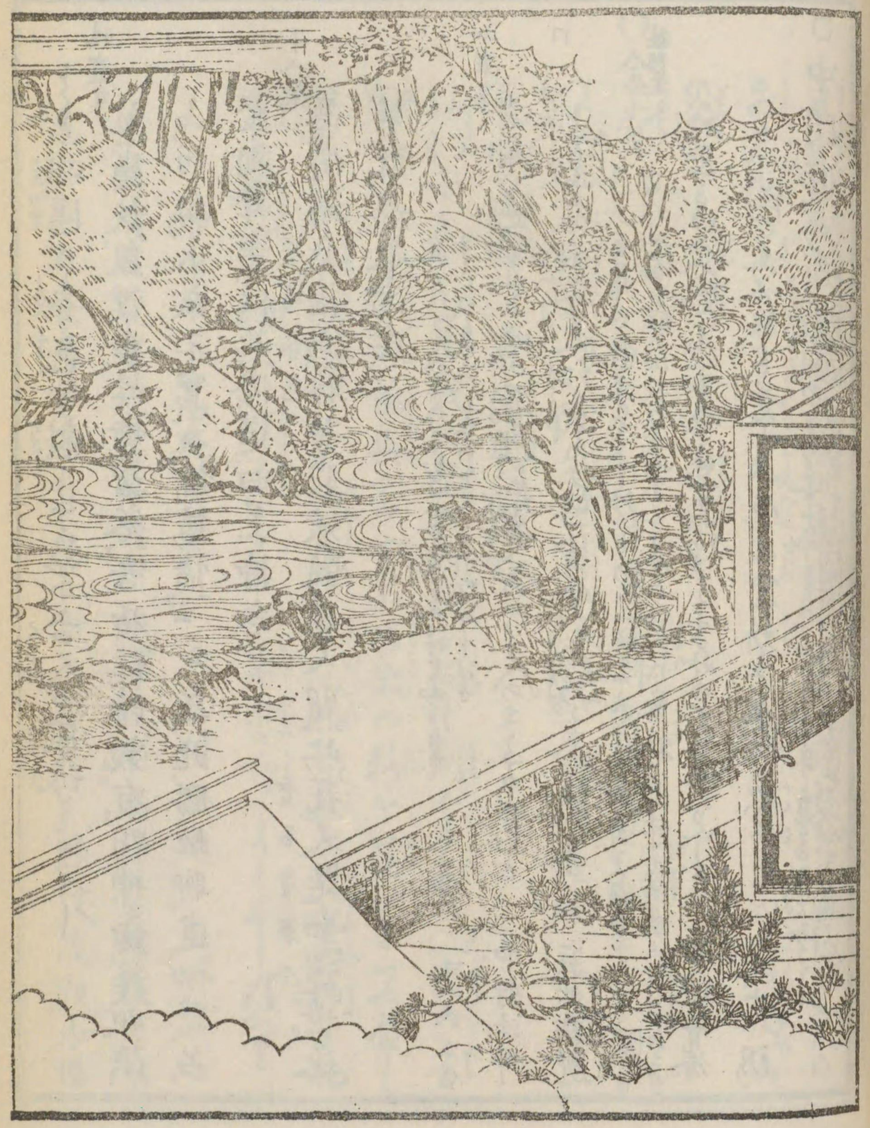
壇場

東塔ゝ西塔ふ至る二町の
の大伽藍なる去の地峰を
伽藍拜禮の巡路ゝ梵書の
莟曼荼羅ゝゝ
ゝゝ密嚴の淨刹ゝ顯ゝ

□愛宕大權現社　仲創祥

○蓮金院　○龍泉院
○梁王院　○教王院
○三藏院　○昌光院
○法泉院


後嵯峨上皇御幸
の時養智院ふ入らせ
給ひて池邊の櫻樹を
御覧まして九條教
實公ふ命じて一首の
歌を献ぜしめ給ふ
ながらへもせぬ
身ながらも
こゝろもとまる
今日の哉
此歌ふ仍て
櫻池院と改名
せしとぞ



性靈集　道場の春色を魁よす故ふ古人の風流もまた

葱嶺挾銀漢白峰衝碧落吾居往時頻有明神衛護即限山四至永獻三寶表仰信情云云託此勝地聊建伽藍名金剛峰寺住此修道四上持念

十八景　高樹滿庭花滿眸芳菲妖豔道人留此花又是如逢世永

雲石堂宋本

日既無歌酒遊

山家集　みな瀬にうき世の業も忘れ水

西行法師

ゐ　ともふえし岩のかきねのうもれ水

寂然法師

競門集　我ふるさとをそこひしみよせぶらひ

前大僧正覺濟

○中門　もものうち多門持國の二天ども安置せらるる處なり阿吽の仁王像の作法等は後の作にて淺劣なれども今は再造せず

士朗

東寺の長者實惠大德の再建にして一町ふるく旧の金堂の前にお石階の上ふあり永治元年更ふ改めて壇下ふ建つるなり

○金堂　古の卑頗堂なり元文元年の再建なり

本尊藥師如來　夫六坐像　脇侍の日光月光菩薩

阿閦如來　不動明王　降三世明王　長各七尺五寸

金剛夜叉　金剛薩埵　金剛王菩薩　普賢延命　虛空藏　長各八尺

弘仁十年　嵯峨天皇の御願ふ因りて創ふる處の二重の塔

閻中そそ造立の輪奐ふうつ實ふ巧徹の粧を究むとも

ひまい都卒内院の四十九重の摩尼殿を表じ法宇明神の祀宣ふ都卒の淨土ふ往生する者の集會所なるとふ

佛生日上高野金堂

川合衡

十里清風鈴鐸流　章臨金刹俯神丘　半池綠畳蟠龍窟五色雲圍孔雀樓　靈鳥呼名來樹上　寶花供佛發溪頭　小僧

結夏頭如雪閑轉法輪白日悠

○大塔 高さ十六丈 畢方の災 今の塔 旧観に復す

大和寺戸門土たすき奉行して 中尊 胎蔵界大日如来 金剛界四
同十九年ふ落成をも弘なり 佛 阿閦 宝生 弥陀 釈迦

本朝多宝塔の最初にして根本大塔と称す 荒城天皇
の御願ふ依て弘仁十年大師建立し給ふ 爰なり此塔を
建むるに一の宝釵を掘得たり長さ五尺餘り一寸八分絵ふ釈迦如来統法地迦葉佛成
道處と紀せり 軈て金泥の筒ふ納めて本のごく
埋むもとゝのひ大塔を立ふ造建し終ん抑も十六
丈を盖南天の練塔ふ擬を一層の画巻も筆のほふ
捧ぐ九輪の金葉も雲のまふ聳ふ

太平記元徳元年元弘元年の条ふ云

隙ぞのはら 醍醐皇のおろふ 卿相雲客 法華八講 一切経 紙筆墨 入道大臣 胎蔵界七百像 金剛界百七十尊 拝ぐ 九輪の金葉 雲のまふ聳ふ

やゝ進らせ 御山 愛染 なる 宝冠 大塔 拝ぐ 九輪の金葉 雲のまふ聳ふ

拝大塔

南天經緯至今殘 禪座本涼尊像壇 百丈浮圖凌碧空 老一休和尚

身眼錯作雲端

○灌頂堂 又灌頂院 今の堂い本尊両界曼荼羅

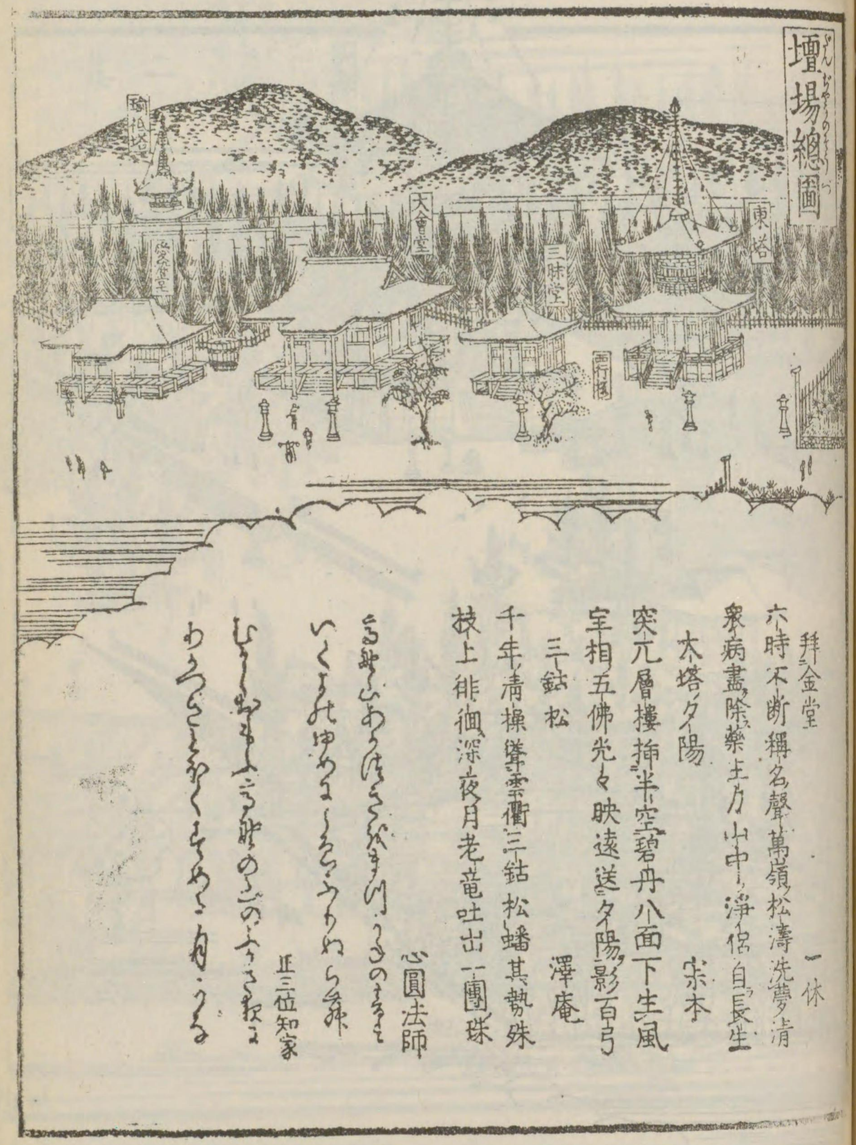
宝暦年間ふ建つ所 応徳三年大師室性信親王の御願ふ因つ観音院寛意

監獲〻〻艸創一同年九月廿七日初〻結縁灌頂を修行を

續門葉集　潅頂とげ〻のちふ非昌地難得遇此教難やとつる大師の
かしふ筆うるふことまてきとくをくむ　法印隆勝
後頂の後朝
かくまあらそそ深きるまやとる死治をうまや　法印道恵

○御影堂

此堂ハ大師御在世の時實恵大徳建立〻大師性時持念〻
給ふの道場なり故ふ今も通堂とも云ふ但尊影ハ真如親王
の御筆みと即大師自眼睛を点〻なまし是を納め奉る
四ふ御影堂とくをふいふ御入定御座の寝床方六尺許
并ふ清蔭今ふ是あり且内陣の曼荼羅ハ青竜寺御相
兼外陣ハ紫金臺寺御室の御筆東側ハ燈ハ行親上〻
をと忠ど西側の燈ハ赤も白河帝の御手自挑げ給ふ



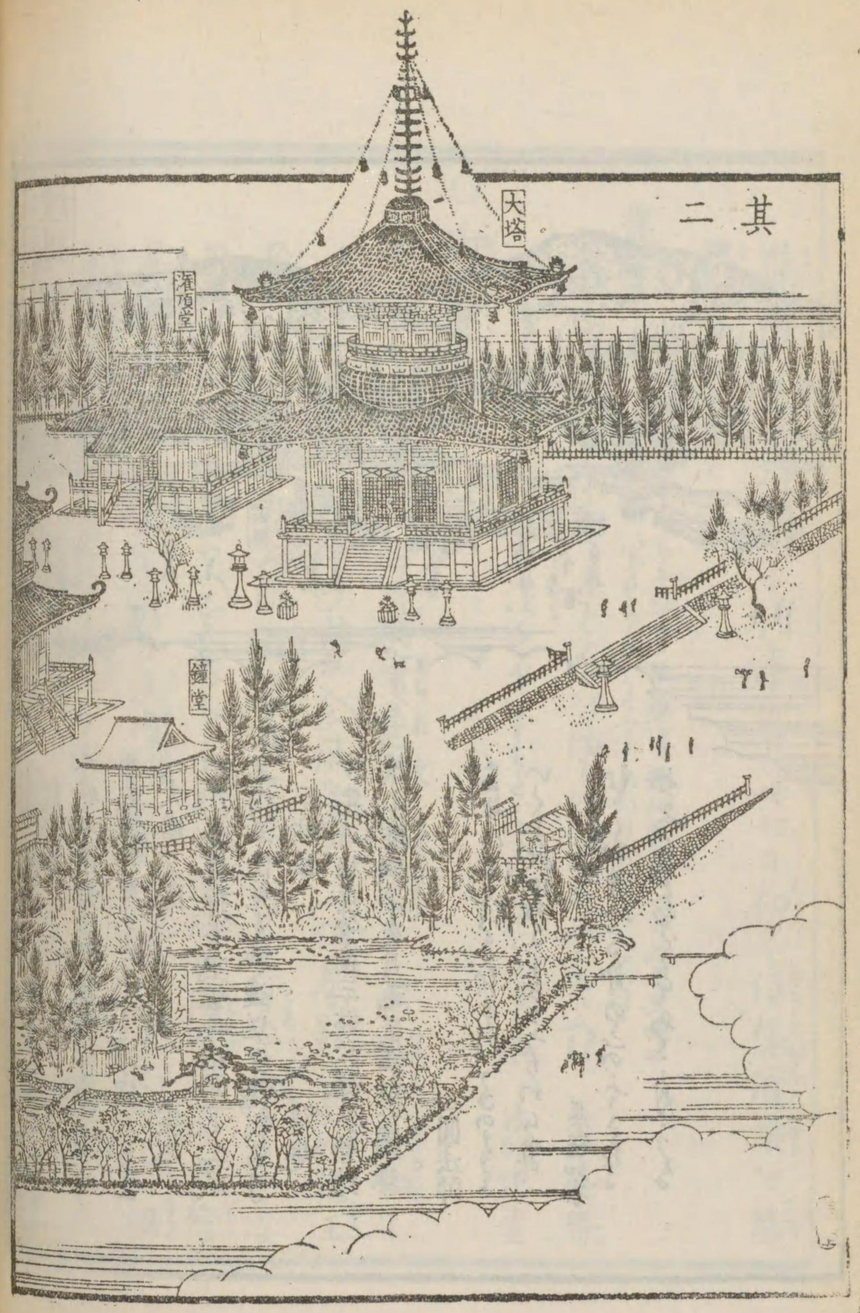
拝金堂　一休
六時不断稱名聲萬嶺松濤洗夢清
衆病盡除榮土方山中淨侶自長生

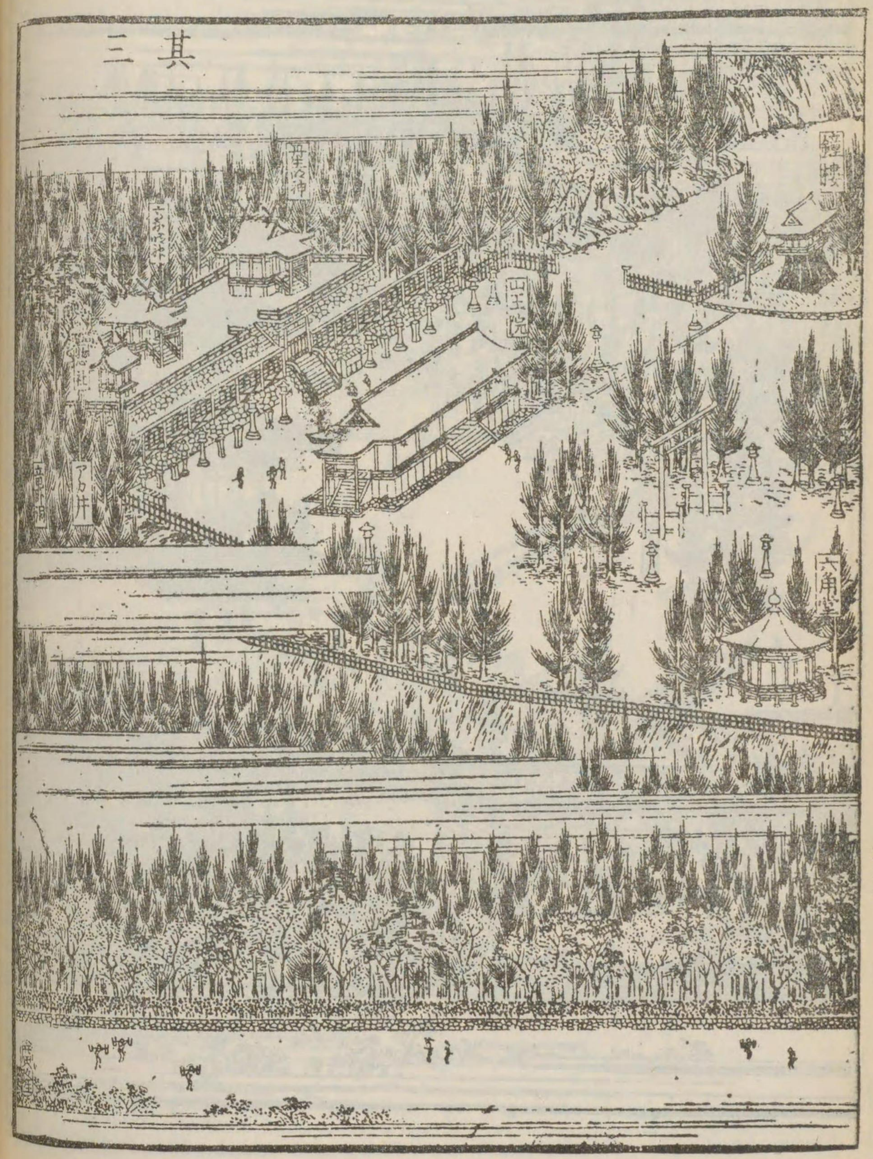
木塔夕陽　宋本
突兀層攄挿半空碧丹八面下生風
宇相五佛光々映遠送夕陽影百弓

三鈷松　澤庵
千年清操聳雲衢三鈷松蟠其勢殊
枝上徘徊深夜月老竜吐出一團珠

心圓法師
正三位知家
いくよれやるこうらめら弥
むしもいもとこのこのようにおく
わうこそそくそそ有うる

其二





所なり堂後の宝庫みな
及び入唐御請来の密奥
宣御教書大臣以下諸名
なり

左辨官下ス　金剛峯寺ニ

應早ク致ス訴請ヲ消ス盗失ノ呪舌兵革難ノ
右得ル彼寺所司等去ル四月十五日解状偁言上ス未ダ傳法
院鐘并ニ佛及ビ大塔西堂諸堂御佛等皆悉ク生ス汗今月十四
日巳時傳法院鐘生ス汗肉ノ如シ奉ル閉ヂ見ル同院御佛又以テ生ス汗
相次テ大塔西塔并ニ諸佛等次第ニ瞻作之處同以テ生ス汗ヲ給ハ者
令ム陰陽寮占ヒ申ス之處理運之上慥ニ所ニ非ズ有ニ盗失ノ事ヲ況ヤ
方ニ奏ス舌兵革ノ事ヲ敢テ
明年二月節中並ニ甲乙ノ日也　五云

保元二年五月廿五日　　大史小槻宿祢

少辨源朝臣

院ノ廳

請識誦事

三十定衆僧申布施三結

右忽於高野御山始修両部大法事令四海安穏（ヲラ）誼（ヒ）満ツ

仙院御願白毫院九重之鐘鑄両足之鶯玉像誦経

成就并初乃至法東利益不限仍請識誦如件敬白

壽永二年九月二日　正二位行權中納言民部卿藤原成範奉

下文不全

熊野より御使

勝雲僧正

六月卅日

此文書別筆法橋か自筆ありて御判の如く四編ともに

敬白　奉願事

右今度入洛無相違者當山奮領事可有
其沙汰仍状如件

元弘三年五月十五日

山僧傳云尊邦八大塔宮護良親王之尊邦云奉云護良之事也載之旦諸皇子之名乍出之護良之單名と載之旦元弘三年閏二月親王吉野と出云高野と入云形狀相似之旦元弘三年閏二月親王吉野と出云高野と入云ふ比尊邦と名のるや花押籤疏之事と記之ふ今全文を載する序ふ再記す

新院敕有入御堂山之処衆徒依レ文申無其儀之由注進之条殊以神妙向後於御方致忠節有術

禱之精誠者殊可令感應矣隆堂山狀如件

建武四年正月四日　尊氏判

高野山衆徒中

敬白　五願事

一天野社就華跡本地可奉甚深法樂事

一行幸高野山可興密宗事

一為當山佛法紹隆興寺領可寄田地事

右條々天下靜謐之時可果遂之狀如件

延元々年十二月九日　天子尊治敬白

此宸簡小さき紙小吉野御幸居よりの御願文とこめう天子の二字宸簡ふその例あるうを実ぎ此年尊氏光明帝を立て後醍醐天皇を私よ廃帝と称す此時ふあるうて世人あるひい此帝の天皇ざるうとろぐるのあり敬よ此二字を書させあぐさかるべし

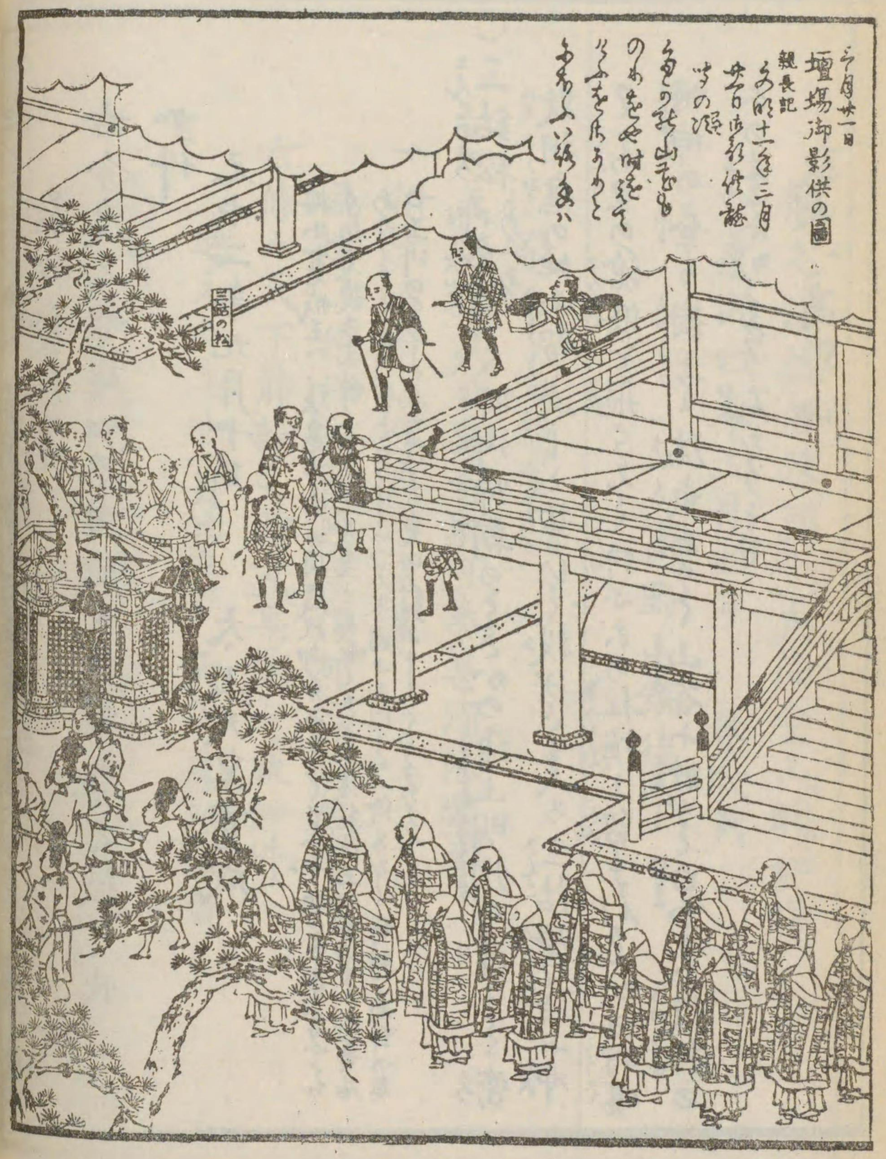
敬白　發願事

右今度之雌雄如思者殊可致報賽之誠之狀如件

元中二年九月十日　太上天皇寛成

○三鈷松　御影堂の大師御歸朝のときかの唐土明州の津より密教相應の地ふ留ん〻と擲ち給ひしに飛こえて三鈷ふ落ふ給ひしふ依ふ其里の滄波を飛こえて明神の昏る樹上ふ瑞氣あるく此の松梢ふ留まるをかの狩場山谷ふ映ぞと曰つるく彼杵の

敬奉　高野山



三位の局

二月廿一日
壇場御影供の圖
親長記
その時十二座三月
廿日御影供
半の頃
角の鉢山
のあをを時
ふさふ
もろこし

六七四

六七五

大師遺庄金銅三古一枚

右大師御入唐之時於彼國向吾朝誓約而投呪持三鈷則届當山留松上所謂示佛法可流布之勝地而已貴重也掲焉也小僧以去貞永元年壬辰十月十四日傳得件三鈷昔雖容身於北嶺今還結縁於南山誠是非小之徃縁欤大師云我在天竺号勝鬘夫人於陳朝稱慧思禅師来日本名上宮太子云云思禅師者天台高祖也我等定有因縁欤每憶前世値遇悲喜共催光涙耳今相傳大師遺宝以来今年廿二箇年今生感應頗為足身頻嬰老病志只在来縁仍伴三鈷一枚謹所奉返納本山也庶幾旦為全佛子之勝縁旦為重大師之法物永奉納御影堂之後縦雖有權門勢家之厳命堅慎堅誡勿取出堂外若有背此旨人者奉始大師聖靈二所明神至于山上山下讃法天等冥加冥罰於其身也仍湛空勒状敬白

建長五年癸丑七月五日

金剛佛子湛空
奉送使者
上額
信覚

東福寺虎関

劔落大滝峯。抔懸高野松。早夫霖雨足。旅外有眞龍

太徳寺一休

牛因已熟至都率。手裏金剛飛放光。瑞氣尚殘野山寺。一株松籟響扶桑。

終南師遺稿

遥抛法器試霊蹤。三鈷高懸尚有松。已聽溪泉鳴玉韻。還瞻天女現山容。燈燃萬盞長時煥。夜雨千花不斷濃。自法身帰寂定。龍華勝會願相逢。

十八景　三股怪松　雲石堂宋本

一株松茂影堂前。昔日飛來金幷懸。仰見繞嘆人拜參清

風蕭瑟暮雲天

風雅　そよや此のりもこゝに松ふめりとそ

此日本種をなく法皇御製ありしかど
名僧などもうくく造作のあまりにとかくいふ
事ありとそ千悟一休などもこゝろ得の事
ありとそ

雪玉　なりもそまつ哉やちくらんをもせうとそもつくへのまつ

讃岐集　内倉実隆公

○　契　沖

鐘樓　也俗云卯と

此撞字ニ九千九百八十一斤廿一両一ふ白湯一千九百六十一両二
ふくを練る事なり性霊集ようふ泉い大師の鑄造ーなる
ふ所なりを大永元年の火ニ焼亡せり惜ものへ今なり云
天文十六年小鍛造ナ絡よ高野山金剛峯寺奉願満寺衆
僧各敬白とあり

性霊集　金剛峯寺鐘智識文　鑄造鐘事

夫揵槌一打三千之衆雲集霜鐘三振四生之苦氷銷故
能闢尼兒刀輪獄率休籤湯長眠聞之而驚覺永夜因之
忽曉八部所以駢填三尊所以輻湊般若之標道場之主
只在鳴鐘平然今金剛峯寺堂舎幽寂尊容滿堂禪客溢
房鴻鐘未造今思奉爲四恩鑄造七尺銅鐘雖然道人清
冬有志無力伏乞有緣道俗各洞塵相濟斯願生々吐如
來之梵響世々脫衆生之苦聲今不任至願謹奉勸

雲石堂宋本

後夜緩鐘

十八景　華鐘高架法場中制是梵風聲日東百八緩撞深夜月三
庭曉遠宋參空

新十　頭もくあけのと字ぞする歌
　　の声ちあけのと字ぞする歌

拍王　古寺鐘

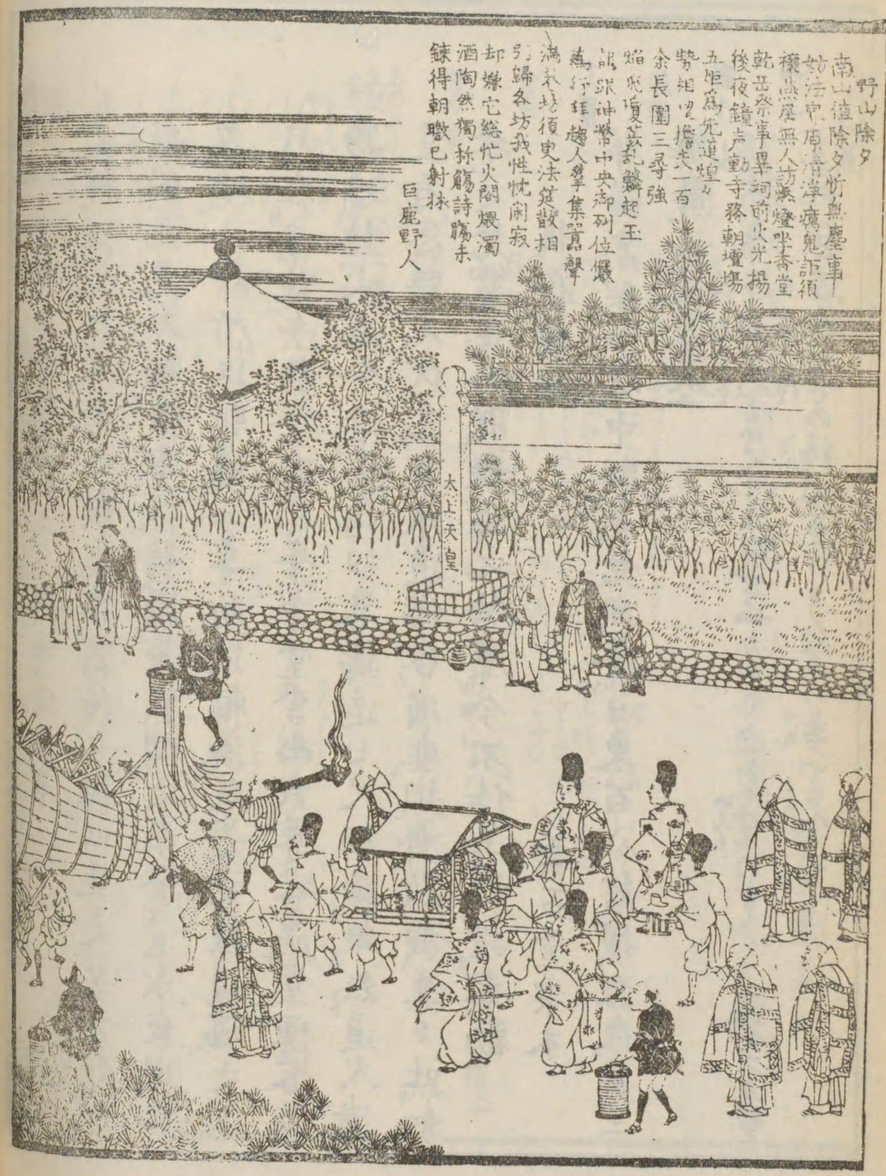
多聞山をあつまの鐘ぬるりうの哭のこ　忠岑卿宗尊親王

拍王　多聞山をあつまの鐘ぬるりうの哭のこ　忠岑卿宗尊親王

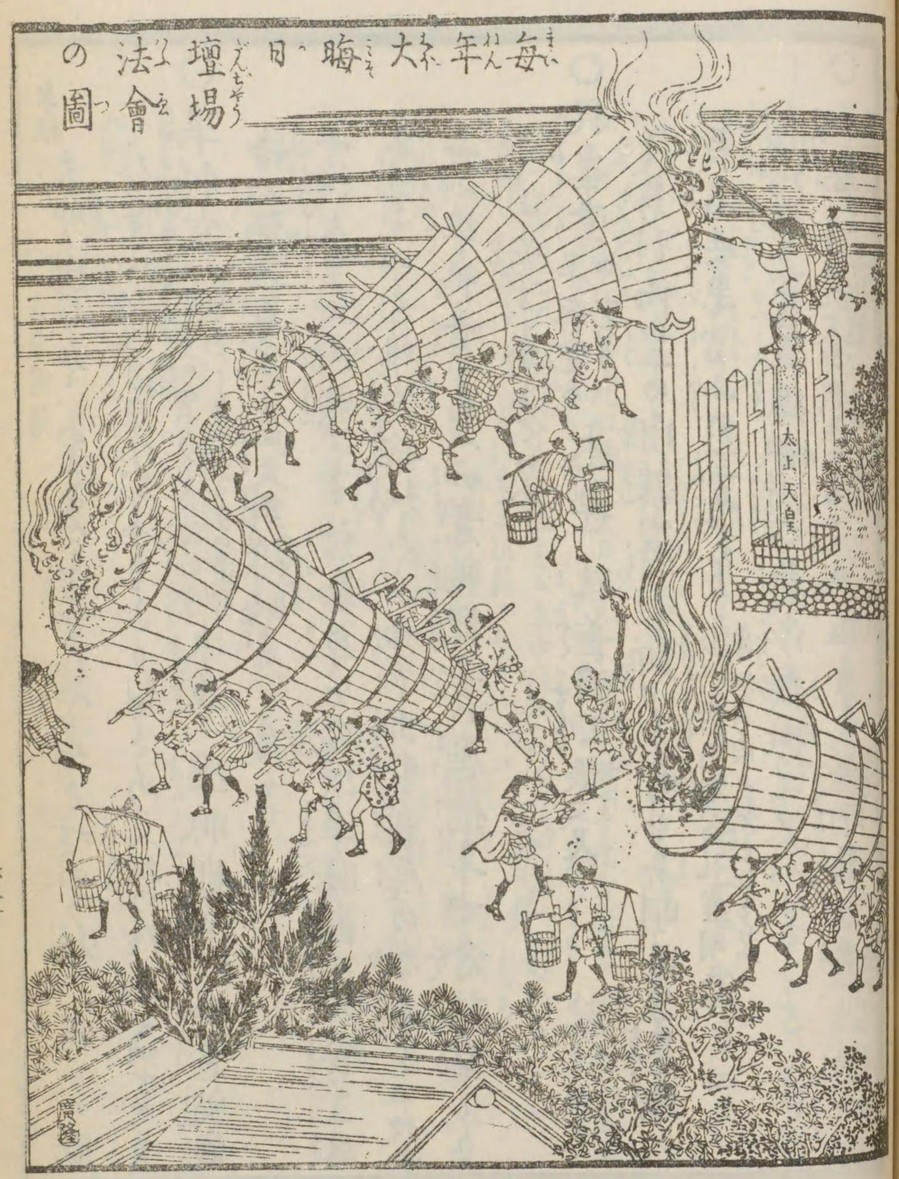
野山除夕

南山僧除夕忻無塵事
妙法中原清淨癘鬼詛須
穰燃屋無人坊溪燈寒寺堂
乾巫祭事畢祠前火光揚
後夜鐘聲動寺務朝壇場
五更為先道場
勢相望檀夫二百
余長圍三尋強
焰光燒空乱鱗起王
眼眶神幣中央御列位儼
為行狂越人擧集喧聲
滿衣坊須臾法筵散相
引歸各坊我性忱閑寂
却嫌它絡忙火閙燭燭
酒陶然獨孤篇詩腸未
錬得朝曦已射牀

巨鹿野人



毎年大晦日壇場の法會の圖



古寺曉鐘

名所山月をいふ名所の字そしやうそもまさりそうめる八相の繪　正　徹

○準胝堂　如意輪堂の西にあり　弥勒堂　西御堂ともいふ　本尊の遺跡なり　大納言光廣

吉　踊勒尊並に四天王共に大佛

小松天皇の御願なり　弥勒尊を安次準胝觀音へ食堂慶

をうつし奉り　雅眞撿校なり　移して出家剃度の本尊とす故

安ぬ準胝堂とよへり　如意輪觀音の應德年中念誦堂なり　本尊　準胝觀音　如意輪觀

○孔雀堂　準胝堂の西にあり　本尊　孔雀明王　長三尺七寸

後鳥羽法皇の御願なり　明王の尊像へ

長者延果僧正の手跡なり　役行者所製の孔雀明王を

○新御塔　文殊樓　経藏共に今廢す　擧體の肉身をうつし

西塔　九丈即衆生本有の九識　本尊　金剛界五佛

光孝天皇の勅願に依て大師の素願を繼ぎ眞然僧正の

創むる所なり數百年を經て破壞に及ひ給ふ　鳥羽

院御幸あつて院宣となり下されて大治二年十一月四日か

ら修造御幸ありて落慶供養の法會を修しおはしぬ

○丹生大明神　本地胎藏界大日　高野大明神　本地金剛界

十二王子　百二十番神を拜殿に安置す　山王院とも

書神を勸請す　大日南方寶生　總社は當社東

弘仁十年五月三日大師の御夢に　大鳥井　本社總社と勸請して鬪山の

鎭守として給ふ　妻しく大師啓白の文ふかくたのもしく

又むかし祈親上人當山の荒ひくを歎きて當社に祈念せふ

明神夢ふ告ましくて殊風雅集に載らる

僧鑁阿謹テ

寄進ス

金剛峯寺濆守天野宮八講理趣三昧並
神事等用途米事

合拾叁斛者（但十斛者於彼御室前可勤仕八講理趣三昧
供料若也三斛者御供神事雑要米也

右奉寄進意趣者先年之比天下大乱貴賤愁歎諸州逆
乱万民滅亡聞是偏肝砕心何助此何救此只非佛
神效驗者以何止此苦因茲内心發大願其大願有二種
一者於高野山根本大塔修長日不斷両界行法遍續龍
花三會之暁二者於毋生權現御前勤行八講理趣三昧
遠期慈氏下生之時然則冝奉祈請大師明神顕令奏聞
太上法皇之處忝達御奏慮已所被宣下明白也爰文
治三年五月一日左衛門権佐平朝臣棟範於御使已被
始行法其用途料以備後國大田御庄所令御寄進也是
則非大師御加護明神霊驗乎依之弥為興隆大師之

教法為祈請行法之不退彼御庄所當年拾参斛所令寄
進佛神事用途料也其處者雖異理趣者一也彼此同續
慈尊之下生即無其中間有退轉令勤行二十箇佛神事等
錢阿敬白

和勝元年六月廿五日

僧錢阿

某云錢阿ハ法花坊と号す足利義尊朝臣の法名なり異年号充るゝ事
和勝の文字他は見ざる事なり文中天地八像理趣三昧并神事等用途米の事
と記せる事文治年間の文書ならん然るに建久五年七月の文also天地八講理趣三
昧配當米と記すこれ因る文治の末より云い建久の始めにかけて
てかゝるならん但建久の四月の改元なるに六月とあるはいまだ後の改元と
聞の事かゝるべし百練抄に兼安二年壬辰十二月廻日猪熊殿有改元之由公家
被械仰 深一峒一鎮一社 雲石堂宋本

十八景

玉一殿一峰一嶸風一色 賒一雞一籟表石階斜 松一杉 深一處人來往幽

鳥跡畑日夕佳

○鐘樓　南庄の北にあり結昔ようそ物
元文年中小濤造ず変ら往
千首
かくれなきを今ぞ岩ようき山ふところの底小　師　兼
狂奇
陽もなおそきみの如くの滝　唐衣橋洲

○閼伽井　南庄の南林間にあり天竹の
凡一山濯頂壇供水の大井今舎ふ
龍目泉　康安の

○六角堂　本尊釋迦如来四天王深沙大将執金剛神
平治年中　鳥羽上皇の御為ふ美福門院の建ま
紺紙金泥の一切経七納めまる表題かとぐく女院の御
親筆なり且本州荒川の
のもの荒川経蔵ともよ

○七株霊木　三鈷松　昔ず龍燈杉　南庄の　菜子掛松　鳴子
松　登天松　六角堂の北にあり　倒指梅　影向

○飯盛の芝
○愛染堂　一ま称堂とよ　本尊愛染明王　後醍醐天皇
後醍醐天皇の御願所ふ建武元年左中将長光朝臣
長日護摩ま供長日御沙汰の義の
綸命を奉ず勝宝院僧正
命ぐく修行せめれよ

○盥漱盤　一ま蓮華手院とよ　又豊臣秀吉公の寄附なり
○大會堂　本尊宝冠阿弥陀如来　脇士観音勢至
鳥羽院の御為ふ安元元年五辻弁院東別所ふ建立ぐく
ま治承元年六月廿ふ
奉行を旦六の堂長日御沙汰義料ぐく
佐藤兵衛尉憲清　西行法師なり　是を
綸旨院宣御教書ふ数通納めぐく宝庫ふりとなむ
処ぐの庄園を寄ぐと
内舟院の御寄附ふ今尤も憲清の自筆とや

○三昧堂　本尊　金剛衆大日如來　銅像長一尺五百ケ余
延長七年當山六世の座主濟高建立の念誦三昧堂なり
康和三年初めて供僧三口を置る　其至て五智増編覺證の三僧なりと云を管す

○西行櫻舊跡　三時堂の前にあり西行の三昧おこなひし跡なりと傳ふ

山家集
おもひ出ていくたびかりの春を分　終るすゞ虫の声

○東塔　本尊　尊勝佛頂　不動　降三世　西行上人

白河院の御願にて半身の尊勝佛頂を安置せらる

○蓮池　壇場の南東の方にあり池中に赤白の蓮花を生ず中央に善女竜王の小祠あり天帝の出時降臨ましまして此池乃蓮糸を以て眼のあらそひを結ばしめ給ふと云ふ　拾栗山人

おりゐるもいとあふうつせ眼のあらそひ

南谷

□勧學院　壇場蓮池の壇場の巽方注連つゝの内にあり西院谷つゝ　本尊　金剛衆大日如來　支考

○鐘樓　宝庫　敕使門　西面　築地　卵塔　庵室

此院小兒ゝ毎年八月廿一日より十日の間學業を試むるに日ゝ講あり神法樂を備ふるを學道とす都て俄に敷重なるを聞一山の諸僧普請鳴物ふ堅く禁ずこの飛ひ山中おふおゝしと撰びゝ廿人と柔む着座ゝ終らんとき配の圖の僧二十面の圖とゝ列衆よ撰ゝめ是ふ中ゟ者を溝師とす即竜猛大士無畏三藏乃ひ大師制作の論疏等都ゝ二十五巻の中一巻を暗誦講演す講終後滿座論議あり例せば儒門の人進士ふ挙せんとするが如くふの勧學會の新衆を勤め畢ゝ會衆の名をえらび後才器ふ随て丈刹を領ゝ初学と教示ふゟうさんが文祿年中　神君御登山のとき此會のうを昌ふ　聞召ゝ往昔天平延暦の頃

明王院如法上人名
を忍尊といひ治
聞博識く父安元年十
四月十日都率天り
下りて弟子
に従ひ衆食を調ど
侍りし其供仕ひく
上天人ども飯ヒを
落しけり其文を
拾子の文といひ今
に壇場とりて

蒼主院
本尊
の肉絵
海士郡
塩焼
地蔵
の
條下
委

定めらるゝ度料及ひ船の旧風唯この山よりおろすものうた殊勝のことのゝまひゝゝぞ抑玄の院舎ゝ建久年中右大将頼朝卿衆徒学業勧励のため草創せらる又弘安の頃北條相摸守時宗公の會の厳重精密なるを随喜し秋田城介泰盛ゝゝ此院を造営せしむ又文保二年　後宇多法皇院宣を賜ひ肥後国岡年田庄を寄附しましまし勅願所とす　後醍醐天皇建武二年ゝ弥惠学を励ますべき　綸旨を下さる旦講師の名を記しゝ後代ゝ称ゝめまゝゝ

○遍照尊院　檀契　津軽越中房
○金生院　○浄菩提院　○覚城院
○眞珠院　○水壽院　○加納院
□遍照が峯　檀場の南方　○明眼院　○浄眼院

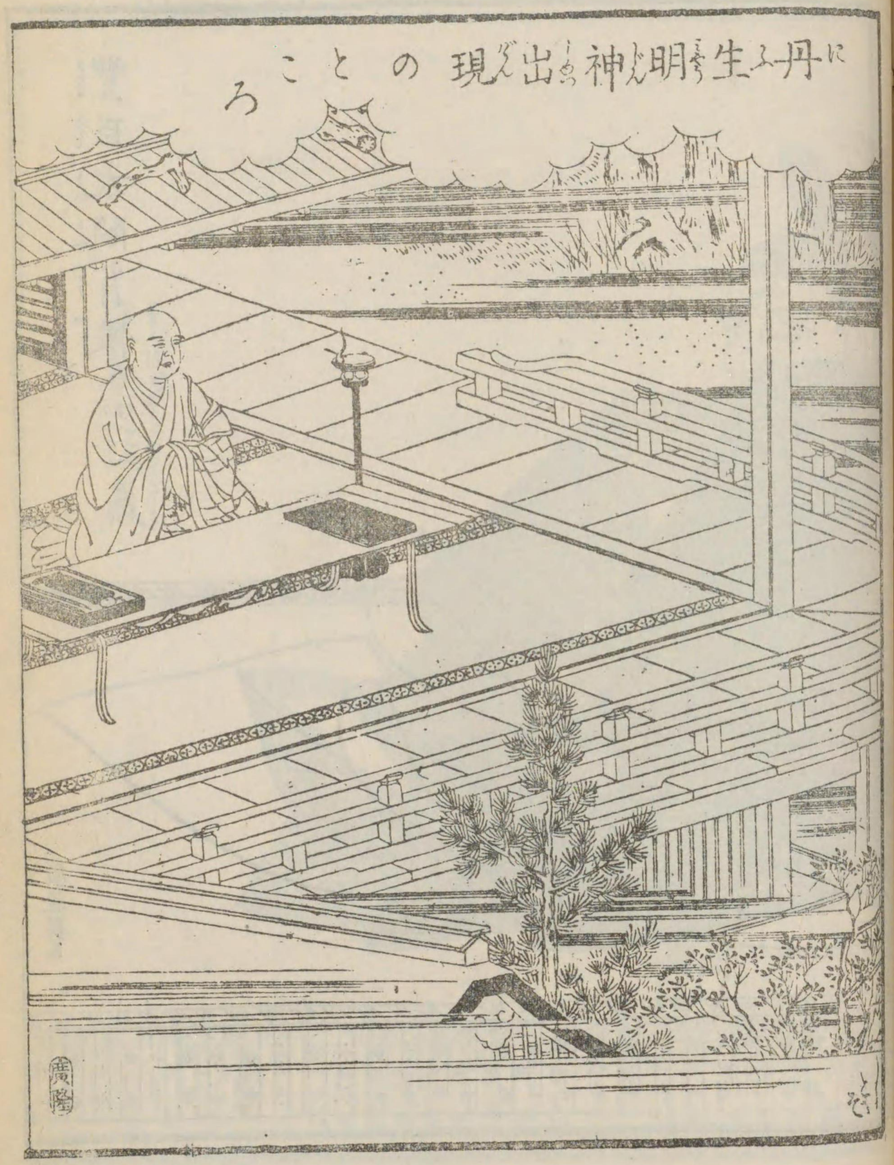
八葉の一ヶ寺也世俗覺海山と
看往所等あり覺海師を但馬國朝來郡の人なり曾く當
山ふ草菴を結び自開數花王ゝ等ゝ南方寶部南勝の名
を呼ぶ建保五年撿校ふ補ゝ終ふ修羅即舍那魔羅即
法曳の覺悟を得俄然とゝゝ
生ゝ直ふ大虗ふ向ゝ飛去つ
時ふ貞應二年八月十七日春秋八十二歳なり師蓋ゝ學德
湖博みゝゝ大ふ宗風を振起せ
危難ふ値ふものゝ必尊師の
ゝ（沙石集天狗之人眞言教事の条ふ近ゝ
そ後大虗の秘法を更甘て弟子ふ授ゝゝ智惠道心ありべ行の如
虫蝕ナシ）

□虎が峯（八葉の一ヶ遍照が峯と傳ふ）
□地藏堂（古の湯屋數ありふ山のそなり）

本尊　地藏菩薩

本尊旧ハ大師の御作今ハ小野曾王卿の製作する所の地藏尊と
安置ス即南谷六地藏の一なり（成蓮院ふの堂皆南谷ふ在ゝ）

○增福院
○證菩提院
○大樂院　檀契　前田大和庄　松平長門庄　丹羽長門庄
○花城院
○般若院
○明星院
○悉地院　檀契　織田若狹庄　池田土總介殿
○心南院　檀契　戸沢大和庄　六郷左近將監
○揚柳院
○東禪院
○西室院
○成蓮院
○南院　檀契　石川日向庄　松平美作庄
○證覺院
○法林院
○常樂院
○不二院
○自性院
○靈山院
○持宝院　檀契　織田丹後庄　池田丹波庄
○龍照院
○如意珠院
○青龍院　檀契　織田大和庄　池田信濃庄
○最勝院　檀契　松平安藝庄　筒井伊賀庄　本庄内蔵助
○花王院
○補陀洛院
○三寶院　檀契　松平壹岐庄　伊東播磨庄　松平内膳庄



に丹生明神出現のところ

宝性院の宥快師ハ其廣徳天下の知る処也く竜猛の論無畏の疏高祖の制作悉く述釈して鈔をおひ其外著述数百巻なり或時悉曇章を鈔述しく深更に及ぶころ丹生津姫の神錦衣玉冠瓔珞珊々らく手に魚脳の燈を提げ幽扉に入来り給ひ暫問答わらく一首の御詠をあそばされ

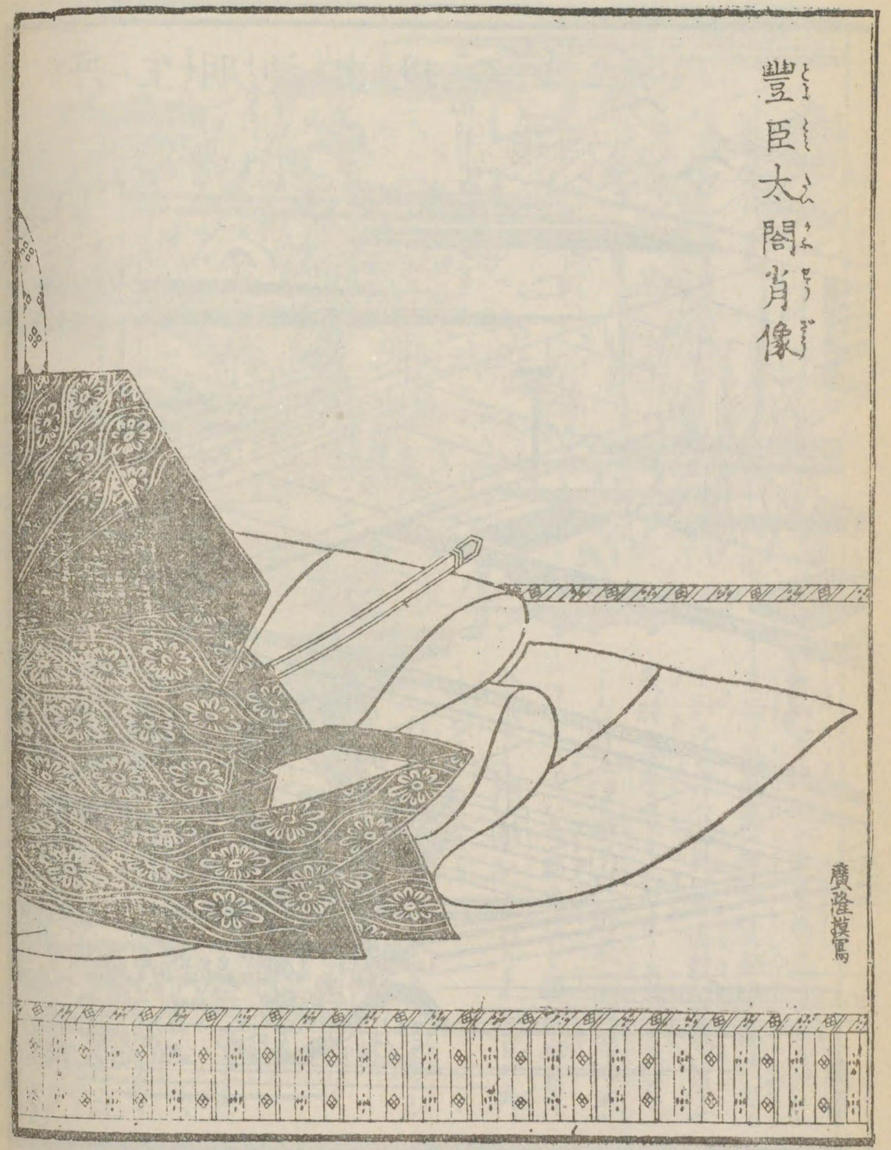
わろくもまどろくもろもろ神も法のともしび

宥快師答へ奉る

ともすれともふくろをもらさじ法のともしび

神歓喜

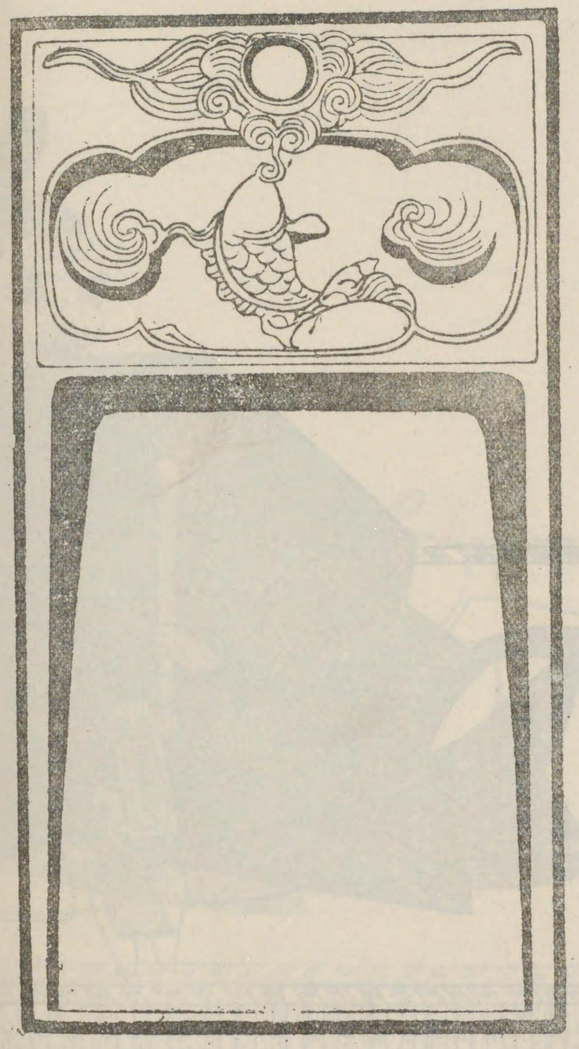
豐臣太閤肖像



廣澤模寫

蓮華定院藏

瑞漢硯



寶積院所藏

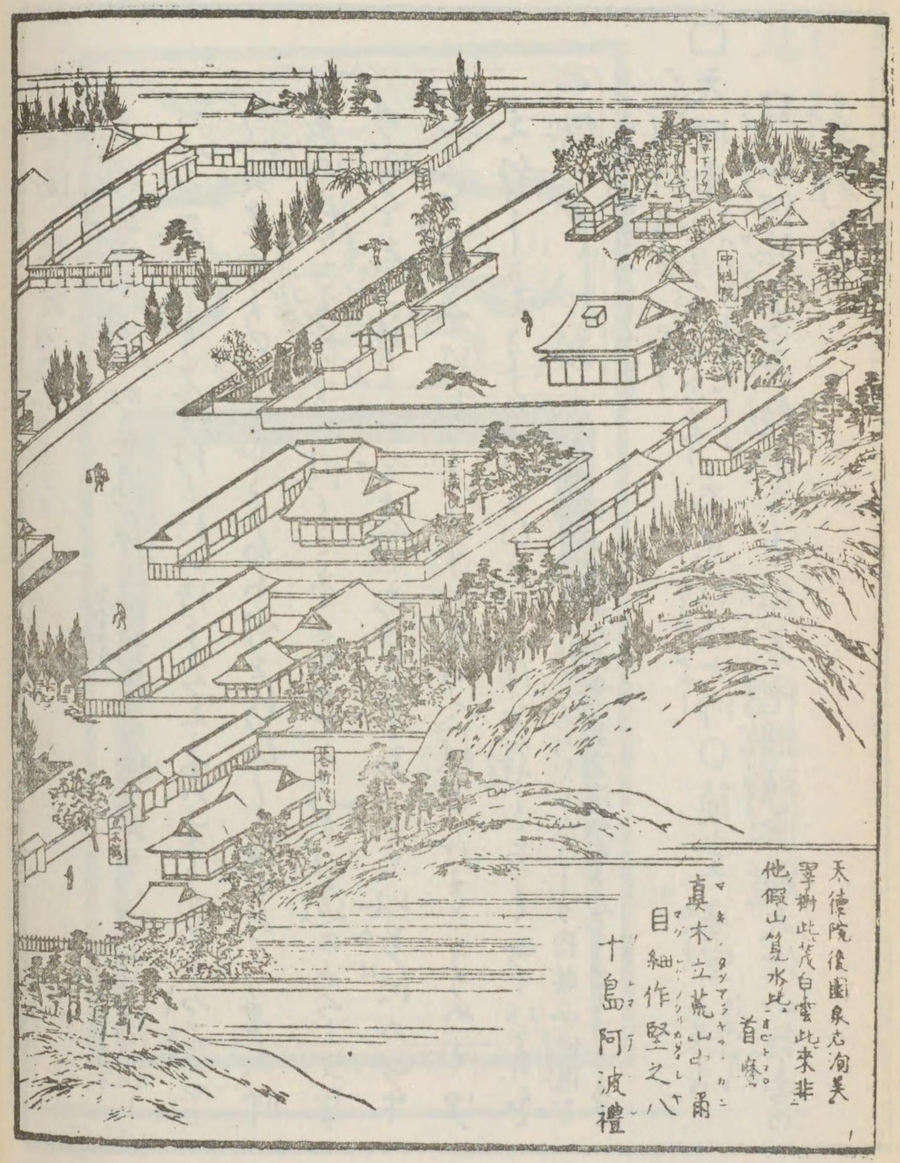
廣隆縮寫

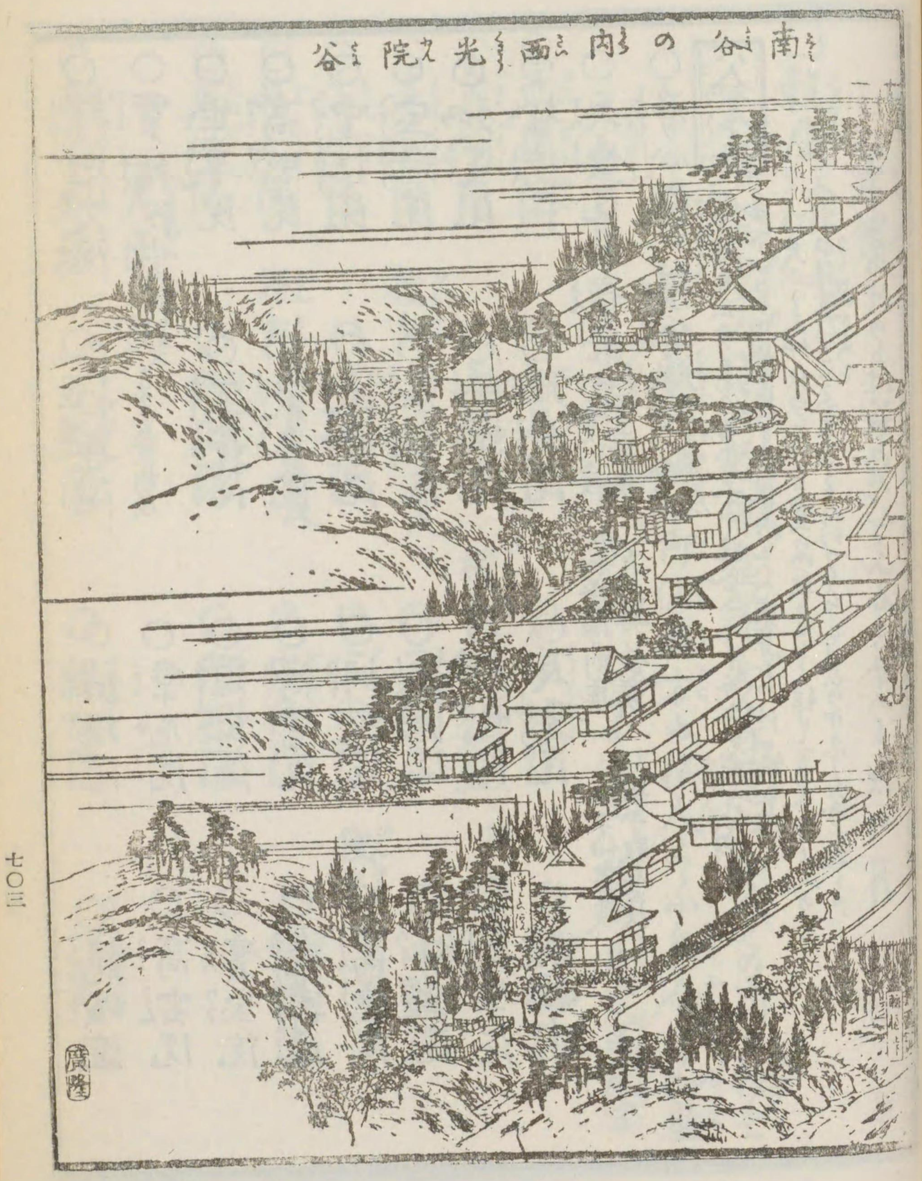
○寶性院　檀契　但弘仙石筆

頃阿法師高野日記云
大師此山の圖をかくせられしに
うつしも及まじうえ給ふ好ハ竹ハうえ木ハ木ふかを給ひしおもあり中畧大師
入定なさるゝのころ四方をうつして坐をさりたまふ迄のさま文字
のうつさるゝ給ふ時ハ仰合すべきやうもありとて以号法の四千
字をおさせられしうまの一巻の人丸ともなりぬ事
えがゝるゝいろはを給ふ時ハ四千八百字を
御ふでゝ新紙あまり給ふ時ハ
古書わすれ給ふ

○大師堂　大塔の北二十余あり　本尊　弘法大師　○鐘堂　庵室　山役人の住所なり

後白河法皇の御願ふよりて
治承兵中圓城寺前大僧正賴豪の
草創なり


天德院後園泉石洵美
翠嶺此茂白雲此來非
他假山篤水比
首夏
真木立荒山男
目細作堅之八
十島阿波禮


南谷の内西光院谷

○釋迦文院　○心善院
檀契　本多豊前侯
○寶積院　○宝壽院
○世尊院　○歡喜院
○高照院　○遮那院
○中性院　○淫明院
○宝瓶院　○榮照院
○知足院　○地藏院
○智德院　檀契　加賀侯　松平出雲侯
○天德院　檀契　松平山城侯　大村丹後侯
○淨心院　檀契　松平伊賀侯　松平備前侯　松平伯耆侯　松平敦賀侯

谷上

檀場の正北よわり東八本中院谷ふさぐ谷上の義一社滝の
末下ふる四檀場より嶺弁天へ通ずるの渉路なり
天武十二仲秋のころ金堂の西往さそなと拝こまするふ雲人の
くるまもとゞろふ夜の月　谷己

○修禪院　○龍城院
○摩尼院　○高雲院
○光三院　○寶宝院
○高覺院　○壽壽院
○洞雲院　○萬德院
○聖德院　○妙見院
○中性院　○教學院
○大聖院　○瀧壽院

七〇四

右側

□穀屋　大塔の北方
大塔金堂御社西塔會堂等をの通心五人ごの内より役ヒまと西の端ふ廟を擁へ即修理方の役人ごふ集會し伽藍修造の事を相議を凡普請ふ預ら諸工も皆玄ふ寓居す

○西禪院　○知足院
○金剛院　○正智院　檀契　黒田備前侯　堀丹波侯　谷播磨侯
○蓮金院　檀契　薩州鳥津侯
○三藏院　○宝藏院
○李譽院　○威德院　檀契　相良壹岐侯
○宝光院　檀契　行桐右兵侯
○慈光院　○安樂院
○來增院　○最勝院
○顯正院

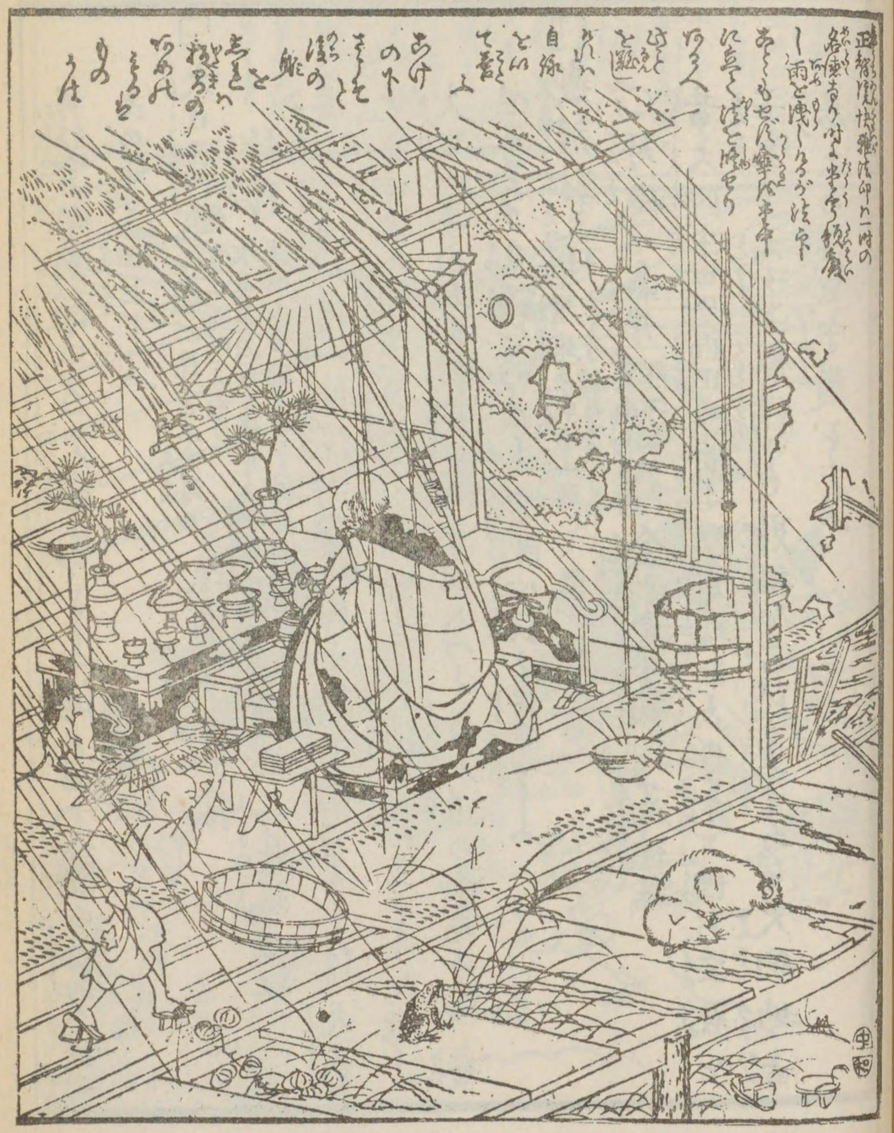
左側

○無量壽院　○光明院
○觀智院　○上智院
○万勝院

七〇五

○長福院　檀契　未曽家
○引接院　○摩尼院
○法隆院　○寂光院
○心王院　○龍生院
○智源院　○宝集院
○成就院　檀契　伊達葦奥庭
○愛染院　○葦亀院
○轉法輪院　○千蔵院
○圓明院　○日光院
○中臺院　○大智院
○龍宝院

□一の龍不動尊　嶽山の楓
當山万水の源にて最上の勝景なり



○妙観院　○南昌院
○光壽院　○法明院
○大雲院　○西光院
○般若院　○瑞光院
○多聞院　檀契　備前庭
○蓮臺院　○三和院
○聞持院　○妙雲院
○徳壽院　○明眼院
○月輪院　○高善院
○青蓮院　○明蔵院

ざいあひ東南の方大龍ふくろと德く四十八龍の称あり故ふ
其の地を谷上とふ

□大日堂 一ノ金剛心院とふ大塔の乾方九二町ばかりあり
本尊大日如來

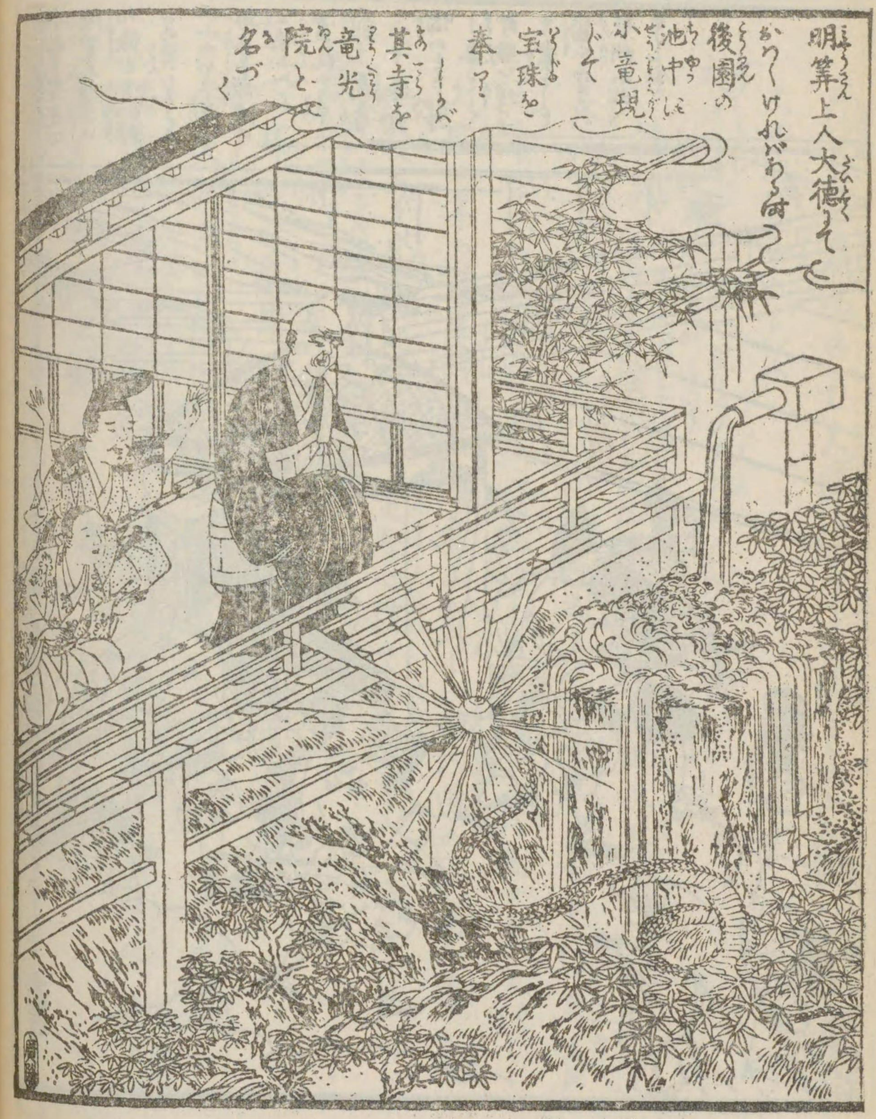
○鐘樓 永正年間の古鐘あり旧は獻山東坂本生源寺ふ掛ふところの縁起あり 東西二基塔婆あり

長元年間 後一條院御願ふ因て創すろ所なろふ天養元年宇治入道忠實公御登山のとき再造を企つ五ヶ年と往て久安四年内大臣賴長公御登山あつて即入道の御為ふ落慶供養あり且願をかけて金剛心院と号ふ

□嶽辨財天社 壇場の乾方十町

□拜殿 鳥井 東南両道内外二基あり 金剛童子祠 荒神社

昔大師未世の福田のふあふ如意珠を其の峯ふ埋て宝祚を安全ふ天女を勧請して財福を乞ひ玉ふ天狗 妙音房其の嶽を守護ふ



本中院谷

遺物の良方小濱ゟ往還の左ニあり小田原谷ゟつゞく當山の中心根本祖師最初の所住ゟ中院あり

山家集

さゝなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山ざくらかな

同

おくれゐてこゝろのやみにまどふかなちるをみてだにあはれとおもへば

○東南院　○大乗院　○二覚院　○總持院

○親王院　○乗蔵院　○相應院　○龍光院 又中院とも

瑜祇塔 龍光院境内にあり金剛峯寶樓閣瑜祇塔と称す大塔ゟ一町許東の方にあり

阿閦宝生観音虚空蔵の五智如来を安置す故に五輪塔ともいふ　本尊　金剛界大日

此塔ハ大師御請来の圖とりつゝ真然僧正ゟ授けさせ給ふ

傳ニ大師の遺命を受つゝ貞観年中創する処ゟして五峯八柱の構四九三十六の操妙巧精絶鬼工のごとし　金剛峯寺称号の権輿深秘大塔ニ並ゟ此塔ゟあり四柱ゟ九尊つゝ八柱ゟ八大菩薩及び八祖等並ゟ皆僧正の入室會理

僧都の開く所なり尓後数度の興廃あり寛永三年直江山城守の後室これを再興せしかど文化六年の火に災せらる今の住持某鼻祖の遺志に躰して是を造営す

塔の額文に曰金剛峯寺宗樓閣瑜祇塔
再興直江山城守後室為二世安楽也

○明王院　○遍明院　○瑞泉院　○宝蓮院

○中蔵院

□蛇原　塔の東塔の前より六時の鐘楼までをいふ

傳へいふ此山開闢のとき此処に大蛇ありて人を害す大師即竹箒を把て是を拂ひ終に大瀧に退け玉ふ其怨竹箒にありとて山中今に至るまで竹箒を用ひざる此故なりとぞ

□六時鐘樓　國字を交て銘を鐫る

銘に云

南山高野金剛峯寺ハ大師草創より此かた密教さかんにして一縁毫を違易せず今に儼然たり然るに此山中に洪鐘有といへども二六時を報ずる聲なし衆徒是を嗟嘆する事久し爰に尾張海東生縁福島宰相正則勝を千里に決し治を大邦にやすんず故に備藝二州を領ず外仁義を施し内孝養を旨とするによりて先考の父慈愛の母追善のために冶工を招て新に華鐘を鑄て彼山に寄附す加之三箇の浄人に命じて時々の響音をつかさどらしむ凡その功徳是を撃ハ一切の悪道頓に停止す得是を聞ハ十方の聖衆共同じく利する願ふ所は此力によりて諸の衆生現當二世安楽ならしめんと也

元和第四戊午暦二月六日

福島宰相月翁正印大居士在世の時洪鐘を鑄て万世に残す雖然寛永七年十月四日たちまち雷火の災にかゝりて烏有となりぬ其後ふたゝび孝子福島市丞正利大居士あらためて梵鐘を鑄て高樓にかく伏てねがはくは此鐘好音をつたへて千秋萬歳ならしめむ事を

寛永十二乙亥暦卯月十二日

□且過堂　六時の鐘樓の西にあり　本尊準胝観音

古登山の旅人宿所なき者此堂に投宿せしよし今は廃し

く本尊の準胝堂と移すと按ずるに東坡詩曰身是雲堂且過僧住ふ旅僧一宿之處曰且過とあり蓋御圖記く大炊屋といふを是なり

○荒神祠 興山寺の門の甲にあり

大辨功徳天を相殿ふ安置大師この荒神を勧請し壇場の鬼門を守護せしめ給ふ

○興山寺 本尊阿弥陀佛 恵心僧都作

○東照宮 興山寺後の山上にあり

御供所 一切經藏 奥に秀衡日當山寄附せし砂金泥の一切經を納めたり

寛永五年 台命ふ因く造立し奉る 神像ハ日東御真言坐八躰の一なり 大佛師康猶の造なる如御劔ハ堀川國廣の作なり且御供料一百石を賜ふ 神宇拝殿ふの壮麗且年中の精祈祭禮甚嚴密なるを地も

興山寺皆ふ峙ち眺望のおもしろき萬樹翠を凝しく南峰を続き両壇甍を並べく西空ふ聳ゆ春花秋月時ともて佳なるふ実ふ南山の佳地なり

○巡寺八幡宮 毎年二月七日及七月廿四日の夜神幸ありて往昔ハ讃州多度郡白方村ふ鎮座ありしを神異と称し奉るふ 神功皇后三韓御征伐の御旌及び御旌竿中差の御矢なりとぞ 蒙古襲來のとき神威ふ因く夷賊鏖滅しく後御旌海を渉て紀川ふ泝て伊都郡山崎村涼の森ふ松楠を植給ふ今ハ郡名井村の鎮上にあり 即神勅ふよりて當山を迎へ奉ると御誓約ふ曰聖を吾と吾ハ影と形との如く聖のおもかげハ吾必行むとの給ふ東寺東大寺も大師の在し時御歎向ありしふ今の神祠も大

興山寺

興山上人出座のそうう

巡寺八幡神幸の圖

蓋御姓名を拝ん度を恐ながら
覚親親玉と載しく御筆よろこばしく
○巡寺大黒天 毎年五月晦日十一月晦日
の夜御神幸なりまる

大師求世薄福の資を憐ひ此尊を造らせ給ふ治安
三年法成寺殿下荘園を寄附しそ

一心院谷

心字池あるゆへ名づく 不動坂口より入る右の
谷なり 壇場の北方二十五の室谷よりつゞく
右側 千手院
○宝城院 ○花屋院
○宝樹院 ○阿光院
○威徳院
○蓮定院
□金輪塔 不動堂の西にあり 本尊金輪佛頂
寛治年間明秀大徳遷化の後遺骨を此塔下に納め名く
菩提院となんそ
○妙音院 ○金剛蔵院 檀契 因州侯 備前侯

○宝蔵院 檀契 堀大和侯
○真蔵院 ○恵生院

左側

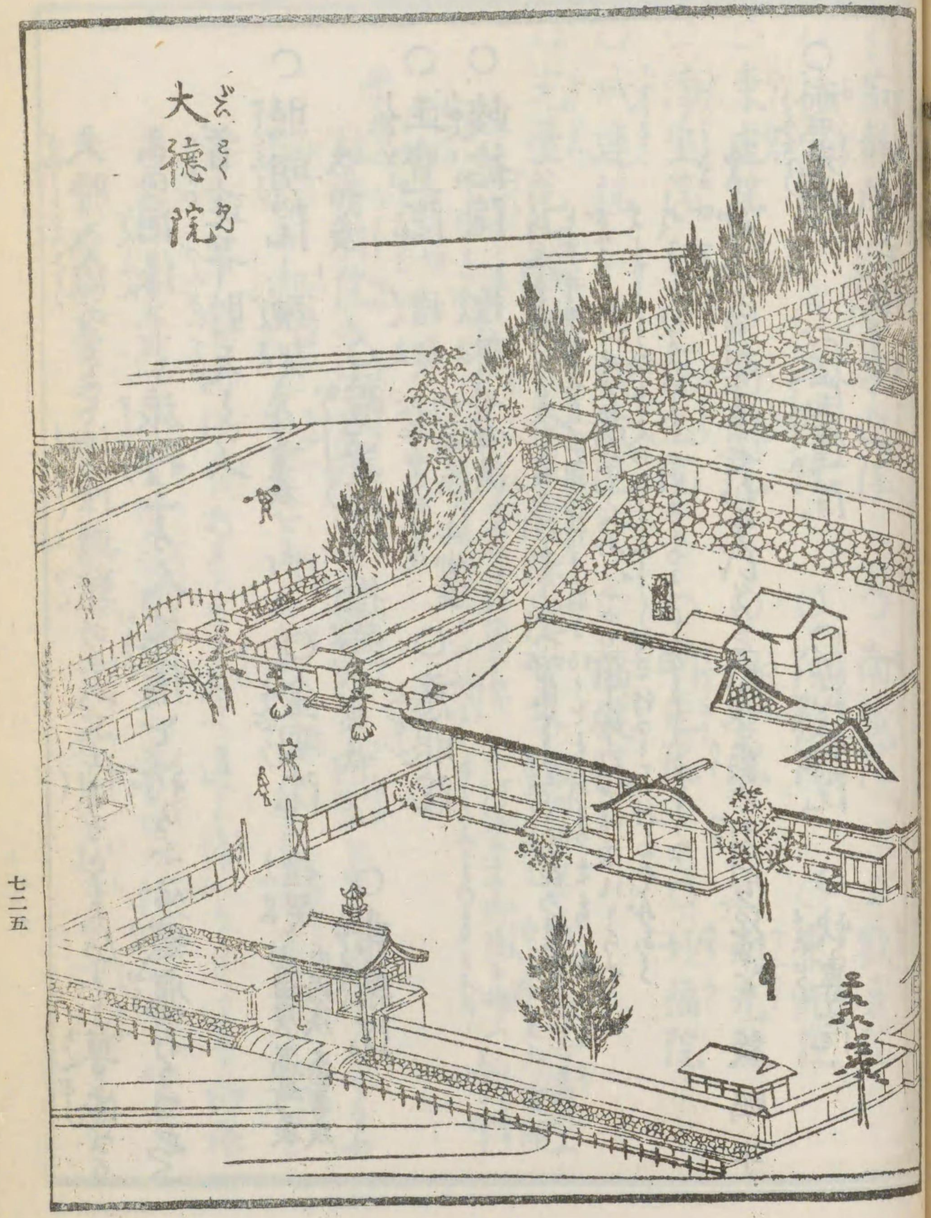
○庫蔵院 檀契 小出信濃侯 多羅尾数賀侯
○金光院 檀契 奥州三春侯 本国安藤大史
□不動堂 金輪塔の東にあり 大十尊不動明王 行勝上人の作
八條女院の御願ふ因て行勝上人の創る所なり源頼朝卿
荘園若干を寄附し燈料となしぬ古記に曰く四人
の良工あり各巧思を尽し四隅各異なりと雖ども倶に妙を尽す
○鐘堂 河内国教弘寺 加納遠江侯 大岡家
□心字池 大師堂の下にあり
○福蔵院 檀契 織田大和侯
○西蓮院 檀契
○蓮花定院 檀契 真田侯 三浦備後侯
○五坊寂静院 ○正法院

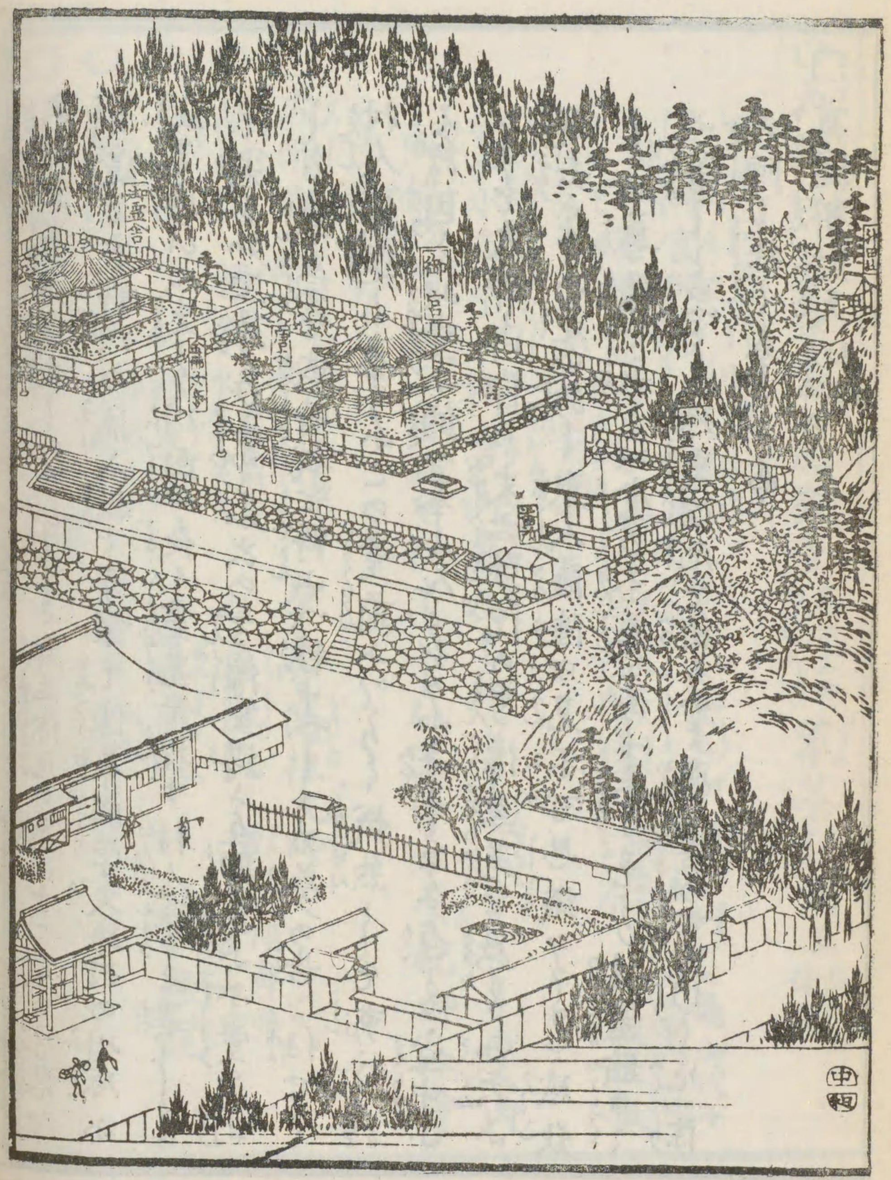
五之室谷

壇場の東北四丁許にあり二の谷より室の字北より五番目
にあり谷の名より千手院谷よりつゞく

○大徳院　本尊十一面観音　高祖大師の作なり　軍荼利明王　高祖御持念
内佛阿弥陀如来　安阿弥作
□御宮　院後の山を御霊屋と申す
位牌堂　諸廉方の霊牌を安ず　神君御登山の節より御宮中の守護神なり
寛永年中　御宮御霊屋を外にも建立なし給ふ又御献供の領地二百石を附し給ふ年中の祭祀御法會等厳重なり
□大師堂　大塔を去る事五丁許り乾方大徳院の傍らにあり
○高祖院　檀契　黒田豊前廉水府中山大夫
○三学院　○祥嵓院
○六町院　○明王院
□極楽堂除厄大師　大師手彫の尊像
○康徳院　檀契　間部廉
○真蔵院　檀契　畠山家
○万照院

大師大峯小運歩して群生除厄の為四十二歳の姿と自造の吉野川の流に投じ給ふ千手像本國学文路村の川底に止まりぬ夫より川面に夜々霊光を現ず村人驚き異しみ光るものを尋ね索ふに尊像忽時我と野山へ移ずしとの夢の告ありしかば俄然として動き給ふ因て此堂に納め奉らんとするに牛より堂中に飛去り是ふ人薩陲の見不可思議なるものと感歎して此尊像を永く此堂の本尊と奉り後霊験日々ふ著しきを以て殊更除厄と祈るに應音の如く仍て除厄大師を称し奉るや
□首途辨財天　大師の刻彫


大徳院


仲宮
中門

大師入唐のとき海陸無難のゆふ作りたてまつり尊像なり
其の因縁にて旅行する人擁護を行ふ必感應あるの由
首途弁財天と云
○照明院　檀契　尼寺庚
佐伯庚
○覚證院
○正覚院　檀契　松平右近将監庚
檀契　内藤庚　安部庚
○峻徳院　檀契　井伊庚
○金剛院　檀契　吉田庚　高畤庚
檀契　大久保庚　府内庚　大田喜庚
○常楽院
○慈眼院

此品事始のとき井伊拾遺直弘朝臣奉行にて
ありそのゆかりにや此院を井伊家の
菩提所と定めたまひ
○雲光院
○宝蓮院
右側
○密蔵院
○快専院

○寂静院
○持宝院
○東室院
○浄宝院
○成蓮院
○光臺院　高野御室と称す
堂を安置し奉る像とす
六坊を存す
沙門集に
故持明院の法皇れ御子ゐ
隠岐の御所にて梵字と御自筆ゐうつして
御逆修と思ひさ
さて四十八日御供養ありて
さいはふを
聖覚法印に
十余座供養ありて
○来迎院
○西明院
○高樹院
○珠宝院
○威蔵院
○李尊阿弥陀如来　観世音菩薩勢至菩薩の三尊なり共に白河法皇御持佛
多宝塔　庫裏の後に岡ゐあり白河法皇の御陵と擬へ
寺中の御代々の陵なるべしとぞ
○南蔵院
○弥勒院
○福智院
○明光院
○福厳院
○歓喜院
○東光院
○南光院
○妙福院

玉座の統法聽聞しる人の絶ゆるへからす施主殿か我朝か
ゝる御果報目出度ゝ陰岐の御所至ゝ御果報ゝ
持明院ゝゝゝゝ人身を驚ゝゝ陰岐の御所の御果
報ハ末代の賢主明主そ諸道を專ゝ榮耀目出ゝ御座ゝ
御支申すゝゝうへ今生の思召事なく一期御榮有
ゝかゝそ御臨終あゝハ御往生いたのゝかうへきふ切續て後
生の御果報賞さかゝへきそ世乱ゝ遠國へ移ゝさせ給
うの一旦の御歎ありとゝへきを是御歎と善知識として先
業のゝをもゝゝ觀悔ゝ當來の苦患を思食ゝて罪とを
をきさせ給ゝゝ如此ゝゝすらふ後生の御逆修もあま
ハ往生淨土の素懷もなどとをたのゝゝ覺そ雖へさしハ
今生の御果報もふ目出度うへきゝ持明院ハ一期御心もまろ
やかゝゝ御思召もなゝゝ空ゝゝ御年ゝみめゝらかされと像と

して往生の御行もあらハ來生ハゝのりゝかうへきふ御位の
事いゝゝ旦らゝゝの御樂ふ後世の御勤なくハ二世ともか
御果報ゝろさ御支そうへめへゝゝ今生ハ一旦の榮耀後
生の御つゝあなゝいふのゝみうあふきゝらゝけるふお人油もあらる

千手院谷

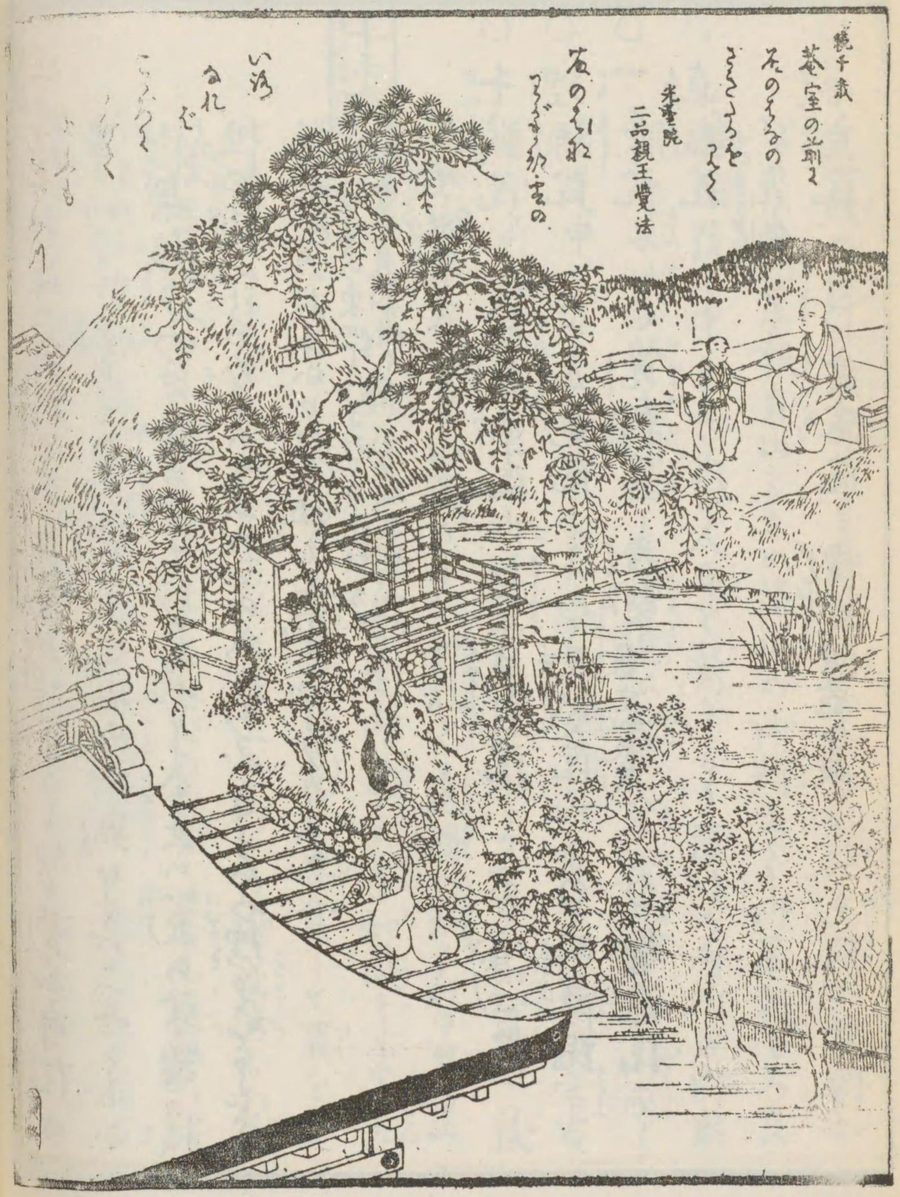
壇場の東四丁許よあり千手院者の
堂あをゝゝ名ゝ小田原谷つゝく

右側

○千藏院　○常樂院　○成就院　○唯心院
○理源院　○正龍院　○正賢院　○明慶院
○一乘院　○光輪院　○藤堂和泉守　○智恩院
○真福院　○檀契

左側

○善宝院　○甘露院　檀契　甘露寺殿



○理性院　○金光院　檀契林肥後侯

○明星院　○雨宝院　○幸福院　檀契

□千手観音堂　大塔と相並び、八木良の方、本尊千手観音　脇士　不動明王　毘沙門天　共大師作

此地檀場の鬼門に當る故ふ大師伽藍擁護のため弘仁十年ふ彫鏤ありし丈六主像の千手観音なり此像廃後大治年間蓮意上人再度ふ造る後嘉禎年中化千上人二丈四尺の尊容ふ改造ふ正保四年の冬上ふ漸く御頭ふ奉る今猶堂裡ふあり迎奉置ふ所の尊像ハ何人の改造ふ事ふあるぞ

□萬日堂　千手堂の側ふあり

寛平年間一異僧庵ふこの地ふ結び一ヶ日の間一万三體ふく大師の影現顧眄して曰く、お日のお方

○曼荼羅院　檀契

と顧みて今ふたゝび縁と改めたまふ

○大善院　○林松院

□普面金剛堂　創造不詳

□熊野權現社　建治年間一遍上人勧請すと云ふ

○観性院　○密花院　○長壽院

□合躰不動堂　千手堂の艮方一丁許にあり合躰不動と云ふ

大師當山鬼門保護の為創立し給ふと應永の尊像を作るべきに思ひ惑ひ〳〵春日明神に祈求めたまふに神託ありて大師の尊像半身を作り我もまた半身を作るべしと告げたまふ大師即ちこの堂を造り終〳〵合躰不動尊像一軀あり由来詳ならず

□秘井　不動堂の艮方にあり

玉川の水源とし傳ふ人得〳〵ふ觸れば必ず病む

○高杉院　○真光院　○般若院

○西方院　檀契岡部庶　○正觀院

○徳藏院　○櫻樹院　○南性院

○西生院　檀契木下庶　○本覺院

○南藏院　檀契　柳庶　○上智院

□天滿宮　國城院の南方にあり往還より少し入る処にて小路とす神小路とも

相傳ふ天暦年間雅真上人一山の火災を歎んでふ勧請し奉りしより後一遍上人神の夢を蒙りて此小卓湯を〳〵

○定光院　○福生院

○金剛院　○淨玉院

○金剛頂院　○寂靜院

○徳善院　檀契　小笠原庶　内藤大和庶　平野一家

○普門院　○曼荼羅院

□千手院橋　千手院谷より小田原谷へ架す

小田原谷

長明無心集

小田原といふ寺ある教快といふ人ありけり後は高野に住けるが本中院谷及南谷の東の方つゞきの北東の方に當る旧東別所といふ壇上の東二丁許ふ當る城州小田原教快上人の住せし地なるをもつて号くるなり

新しき水瓶の様なるものを儲けて殊ふ執ぢやひ奥院へ參ふりけり彼所にて念誦して一心に信仰しけるときよの水瓶をおりひ出してそゝぐ事を人や取もてゆくと覚えしかど更に不審もせず心一向も非ざりけるまゝ由ふくらゝかに捨てかへりぬ

教快上人の弥勒堂の条下ふ委し

満山並鬼

十八景

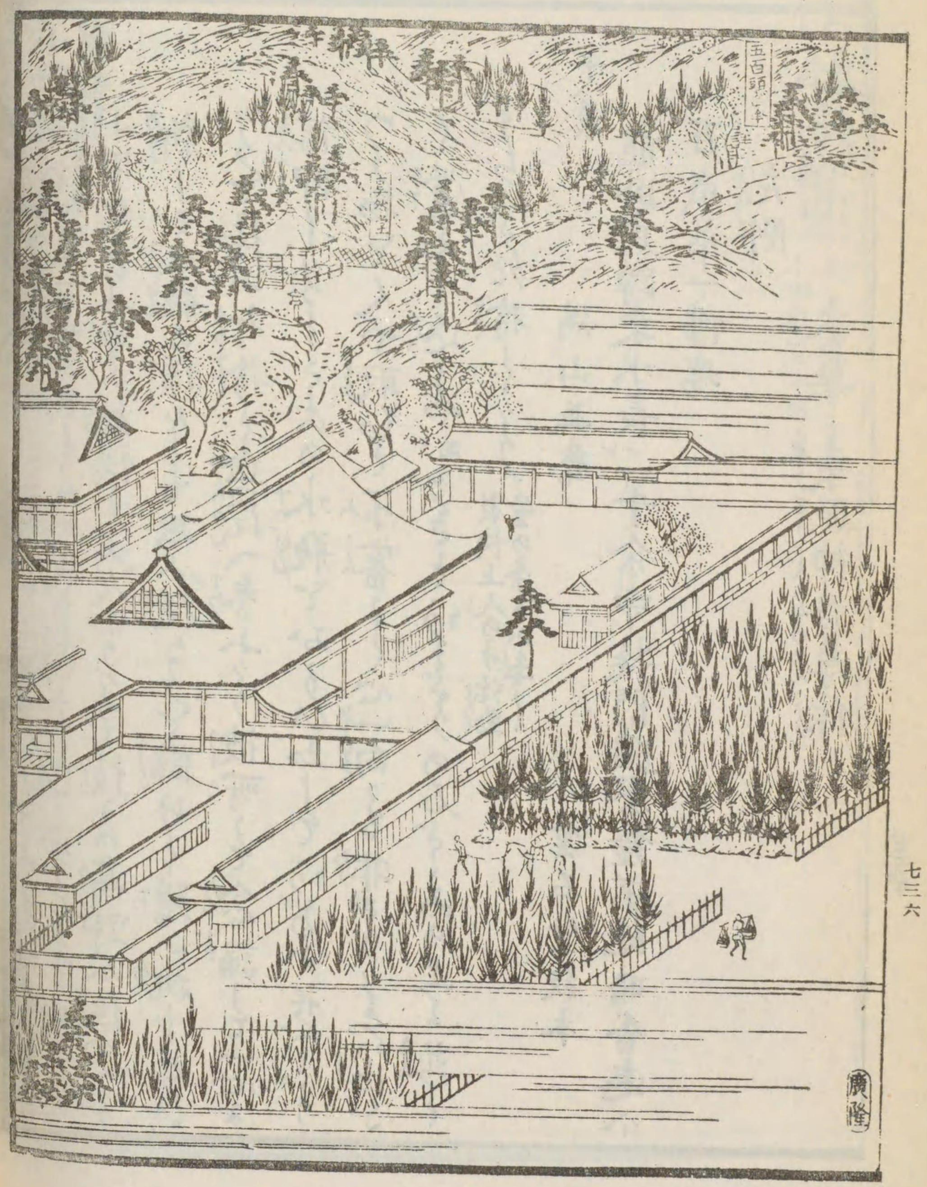
龍卧虎蹲東水長二千余寺接門牆磬鐘不絶暗香遠八

百歳華一佛場

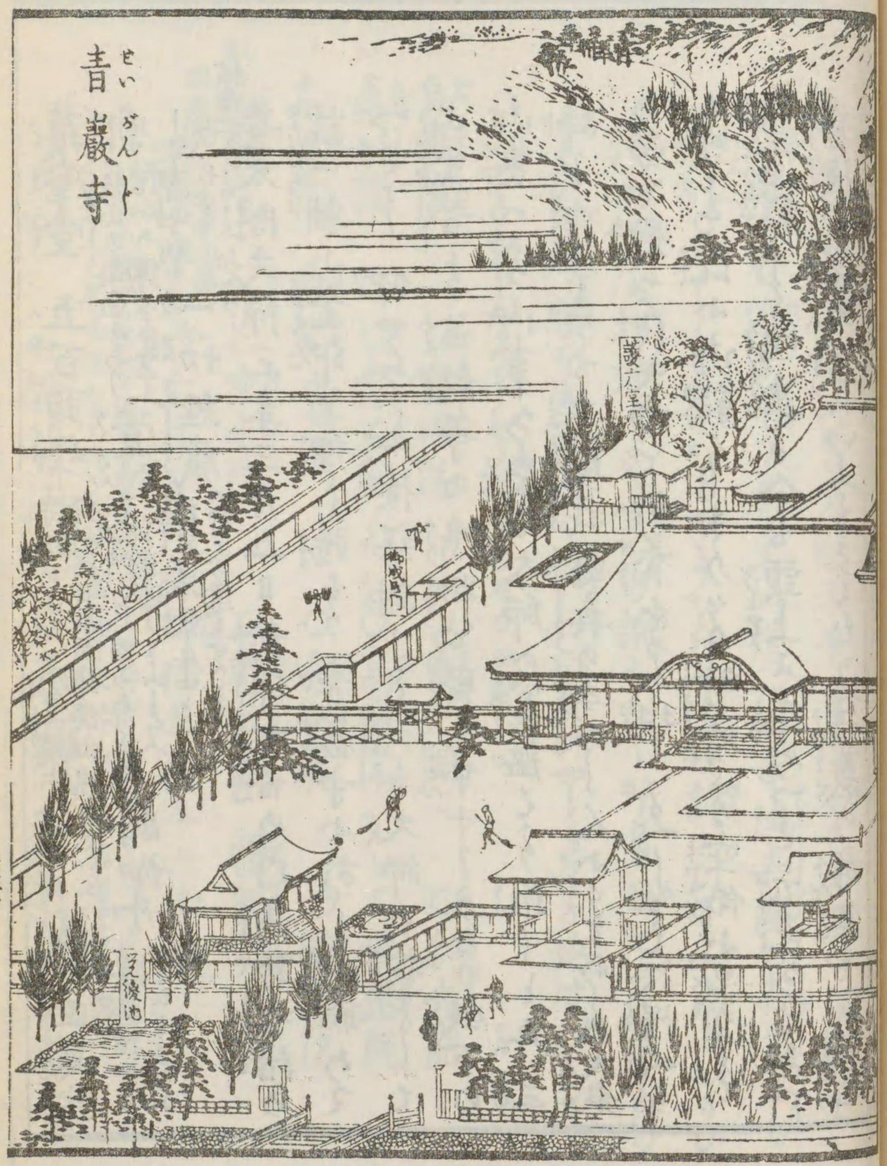
尤側

○青巌寺　本尊　東照神君尊像

雲石堂寂本



青巖寺（せいがんじ）



護摩堂　五百頭峰　持後の山をいふ覚鑁上人求聞持ご修行の日五百羅漢出現をといふ　後僧正真然廟　後山の南面にあり僧正の傳なり今毎年　覚鑁池　門の外面にあり上人自掘なりといふ　閼伽井　真然僧正の穿らるゝ所にして清冷なり　一切経蔵　浪花浄栄居士といふ人の建立せしとぞ

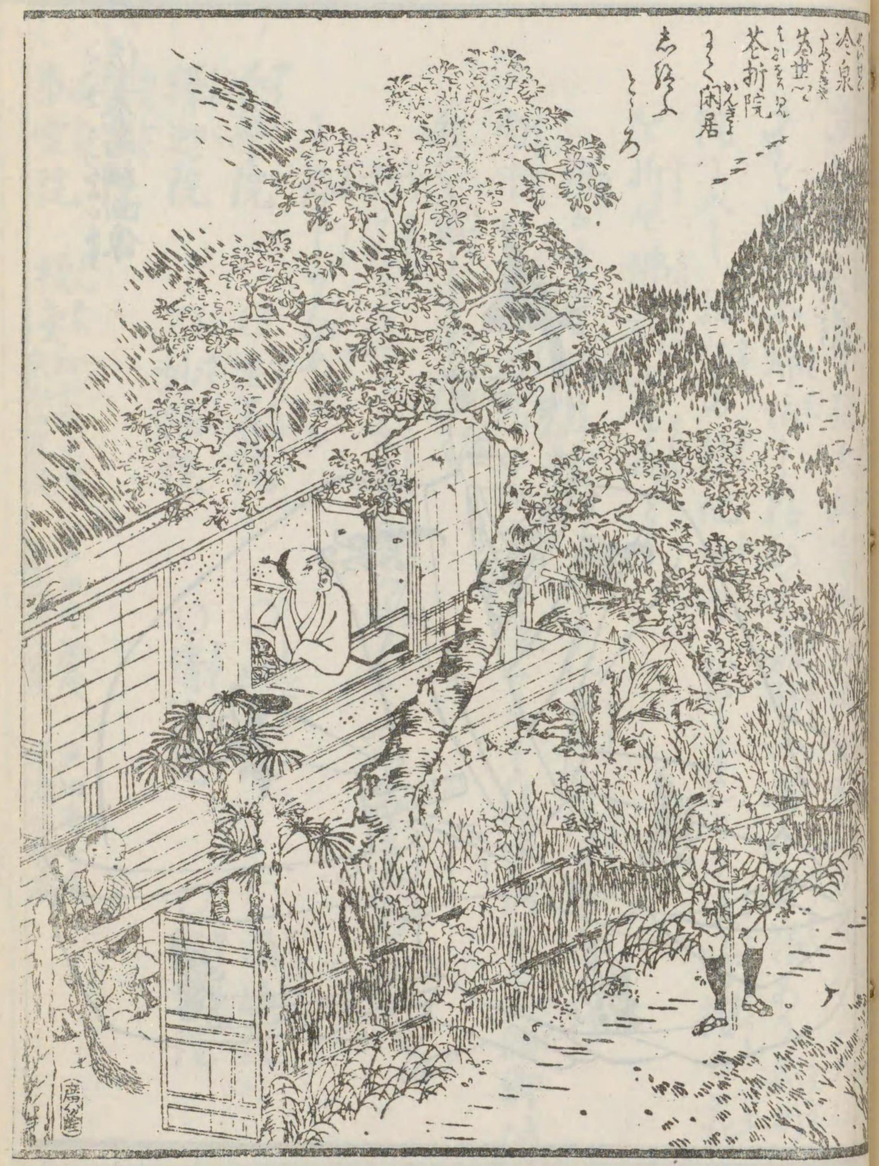
文禄雑記曰く豊太閤文禄三年三月五日新作十番の内高野参詣の謡一軸に金印を押して賜る青巌寺に於て御能あそばさし仰せらる山徒拝謝して云く大師の掟として山中昔より笛鼓等の鳴物を堅く禁ずる所なり殿下の御恵へさる御事なれども大師の冥鑑おそれあり難しと再三辞し申しまゐらすれども太閤我遊興の為ならんにこそあれ大衆の労を慰めんは大師を供養するに均しかるべしされば憚るべからずとて既に御能はじまりし時晴たる空俄に曇りて雷電夥しく鳴轟き今も頭上に落かゝる気色ありければ當役の諸大名はいふもさらなり桟敷の群集まで皆色を失ひて騒ぎあへるに太閤も千手院谷の山道を単騎にて兵庫まで遁れ去りたまふ此度一向寺法興隆の志あれば禁制なりしを是などのまゝをもなどかは許さるべきとおもひしに案に相違して少しの諂もなくかゝる目を見せられけるにぞ殊勝なる在世の徳行おもひやられて遊すべしとありがたき事なりとぞ仰られしとなん云云

○自證院　○高福院　○東光院　○和光院
○真如院　○尭王院　○高徳院　○覚證院
○高室院　檀契　北條家　○遍照院　○圓蔵院
○極楽院　○中生院　○報恩院　檀契　松平雲州侯

報恩院蔵護摩釜銘
明徳四年癸酉十月日　權律師仙尊行年六十歳

當山院々護摩壇を構へて修法怠る事なし故に古く傳へる護摩釜多しといへども銘あるものなし偶當院に此銘あるをとりてこゝに載す

○[illegible]院　○觀智院　○林性院　○壽福院



右側

○東善院　檀契　有栖川宮
○總眼院　○帝釋院
○圓增院　○眞城院
○蓮花院　○地福院
○密嚴院　○大善院
○福壽院　○威光院
○愛筭院　○普賢院
○養壽院　檀契　鳥居侯　本多侯
○玉藏院　檀契　松平周防侯　松平紀伊侯　松平丹波侯
○淨眞院　檀契　松平山城侯
○阿弥陀院　檀契　松平伊賀侯　稻垣信濃侯　稻垣若狹侯　大久保佐渡侯
○花折院

○愛染院　○光壽院
○修覺院　○最善院
○蓮德院　○花嚴院
○本乘院　○淨雲院
○乘福院　○天王院
○金藏院　○林德院
○萬生院
○中性院　檀契　奥平大膳侯　松平下總侯

佐々木高綱画像

泰雲院所蔵

京極黄門の曽孫大納言為世卿出家して明秋上人と申て密門に帰依し給ひ嘉暦四年に登嶺ありて花折院へ入給ひ誦経の外他事なくおはしまし或時櫻の花を折て佛前に手向給ひ

雖ㇾ有ㇾ折ㇾ之花二巻の佛ぞゆかしき我

句中に為世花折の四字を隠せる後中納言為綱卿此歌を感じ給ひ

折ㇾ花ㇾ之ㇾ人ㇾ不ㇾ知ㇾ之ㇾ名ㇾ

と添給ふものなるべし

○養学院　○宝善院

○釋迦院　○妙法院

○安楽院

○泰雲院　檀契　松平越中侯　戸田淡路侯　戸田采女侯

京極加賀侯　京極周防侯　米津伊勢侯

○真珠院　○南城院

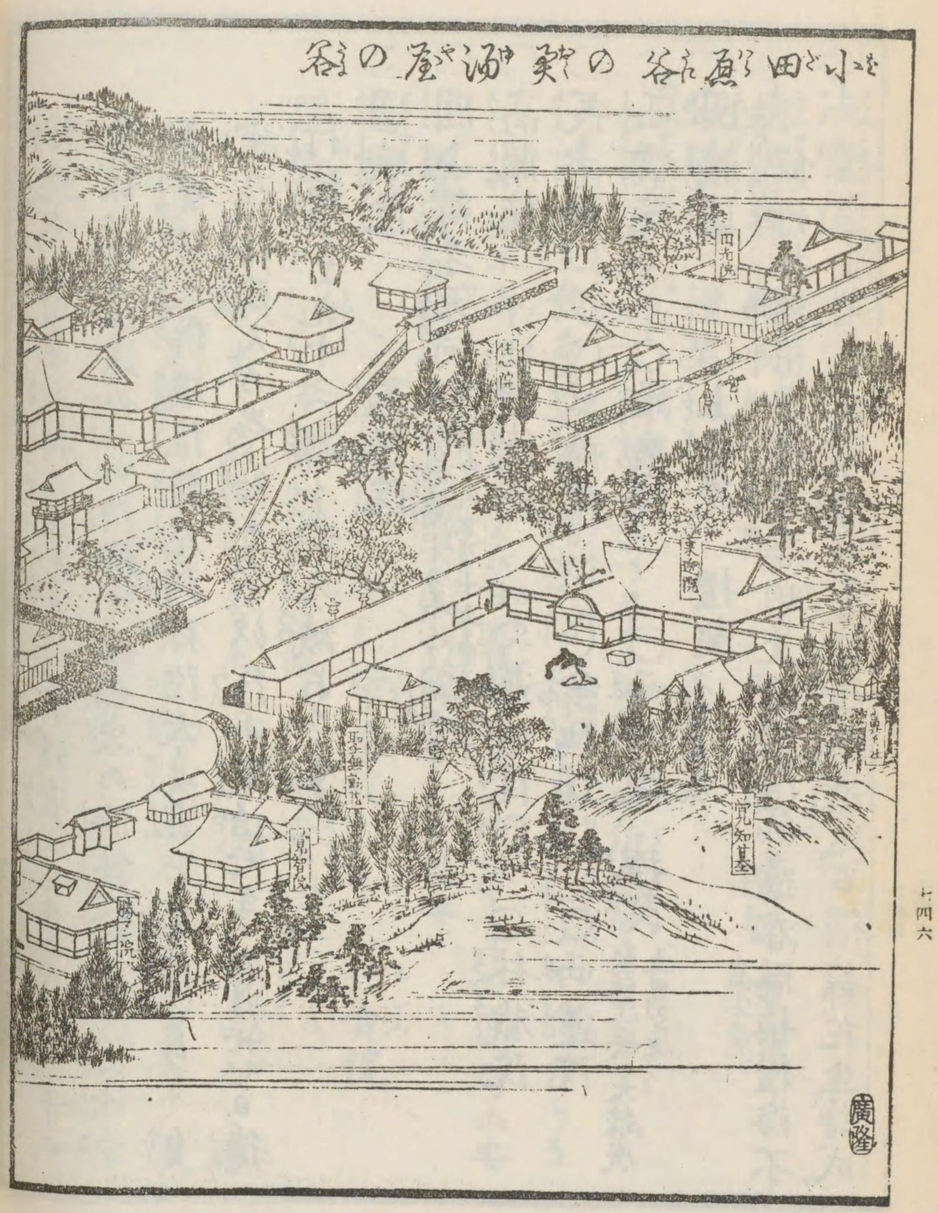
○清浄院　○宝珠院

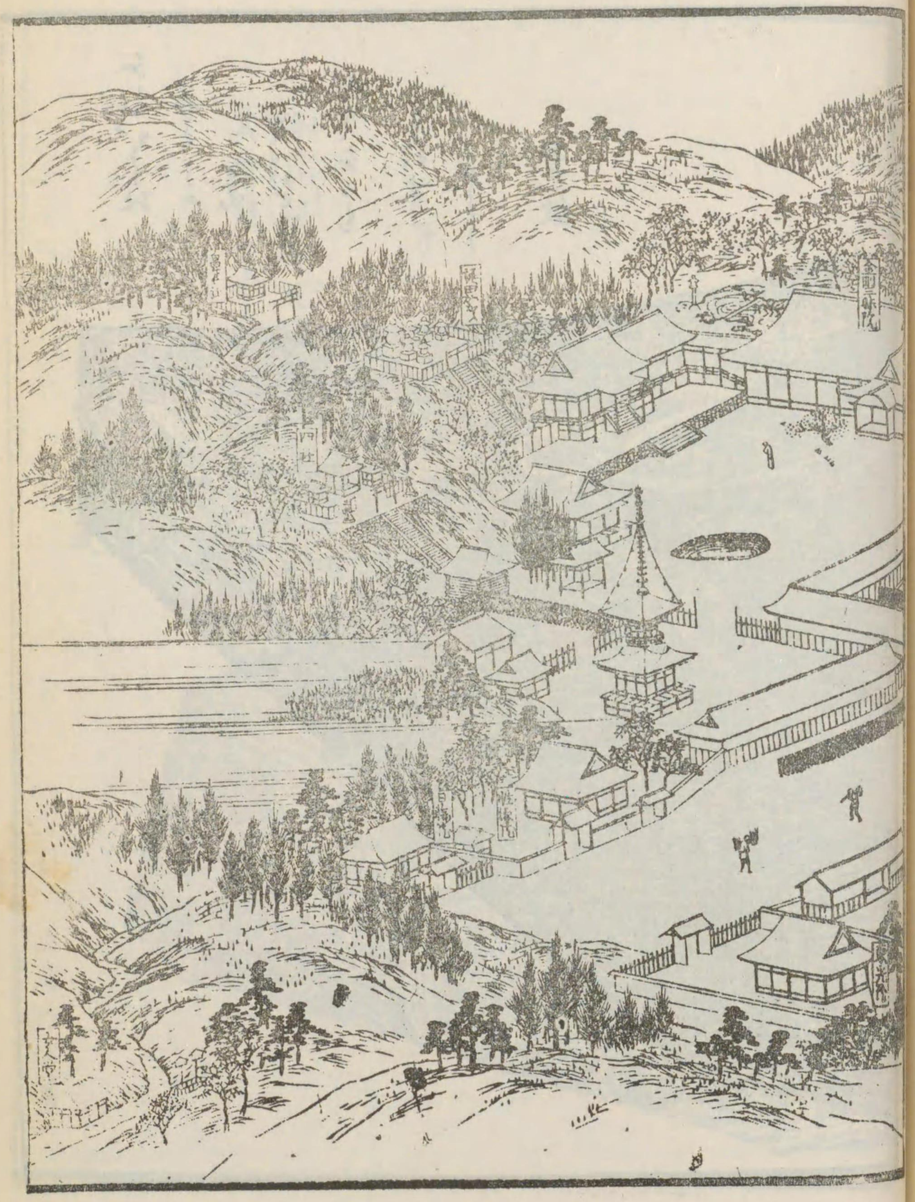
○法雲院　○龍泉院
○清涼院　擅契 井伊庄
○安養院　擅契 毛利庄
長禄寛正記
高倉殿御不例の事あり是ふよく〳〵御祈念のゆゑ小宮く社く
小御立願あり又貴僧高僧小仰く大法秘法を修ぜらる
三々遂ふ御他界あく〳〵日野殿の御沙汰として高野山安
養院ふ仰く御骨を奥院ふ納めやうさる 摘要
○光明院　○宝城院
□彌勒堂 一ふ淨土院とも云 本尊弥勒菩薩　○和合院
此堂ハ教快上人の草創なり上人曽く淨土の書蓮花を感
得を故ふ淨土院の號あり終ふ轉じく谷の名とみまろ教
快上人の京師の人なり幼時出家〳〵南都奥福寺ふ住む
壮年まをなるまと山城國久世郡小田原ふうつりまふ故ふ

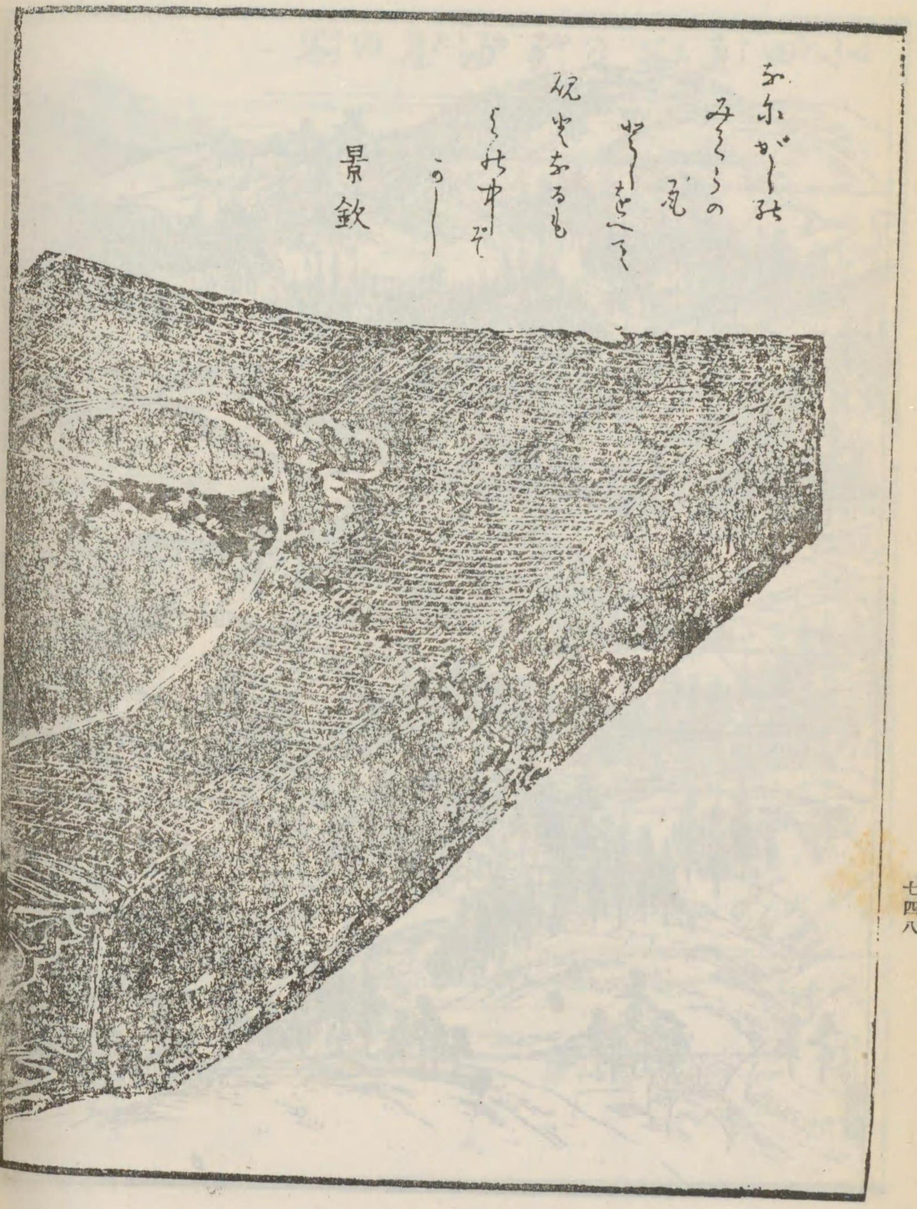
○法雲院　○龍池院
○巴陵院　擅契 相馬庄
高木庄

俗呼く小田原迎接房の聖と其後當山ふ來りて北余年の
春秋を送りまふ毎日の所作として西曳の修練弥陀の行法兼
て受持大佛頂陀羅尼阿弥陀大真言を念誦せらる自
余ら行法人の歩ふ及ばあり後ふ寛治七年五月廿七日徳
行積りて九十三齢ふて入滅ありとぞ

○圓城院　○善昌院
□圓山辯才天祠 大師勧請の天女及十五童子を安ます
○高聞院　○理徳院　○蓮蔵院
○長壽院　○萬福院　○抹蔵院
○金地院　○西蓮院
○正雲院　○光聚院
○西明院　擅契 松浦庄 大村庄 五島庄
○圓蔵院　○上蔵院　擅契 久留島庄
春川詩草 雨中遊上蔵院
脩竹林深出磬聲来梁烟景雨中清無邊春滿梅檀海不
住雲添覚率城風拂画簷松子落泉送石溜蘚花生詩成


小田原藩
酒井家の屋敷の谷
田中城
東照宮
宮地芝山
貫名海屋墓
黄昌隆


金剛峰寺



景欽

唐青龍寺瓦硯
其質鍊のごとし

金剛三昧院藏

廣陵縮寫

遊客依攔処時聽黃鶯喚晩晴

五河野武い指智ら兵勝と
縁起うも富ま山因像さ春の

ふもとゆも秋の宮や奥乃院　伊勢國南

○圓満院　○妙慶院
○浄土院　○等持院
○修善院　○見正院
○金剛三昧院　○閑松院
　正和二年　震筆の御假奉納の院使として登山のとき　○圓光院
　今剛三昧院の潅頂堂の額下の陳よ小書付ら　○正受院　○真如院
　○住心院

ふるなさうりのやまもとはを仏ちさとり我も迷ふ　大納言為兼卿

　弘安の春禁裏和歌の間を終ま花
　ようく被なとて名所百首被仰せ
　ふるく寺の四季の心をよみ侍ける
　時　前僧正の動ま山ふかき
　ふもとふるさふくるの神山ゆかなる門をたづね入べしう

直義朝臣奉納短冊寫　百二十枚の内
　二十四枚の歌なり

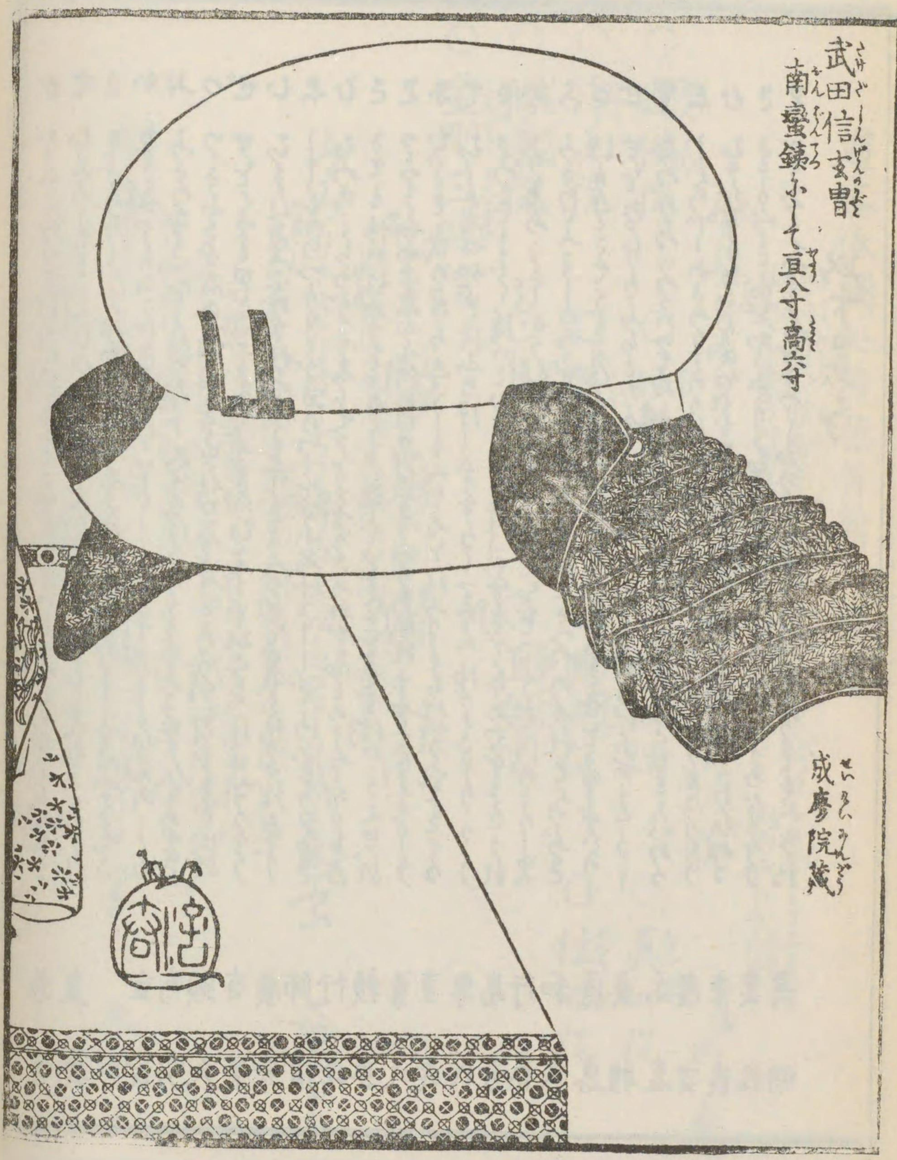
放鵬子

おなふそのうへはいかなるものうくいまはかぎりのみちもしらるるかなさそ
むるのうらよりそうきみちくりのおもかげをうつしてすめるいけのみつさ
そ雲の中ともろともなしくしてふるさとをいつるしぐれのかぜのおとさ
うらみもるもなをなしくしてふるさとをいつるしぐれのかぜのおとさ
ふるさとのみちをそうきれがるぬきはしもうきかぜのおとさ
もましめくこのうれみのうへもまきはしもうきかぜのおとさ
しのつりうるのつてをぶやもうそうきかぜのおとさ
むのうらのうらなみよるのうらかぜのおとさ
さそもちいのうらのうらなみよるのうらかぜのおとさ
つるやふもとのうらなみよるのうらかぜのおとさ
なごさ夜の月もうらなみよるのうらかぜのおとさ
もりくものおとれ山のほとぎすうらなみよるのうらかぜのおとさ
さろこさもぐ後いとものしほとぎすうらなみよるのうらかぜのおとさ
うろもあるかうれ月ぜのあとぎすうらなみよるのうらかぜのおとさ
ふろろこのみぜいまでもうらなみよるのうらかぜのおとさ
はりくそうさ花ろる月もうらなみよるのうらかぜのおとさ
せをなけろみちくへみのうらなみよるのうらかぜのおとさ
ものろいそんふるうらなみよるのうらかぜのおとさ
しのぐふろうこのれろるみうらなみよるのうらかぜのおとさ
むみびるちぐうのもあろうるうらなみよるのうらかぜのおとさ
さろぐさぐふりくちをめくへみのうらなみよるのうらかぜのおとさ

以下畧之

尊氏　重明
直義　茂有
　顕範
　廣秀
　師直
　行珍
　頼春
　尊氏
　直義
　尊氏
　為春
　行秀
　和氏
　道春
　貞恵
　尓頼
　為重
　慶雲
　重茂
　実性
　為明

武田信玄曽
南蛮鏡ふして直八寸高六寸



成慶院蔵

同肖像

武田道遥軒信綱の筆といふ當院の什宝なる事一方宝全書ふも粗みそうり印ん文ふ信春とあるを信綱の一名ふや

跋文

夫宝積経要品者示供養如来之真理著空寂自性之玄寔是修行大乗之真路證得菩提之通門也是以新二一軸奉納高野山金剛三昧院以為常住持経矣是伽葉會分初則余自書之其次夢窓國師書之優婆離會分則征夷大将軍書之抑先年因或人感霊夢以南無釋迦佛全身舎利之數字各冠和歌之首句以詠之既而成軸矣為令彼詠歌之衆結良縁寓真文於其紙背者也伏冀三十一字之綺語契當二嶺菩提二十餘輩之歌人成就二一世願樂普施餘薫普及二一衆一敬白

康永三年十月日

従三位左兵衛督兼相摸守源朝臣直義

作者 二十六人 短冊百枚

○光明院御製六枚 ( )

○高階駿河守重茂二枚 ○多々羅合戦之時奉對二将軍一引和漢両朝之例人歟

○源尊氏公 十三枚 ○源直義卿 十二枚

○權中納言為明七枚 二條

○少納言藤原有範 家為卿孫 五枚 南家儒 三位藤範男

○高階武蔵守師直 一枚 法名道常

○讃岐守頼春 三枚 細川八郎太郎公頼男 観應三年閏二月二十四日於七條川原討死

○權中納言為秀 五枚 為相卿男

○阿波守和氏 五枚 細川公頼男

○渋河丹波守貞頼 三枚 義春男 直義男

○實性 五枚 實性法印也 法印長舜男

○兼好 五枚 治部少輔 雑類男

○静辨 二枚 按察使 法印光成男

○光政 一枚 秋山太郎 源光定男

○季行 一枚 傳不詳

以上

○陸奥守顕氏 三枚 細川八郎 四郎頼貞男

○道恵 五枚 俗名尤馬權頭源泰直 嘉吉元年赤松宝寺之

○尓忌 五枚 不詳

○高範 二枚 傳不詳

○栗飯原下總守清胤 一枚 栗飯原氏光一名於

鹿轢峠

高野山
より熊野
への往還
此峠より
壇場の諸
伽藍寺院
とも眼下
みゆ女人堂
迄りをきれば
あのとふふ
出るなり

三寸峠

花もの
振袖
峠より
をゝうみとも
くびさし
のべく
おも
壇場

○日輪院　○東光院
○聖無動院　○來迎院
檀契　伊東庵
○善壽院　○醫王院
○法門院　○德城院
○西門院　檀契　紀府三浦本寺
○成慶院　檀契　内藤山城庵　秋月庵　久田庵　勝醫院　○覺智院
押沢伊豆庵　松平甲斐守庵　松平信濃庵　○勢觀院
○最乘院　○仁王院　○宝藏院　○常住院
□轆轤峠　小田原谷の門湯屋谷の奥にあり　○昌藏院　○安樂院
山處を大瀧口と云　熊野街道なり　女人堂　茶屋あり　○教學院　○威乘院

往生院谷

左側

○吉祥院　○林泉院　○智身院　○相應院
○西光院　○威福院　○安住院　○正仙院

小田原谷の奥すづきを生還の左右に高き壇上の系　女子修行あり　此往生院谷の奥にあり

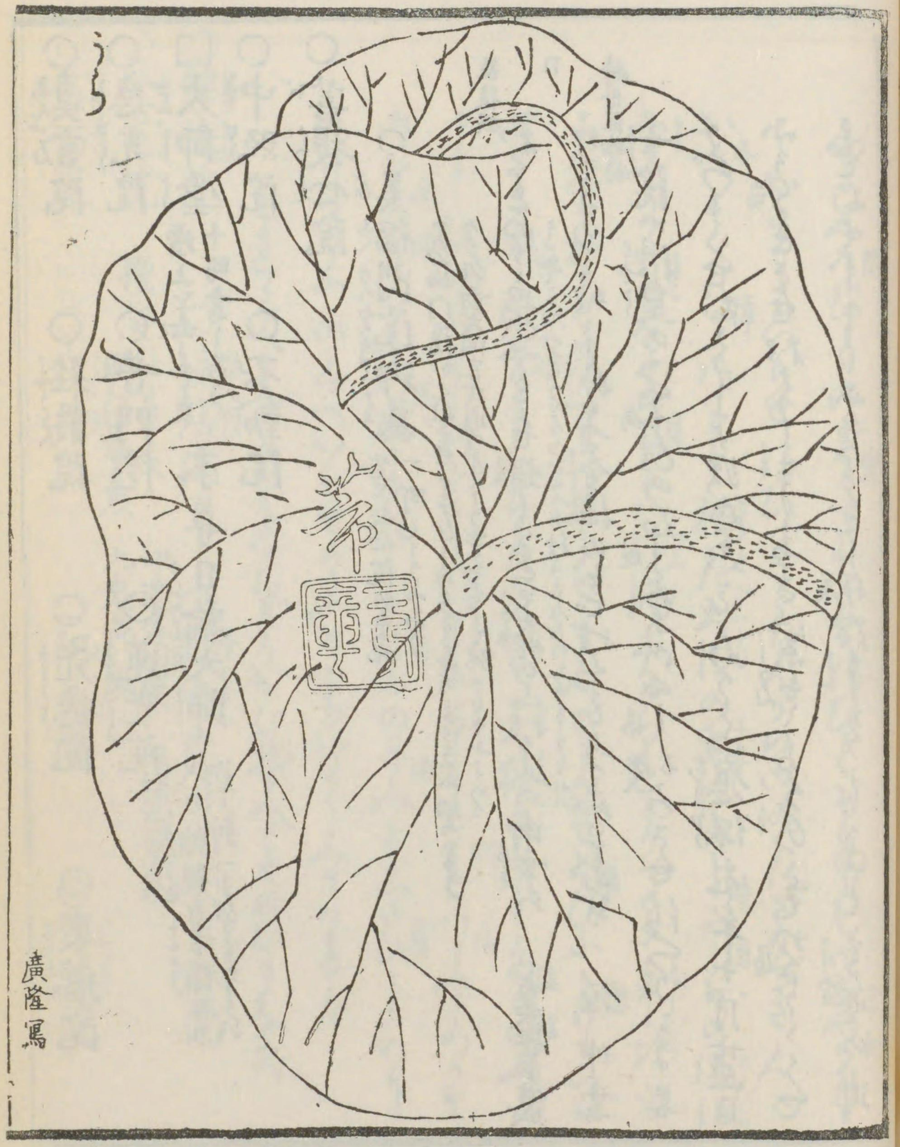
○成願院　○正福院
○成福院　檀契　毛利甲斐庵　宗　對馬庵　○正泉院
岩城伊豫庵　毛利讃岐庵
□阿彌陀堂　草創不詳壇上を去ること東十丁余
○藥師院　○醫王院　○宝善院
○本願院　檀契　千葉庵　竜造寺庵　鍋島庵
○三宝院　檀契　二本松庵　松平河内庵　溝口伯耆庵
○東藏院　○榮泉院　○不動院
○善明院　○龍城院　中山志摩庵
○高城院　○宝持院
○遍照光院　檀契　南部大膳庵　南部丹波庵
檀契　小笠原大膳庵　小笠原備後庵
○鉾池院　○地藏院　檀契　分部大溝庵
檀契　分部大溝庵

右側

○慈眼院　○蓮花寺　京極壹岐庵　土屋相摸庵
○持明院　檀契　京極長門庵　米倉丹後庵　卯州武田家　江府淺井庵

米元章荷葉硯　大さ圖のごとし

成福院藏



廣隆寫

○真言院　○荘厳院
○慈光院　○普門院
□大師堂　壇上を去ること東十町余にあり　本尊日輪大師　入日輪観の像なり　草創つまびらかならず
○中照院　○不動院
○菩提心院
○美福門院御墓　菩提心院の東北一町余福門院かくれさせ給ひしのち此所にをさめ奉りて御堂をたてられしとぞ　前大納言成通のよみ給ひける
荒れ後の
月
おもかげの霜にや冴えん秋の夜の
袖ふきかへす山おろしの風
結ひ継物語
女院いまは皇の宮ぞかし病延
ふるさとをこひわびつゝや秋の月
ふかくもすめる袖の涙に
おなじくは春の夜ばかりとどめおきて
ふるさと人に山明
ふるさとをせめてまことのあさぢふに
おもかげ残せ庭の月
○光徳院　○来福院
○蓮光院

○双樹院　○妙法院
○北室院　檀契　仙臺侯　肥後中將侯　忍波　余波
○心福院　○宝持院
○松雲院　○吉祥院
○阿叉院　○密蔵院

伊達遠州侯　田村左京侯　九鬼長門侯

地藏院藏
大師行狀記中
俗典讚仰の條
繪筆者不詳
詞近衛道嗣公書

廣隆寺緣起

備後守時通美福門院の御遺骨を首ふりみく高野山へ上るの図

みくさもん　扇花

月ふく風の音

○福寿院

□萱堂　壇上ヨり東十五町許にあり

本堂　本尊観世音　西天竺より将来の霊像なり　宝塔　鎮守大日　御影堂　大師之像在如親王筆

蓮池　観音の閼伽井　四所明神社　楼門を廃　梵鐘

総門　麒麟鳳亀竜ハ左甚五郎作とぞ　○近衛殿墓所　境内にあり

新今昔物語

今ハむかし覚心といふ念仏者ありけり　紀伊国由良の湊の漁者なりしが発心して法灯国師にしたがひ寝食をわすれてつとめしが

のちに里の事をきゝつゝ高野山にのぼりてかやぶける菴をむすびけり

ひさしく住なれしかば萱の庵とよばれけるの御名ありけりと

又弟子どもかゝりつゝ庵を訪ひすましを国師都よりおくりける

おのづから心のすむか紀れたる萱のおくの暁の月

とよまれしが覚心くちとく

おのづから心もすめど身もすまず萱の下ふの露の月かけ

とかへしけれはおもしろく国師感ありてそれの人々崇しあひく

萱庵の名をいひつたへ萱の菴とよびけるとなん

詠百首狂哥　莉萱

かやのやの世を秋かぜにおもふらん　しかもうかれくるとおもふらん　入安

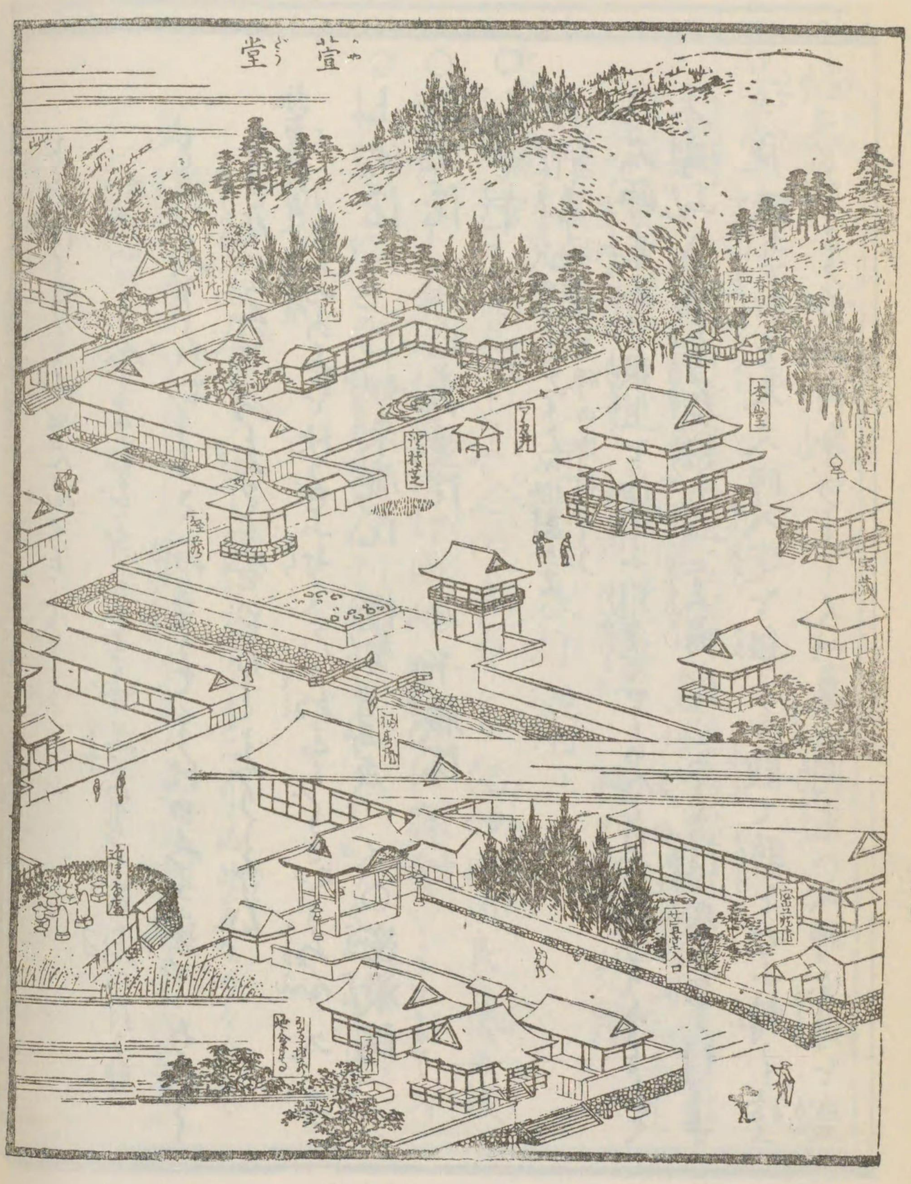
○上池院　○如来蔵院　檀契　有馬侯　○密厳院

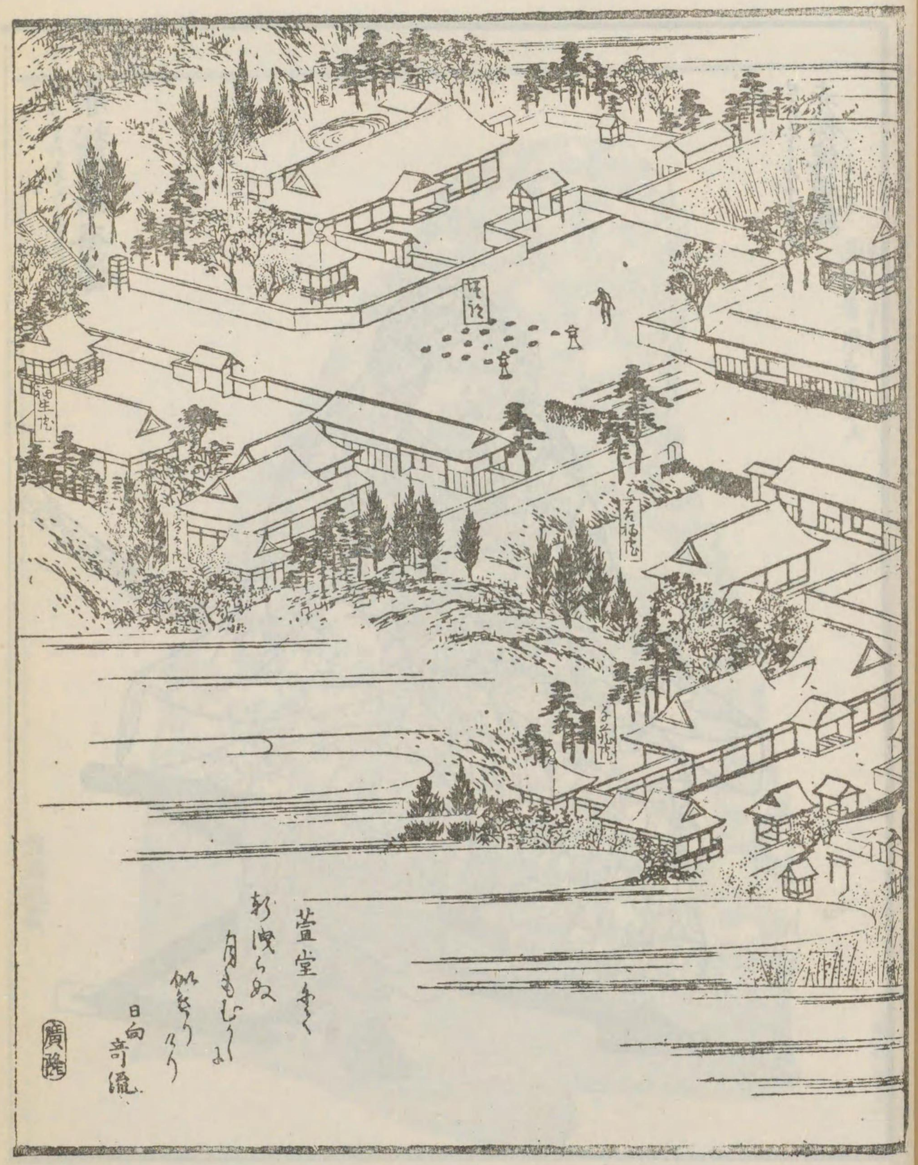
○福生院　○寿量院　○千蔵院

○延命寺

○引導地蔵　又ちうけんの地蔵とも云　大師の御作なり

大師末世の衆生を浄土に引導せしめんとの方便なりとかやて満山の緇素葬棺を此堂前にとゞめて後葬田をもて引導地蔵と称す又大師入定を感じて顔を胸を東に転し給ふとぞまた妙相肉身のごとし又此尊の円光へ大師宝珠を盛


蓮堂
本堂
宝蔵
上世院
浄持堂
了々井


蓮堂
上世院
浄持堂
了々井
本堂
宝蔵
蓮堂
日向守源